
熱の手

壬哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱の手

【Zコード】

N2185D

【作者名】

壬哉

【あらすじ】

極普通の高校生。学校でも、友達を第一に大事にしたい自分。でも、そんな中友達と自分の異変に気付いて行く。そんな物語。

よく見る夢は、炎に囲まれ、周りには誰もいない。たった一人で「どうしてこんなことをしてんだろ……」と、自分が炎を点けたかのような感想を持っていた。

周りは赤と黒しかなく、それが逆に不気味な気分にさせている。他には特に変わったことはなかった。

今までは。

生まれてきてから、何の根拠もなく考えてしまうことがある。自分への問い掛け。「どうして生まれてきましたのだろう」と、「生まれていてはいけない」だ。

一つは問い合わせだが、もう一つの感情だけは、自分には理解ができなかつた。どうして自分には理解できないことを、自分に言い聞かせる呪文のように、グルグルと頭の中を彷徨い続けているのだろうかと。

「泣なきつ。今日どうか寄つていいくだらう?」

「あたりめえじゃん? 学校帰りは、騒ぐ遊ぶ叫ぶだろ?」

疑問に追われながらも、必死に高校生活をエンジョイしているつもりだ。

友達も不自由なくできだし、友達を大事にしないでなにをするんだという性格な俺は、自分がしてやれるることは頼まれればするなり、手伝うなりした。それしか自分にできることはないと思ったからだ。小さい頃から、特別何かができるわけも、アプローチ出来る何かもなかつた。

一つ言つなら、他人よりも、左手が熱をこみやすいことだった。

利き手ならば少しは納得できたものの、期待を外すこと利き手は右で、投げ手も右だ。

「ば・あ・か。こんな雨のなかどうやつて寄り道する気だよ」

寄り道に誘つた相澤の後ろから、思いつきり遠慮を知らずに、頭

を狙つて前の席の相澤の筆箱を振り下ろした。

相澤の席は、窓の外眺めていたおれらにとつて、かなりの死角となつていた。

「バカはお前だ杵島！^{きしま} 筆入れで殴るなら、こいつの筆入れを使え

つ

問題はそこなのだろうか。

雨が降つてることを忘れるためにも、こいつってばか騒ぎの話をしていたそこに、雨の話を持ち出すなど。そこに怒るつもりでいた俺は、話のすれ違いに素直に驚いた。

相澤の筆入れよりも、俺の筆入れのほうが、素材的にも中身的にもやわらかく、殴られても普通の筆入れで殴られるよか、よっぽど痛くはなかつた。比べればの話だ。

「だつて丁度近場にあつたのがお前のだつたんだ。筆入れに躙がなつていなかつた」

「お前は天才的なバカだな。筆入れに躙なんてできるものか」

基本的には俺を入れたこの三人で行動することがおおい。

杵島と相澤はよくこういつた怒り場所が理解できない内容の喧嘩をする仲良しだ。

最初顔を会わせたときからこんな感じだつたから、昔からの友達なのかと思って聞いたが、「昔も今もこんなやつとあつたのは今が初めてだ」と、二人息をあわせていつた。

しかし、これは二人の言葉を混ぜていつただけであつて、二人は少々違うようで同じようなことをいつていたかもしれない。

初対面にしては凄く馴々しい気がした。そんな二人が羨ましいと思いついたのは、いつからだろうか。

ちみつちやいことで口論し、ブイツと顔をそらし、相手が謝つてくれるまで俺は知らないぞと言つてみづから空気を一人して醸し出されている。

相澤は杵島が俺の近くにいないとき。杵島は相澤が俺の近くにいないとき。どうしてか俺に相談まがいなことをしてくる。どちらかといえば愚痴なのだが、やっぱり一人が怒っているところを理解するのは、至極困難だ。だから共感も慰めることすらない。

「どうすればそこで怒ることができるんだ?」

と言いつになるのを毎度も息を止め、笑いを堪えてしまつ。

何せ一人は本気で口論をするのだ。

「女子つてすごいよな」

「……何をいきなり」

口論中、空気をふつつり切るかのように体をひねつて教室内にむかせ、雨に動搖しない女子を遠目に見ながらもそういつた。

二人は口論を一旦休止した。

「だつてさ、雨降つたつて女子は折り畳みいつも常備だからさ」「だつたらお前も持つてくれればいいと思つ……」

杵島は少し呆れるような口調で言つ。

確かにとも思えるけれども、凄く女々しいイメージがあるため、どうしてもためらつてしまつ。それに何より、今日の朝は雨なんか降るような天氣ではなかつた。

よく当たると評判の天氣予報だつて、今日一日快晴で、洗濯日和だといつていた。

母は洗濯物を干す準備をし、登校中には、鼻歌を歌いながらも愉快に洗濯物を干す主婦も見た。

きっと今頃、急いで力強い雨に当たつた洗濯物を引つ張り取つているだろう。そして天氣予報にブツブツ文句を言いながら、再び洗濯機にそれを放り投げていることだらう。

「杵島は持つてきたの?」

「んな女々しいもの持つてくるもんか」

同意見だ。

そう思わない人もいるのだろうが、少なくともおれらは思う側だつた。

「そりゃ、なら俺は先帰るかな」

「言いだしたのは相澤だ。

「いきなり立ち上がり、にやりと微笑んでいる。

「もしかしてお前」と俺が。

「女々しいものを持つてきていると!?」と杵島が言った。

「おうよ。おまえら曰く女々しい女々ちゃんをもつてきていらむ」

誇らしげに相澤が言う。

「相澤様どうか一緒に入れてくれないでしょ?」

ギュッと相澤をつかみ、助けを求めるように、じつと見つめる。

「ふつ……キスしてくれたら入れてやつてもいいかもな」

なんて、軽く格好つけて言う相澤に、俺はたちあがり杵島と回れ右をして、教室から出ようとしながら言う。

「購買で傘買つてこよー」

「割勘して相合しねえ?」

「杵島ナイスアイティア」

「いや冗談だから! 退くな! 俺なしで話をすすめないでくれ」

ガシッとオレらの肩をつかみ食い止めてきた。

もちろんのこと土砂降りの雨は、放課後までも弛むことなく降り続けた。

玄関には傘を開き、いまにでも校外にでる人や、もうすでに出了人。傘がなくて笑いながらもどうしようかといつている男子たちが見えた。

校内にいる必要もないし、いつもの勢いのまま、杵島と相合傘をし、右手に相澤と挟まれながらもいつもの道程を、何気なく意味を成さない会話をしながら帰つていった。

三人とも別々の地区だからこそ、途中の交差点で三人ばらばらになる。朝は、そこで三人バッタリ会つ。

特に前からそこで会おうなどという計画や、約束なんてものはしていない。ただ、たまたま登校時間が重なっただけなのだ。

ジャンケンで負けたため、杵島と買った傘は杵島行き。土砂降りのなか濡れて帰るという運命を背負った自分。ジャンケンの存在を恨んだ瞬間かもしれない。

じゃあなど手を軽く振りながらも、相澤は右手の信号が青になつたその時歩きだした。

「信号が青になるまで一緒にいてやるよ」

杵島はくすっと微笑みながらも、真つすぐの道を行くため、目の前の信号が青になるまで待つ俺を、信号なんて関係の無い左側に歩いていく杵島は待っていてくれた。

「悪いね」

「いえいえ。ハイシャさんが余計な時間まで雨に当たり風邪を引かないためにね」

「歯医者さん？」

首を傾げながらも俺は杵島を見上げた。

「敗者復活戦の敗者。要はジャンケンの敗者だ」

「ああ。なるほど。勝者さんはいいですね、信号なんて七面倒な物を利用しなくつて」

「良いだろ。場所は譲らねえぞ」

「いいよ。学校帰りに斜面を上るだなんて、余計に疲れるような道はゴメンだ」

杵島の方向は、少しだけ斜面であり、それが帰りに上り坂になるという疲れるような道程だ。

それならば、信号をじっくり待つなり、信号無視をするなりしたほうが、平和に生きていけるような気がした。

「確かに。まあ、風邪引かねえようにこれを貸してやる。ちよつと傘持つて」

すつと傘を差しだしてくるものだから、受け取りながらもボソボソと質問をする。

「傘を譲ってくれるの？」

「ちやうわボケエイ」

笑いながらもやういいながら、学生服の上を脱ぎワイシャツのみになる。

脱いだ上着を俺のうえにまわつとかけ、ポンポンシと一度ほどたたき、傘を取り上げられた。

「えつこれじやあ杵島が風邪引くぞ？」

「引いたとしてもお前よりはひどくはないだろ？」

「だとしても」

「いいから。そういうときはありがとうってこうんだよー。」

「……ありがとう」

「よく言えました。ほら青だぞ」

「うん。じゃあまた明日ね」

「おう」

青なのを確認し、走りだした。

フツと後ろを振り向くと、見えなくなるまで待つていてくれるつもりなのか、まだわからんないや杵島の姿が見えた。

何だかそれが、杵島達を見る、最期な気がした。

そんな気がするのは今日だけのことじゃない。

スッと熱の籠もりはじめた左手の甲を右手で軽く擦りながら、雨の中を走り抜けた。

自分がだけが、みんなの流れから逆らっているような気がした。

それはただ俺の家の方向に、通りている学校よりもレベルが高く、近い高校があるため、そこから下校してくる生徒で塗れるから。水飛沫を作るよう走り去る学生や、傘をさしてのんきに歩く学生。みんながみんな、一点だけを見つめ、自分とは違うところに消え去ってしまうのではないだろうかと。曇りの日になると特に不安になる。

住宅が並んでいるとお出でになると、田舎が見える。

いつもは人通りがないというわけではないのだが、雨だからか、

人が歩いている様子も、窓から外を眺める人もいなさそうだ。

辛氣臭い町中にでも来たかのようだ。

土砂降りで、暗いせいなのか、家に近づいていくなり家の前に入影がある。ただぼんやりと、家を眺めるだけのようだ。

でも近づいていくと、2つの異変に気付いた。

(熱い……)

近づくにつれて、左手が燃えるかのように熱くなつていく気がした。

もう一つの異変は、そのつゝ立つていてる男の人だろうの異変だ。男の人は雨のなか、傘をさすわけでも、雨宿りができるような位置にいるわけでもないのに、雨に濡れる様子が無い。その人の周りが、見えない何かに包まれているかのようだ。

いつのまにか俺は足を止めていた。

杵島の学ランから、雨がしみ込んでいるのを、俺は頭に感じられる。

雨は確かに降り続けている。

地面を叩き、周りの音をも叩き消すかのように力強く降り続く。近づいていくべきか、ここでこの人が去つてくれるのを、じつくりと待つべきか。今の俺には、ただぼんやりと歎み続けるしかないのだろうか。

雨は止んでくれない。

ジワジワと俺をびしょぬれにしていく。

退いてくれる様子はないが、俺の存在に気付いてくれたのか、ゆっくりとだが、首をむかせてきた。

怖いのか、肩がびくつと力強く跳ねてしまう。

「あの……ウチになにか？」

かなりの勇気を振り絞り、口がようやく開いた。

本当は自分の家ではなく、隣家をみていたのかもしない。少し

それは恥ずかしい氣もするのだが、そつだといふことを期待してもいた。

「君……氣を付けたほうがいいよ」

「えつ……？」

スラッシュした、透き通るような声だった。

今にでも消えてしまうのではないだろうかといふようなこえを、俺は確かに聞いていた。

こんな土砂降りのなか、数歩はなれている人の声を、すぐ耳元で聞き取っていた。

一瞬にして体中に鳥肌がたつた。

「君には守れる？ 人を……大事な人を」

言つている内容が唐突過ぎて、うまく理解できずに、瞬きをした瞬間、数歩離れていたはずの男の人が。

本当に一瞬だけの瞬きだったのに。

その間にこんな。今にでもぶつかるかのような位置に、男の人が変わらぬ表情で立っていた。

声を出して驚く暇さえなく、俺の意識は遠退いていた。

第1話（後書き）

滅多に書かないファンタジーものです。
更新がすこく遅かたりすることもありますが、最後まで付き合つ
てくださるととても嬉しいです。
これからよろしくお願いします。
時代は現代ものと一応してもらっていますが、不安などござります。
一応希望として現代とさせていただきます。

（ああ……杵島に制服返さなきや。つていうかあれかひびつしたんだっけ？つていうか……頭痛い……）

頭痛で田を覚ますところのも、素晴らしい田覚めが悪い。しかも、当たり前なのが意識を手放してからの記憶がないに等しい気分だ。

雨が当たっている様子はない。
寒い気もない。

熱くなっていた左手も、なんとか治まつてはいる気がする。
真つ暗な中、今の状況を把握しようとするが、まったく頭は機能しないし、田蓋も開けられる気はない。
何もかもにやる気をなくした子供が、昼寝をして、その睡魔に負けて夜まで寝続けたあの気分だ。

寝すぎて頭は痛いけど、このまま寝ていれば治るような、そんな錯覚を覚え、再び眠りにつこうとしてしまひ。

ただ今、俺がそんな心境だった。苦しくて、痛くて辛くて。田を覚ましたら、一日がただの夢で、学校に遅刻で。もうここにやヒビシドに再び潜り込んで、一度寝をしてしまおう。
きっとそのほうが安心できるだろう。

重い田蓋を必死に持ち上げるよつて、ゆっくりと開き、田の前をみる。

寝すぎたせいか、視点がきちんと合わず、ぼんやりとしている。ぼんやりとしているが、視界が基本的に田へ、確實田宅のビリもないというのがわかる。

視界はぼんやりとしてはいるのだが、自分の状態が仰向けになり、布団か何かに押されている気もする。

ベッドかどこかに寝ていいのだらうか。

「んつ……」

体の節々が痛い。

表面が薄く蝶^{ひつり}で固められ、それを必死に外そうとしたときになる、ピキピキつという音が鳴るんぢやないかという感覚だ。

だんだんと視界が安定してきて、自分が今横になつていて、それを起こした場所が、保健室のよつたな作りの部屋だつた。でも、少し違うのは、保健室のような机みたいなものがなく、どちらかといえば病院のような匂いがする。

周りを見回してみても、誰かがいるわけでも無いのだが、病院らしい雰囲気がある。

やはり倒れたのは夢ではないのだらう。

病院だつたら、看護士を呼べるボタンがあるはずだ。

今まで入院というものをしたことがないから、はつきりと仕掛けとこつか、仕組みとこづようなものを知らない。でも、とりあえずはボタンを押してみるほうが良いだらう。でも、もしかしてこれは、何かの警報ボタンだつたらとおもつと、少しだけ背筋に冷たいものが通つた。

体をシーツに滑らせながらも、ボタンに手を触れたその時だつた。廊下のほうからパタパタと人が歩く程度の足音が聞こえてくる。ちゃんと人はいるようだ。

何だか安心し、ボタンを押そうとした手を引っ込ませる。

体も動くし、頭以外は不調はない。頭だけで看護師さんを呼ぶようなことをしてはいけない。とはおもつたが、目が覚めて誰もいない状況で、どうやってここに運ばれてきたのかも、まったくわかつていないので不安だ。

よくドラマや漫画など、空想のなかでは、目が覚めたらキラキラした瞳で、目覚めることに安心するように急に抱き締めたりと、そ

んなことすらも起きなかつたから、余計にこわい。

誰かがいれば、どうしてここにいるのかなど、説明してくれるだろつ。

一人残されたこの素朴感。

いつもはこいつとき、杵島や相澤がいろいろと助けてくれそつなのに、俺の記憶では、別れたばかりだ。

やつぱりあの時感じた、もう会えないかもしないとこつのはビン「P」なのだらうか。でもまだ俺は死んだわけではないだらう。ベッドの周りを見回すが、靴やスリッパなどのものは見当たらぬ。

い。

服はよく病院で見かける白い楽な服。とこつのか寝巻とこつのか。あれに名前はあるのだらうか。

(バスローブ？　いや。バスローブはもつとアファア感があるよつな気がするし……)

空はもうすでに晴天で、あの雨がまったく嘘かのよつた晴れ模様。今頃杵島達は何をしているだらう。

少なくとも一日はすぎていた。

裸足のまま床に立つ氣にはならない。

潔癖症というわけではないが、どうも許せないのだ。

そうなつてしまえば、今、自分がどういう状況になつてゐるのか、わからずに一日が過ぎていきました。

早く学校に行かなければ、杵島が上着が無いことに不満を持ち、怒つていることだらう。

やつするには、とりあえずこの状況から抜け出すしかなかつた。ゆつくつと俺はよつやくボタンを押した。

「特に異常は見当たらないね。どこか体に異変はないかい？」

「それを探すのが医者の仕事じゃないのだろうか。」

「ふとそう感じながらも、しみじみと頭痛のことを言つた。」

「それはきっと、倒れたときに頭を強く打つたからじゃないのだろうかと思つんだ。少しだけ脳震盪を起こしていたと思われます。倒れる前の記憶を知りたいのだが」

母さんは看護師さんのほうから連絡が行き、すぐに来るといつていた。でも、まさか自分が一週間も寝たきりだつたなんて、まったく感覚が無い。

ならば杵島は相当上着のことと頭を抱えているのではないだろうか。

「えっと……学校が終わって、友達とかえつて途中で別れて、で家の前に着いて」

「男の人……。そいういたかったのだが、口が拒んでいるかのように、声がうまく出なかつた。」

つい黙ってしまった俺に、先生が顔を覗き込んできた。

「着いた後？」

「き……記憶にありません……」

そういうしかなかつた。

でも殴られたり、蹴られたり。脅迫をされたり、脅されたりというようなことはされていない。それだけはいえると思う。

左手に熱がもって、男の人について。そんなことをいえるほど、俺は強くなんかなかつた。

「そうか。もしかしたら、殴られたか倒れたときにかに、強い衝撃で記憶を失っている可能性もありますね。救急車を呼んだのはお母さんです。同じ学校の上着を羽織つたような状態で、特に目立つた外傷はなく運ばれてきました」

「記憶がない？」

そんなわけがない。

倒れる前の記憶がある。あえて言わない。このまま騙したままで良いのだろうか。

学校に行つたら、やつぱり一番にあの二人に相談してみよつ。相談しても良いのだろうか……

俺の頭には、一つだけ確実に覚えている台詞があるのだ。

『君には守れる？ 人を……大事な人を』

男の人があつた言葉だ。

大事な人。

ついつい俺は押し黙つてしまつ。

泣なきやにとつての大事な人というのは、いつも一緒にいてくれる、相澤や杵島などの友達なまこだつた。

母さんと顔を会わせるなり、心配したと泣きじゃくつてきた。スーツ姿の父さんは、仕事から飛び出してきたかのようだつた。わざわざ仕事から抜けてきたのか。そう思つと少しだけうれしかつた。

医者から記憶障害のことを聞くなり、少しだけ驚いたというのか、不思議そうなのか、何とも表現できない顔つきだつた。

大事な人に手を出されることだけは許せない。もしあの人が、暴力団とかやくざとか、そういう人だとすれば斬し。杵島達を盾にとるだなんて、卑怯すぎる。

でも、あの人があつた人にはどうも見えないのだ。

むしろ温厚で、ひ弱な感じがする。

それに、そういう危ない人に、何か喧嘩を売るような行為はしていないはずだ。

言い方だつて、なにかをやさしく警告しているかのような感じだつた。特別危ない人ではない気がする。ただの思い過しだろうか。でも今の時代、いろんな問題を抱えている。拉致とか誘拐とか、国の人とか省の人とかだつて、暴力で捕まつたり、性的暴行を行ひ、警察に捕まるくらいに政治を行つてている人すら、信用ならない社会となつてきている。いい人面^{ひづら}や、病弱面^{びやくめん}して人を騙すような奴がいてもおかしくはない世の中だ。

俺は一日病院に一日ほど世話になり、退院した。
その次の日から、学校へ復活することを決めた。

「母さん。倒れたときに俺がもつてた、あの制服どうしたの？」
杵島のなんだけど

「ちゃんとクリーニングに出して返しましたよー。ほりつ、もひそろそろ時間！ 早くしないと遅刻するわよ」

「うん。じゃあ行つてくる」

ソファの横においておいたカバンを肩に掛け、リビングを出る。

「具合悪くなつたらすぐ保健室に行くのよ？」

「うんわかつてるよ」

もう大丈夫だ。あれから具合が悪いこともないし、頭痛だつて入院中に治つたし、これ以上休むわけには行かない。

杵島達は心配してくれているだろうか。

あいつらのことだから、いつもどおりに接してくるだろう。

久々の登校路。何だか数か月とおつていないうような景色に感じる。

「沚！？」

いつも杵島達と合流する場所で、杵島の声が聞こえてきた。

「杵島あ」

久々の杵島に顔を明るくさせる。

「おまえ大丈夫なのか？ 倒れたって……」

「おう！ もう大丈夫。でもごめんな？ 制服

「ばあか。そんなもん気にすんなよ」

「でも……」

「止！」

逆のほうからも、相澤の声が聞こえてきた。

「大丈夫か？ もう来て平気なのか？」

「大丈夫だよ。そんなひ弱に見えるかあ？」

「見える」

「どこがだよ。ボールが頭に当たつても、暢気に走り回れるやつだぞ？」

まさかひ弱に見られていただなんて。

でも心配してくれるのは素直にうれしい。

「そんなの関係ねえよ。でもぶつ倒れたって、何があつたんだよ」

「えつと……貧血？ 実はあんまり覚えてないんだよね」

軽く頭を掻きながらもうつすらとそういった。

「貧血？ 貧血って一週間も意識不明になるもんなのか？」

「えつ……杵島なんで意識不明だつてことまで？」

「先生が言つてた。病院まで見舞いに行つてみたけど、本当に意識ないみたいだつたし……」

「見舞い。来てくれたんだあ」

「ああ」

学校では、本当にいろんな人が心配してくれた。先生も、ほとんどの人気が。

チヤホヤされているのかもしれない。甘やかされているのかもしれない。そんなことは考えちゃいない。考えてはいけないと思つて

いる。

いつもどおりな毎日が再び続いてくれるだろうと信じ、内容がさっぱりな授業を聞き、放課後には補習を受けながらも、また一日が過ぎていく。

雨は降らず、補習を受けている俺を待つてくれていた杵島達と会流し、いつもの下校路を歩いた。

またあの人会いたい。そんな気持ちが広がっていく。

いつも通る石橋に足を踏みいれた。

そんなに長いわけではないその橋は、何気なく通り過ぎていくのが今までだった。

チロチロと流れていくような川の音が、夕日にあてられながらも、静かなこのおれら三人の間に聞こえてくる。

めったにこの時間にこの橋を通過することはなかつた。寄り道していて、夕日すらも沈んでいるか、いまだに太陽が出ている時間帯に通るかだ。だからか、夕日に照らされているこの川を見るのはすごく懐かしい気がした。

「止？」

じつと太陽側の上流を見つめていた俺に、もうすでに橋から離れた杵島達が振り向いていた。

「あつごめん」

再び夕日を見、杵島達の場所まで駆けていった。

その日の夜、何事も起きずに、本当にあの男の人夢だったかのように、平和すぎる。その平和がすごく怖い感じもしてくる。

風呂に入り、飯を食べ、歯を磨いて部屋に戻る。いつもの流れを行い、ベッドに潜り込んで携帯をいじる。

杵島から来たメール。相澤から来たメール。それをすべて返していき、ウトウトと眠りにつきはじめる。

まだ電気も付け放しで、時間だつてまだ夜の零時少し前だ。こ

んな時間帯に眠くなることなんてそういう滅多にない。

今まで病院生活で、就寝時間が早かつたから、それに合わせるもんで、身体がその時間で慣れてしまったのだ。

眠気を我慢することができず、「うすら」と眠りに入つていく。

真つ暗な中。

少しだけ懐かしく感じる炎の夢。

でもなにか、今までの夢とは少し違う。

ボーッと何気なくその炎を眺めていた。

感じるのは、今までとほちがく、炎に囲まれている感覚までもする。

怖いといつ気持ちと、淋しいといつ気持ち。好奇心といつものまでも芽生えている。

パチパチと炎が舞い上がる音までもリアルで、本当にその場にいるかのような感じだ。

(火玉はめどり……)

そう聞きたいたのに、口を開けない。いや開いているのかもしれないけれど、声が出てこない。

今自分はどうしているのか。

「おまえがやつたんだ」

一人の男の声が聞こえてくる。昔に聞いたことがあるような声だ。会つたことがあつたはずだ。だけどどうしても思い出せるような気がしない。

「火玉を放つたのは、おまえ自身だ」

(俺……?)

どこから聞こえてくるその声は、いくら待つてもそれ以上の返事は帰つてこなかつた。

ただ一人どこかも、どんな人がいるのかも、何を田指せば良いのかもわからない状況で取り残されている。

足を進めようとしても、足は動いてくれそうもない。

ただ身体が熱くなつてゐるといふことが感じるだけ。最初よりも、さつきよりも、だんだんと温度はあがつていく。

苦しくて、呼吸すらも儘ならない状況で。

(どうしよう……)

進む足はないけれど、疲れてしまがむ足はある。
疲れているわけではないのだろうけれど。

素朴で淋しくて。

ハツと田が覚めたのは、熱さが最高に熱くなつたときだつた。布団を捲り上げるよう上体を起こした。
息は荒く、体全体が左手を中心に熱を帯びてゐるようだつた。喉だつてカラカラだつた。

息を整えながらも部屋を見回すと、電気は付け放しだし、カーテンの向こう側だつて、まだまだ真っ暗だ。

時計を見るとまだ深夜の一時。

寝てからそんなに経つていなければ。なのにあんなに長く感じる夢は最悪だ。

ぱつちり目が覚めてしまつた所為で、一度寝ができる様子もない。手にもつている携帯が、ピコピコと光つていて。

ベッドから降りながらも、杵島か相澤からのメールを開き、部屋を出る。

誰も起きている様子はない。静かなりビングの戸を開け、台所のほうにメールの返信を打ちながらも足を進めた。

何処にどうなつてているのか、もう感覚で覚えている手でコップをとり、足で飲み物専用冷蔵庫をあける。

父さんが昔に一人暮らしをしていた頃使つていた小さい冷蔵庫だから俺の家には冷蔵庫が一台もある。

コップにコポコポと牛乳を左手でついでいく。

いつもよりも冷たく感じる牛乳。

でもそれは、異常に熱い左手がそう感じさせている。

いつも返事が早い一人から、なかなか返事は返つてこなかつた。時間が時間が仕方がないのかもしれない。

熱い喉に冷たい牛乳を通すなり、その使つたコップをその辺に放置し、携帯を持ってリビングを後にした。

深夜に外に出るだなんて初めて……いや懐かしいかもしれない。

中学のいつだつたかの日に、ちょっとだけ的好奇心で抜け出したことがあった。

空を見上げると本当に真っ暗で、その中に飲み込まれるかのように濁つて見える、ポツポツと広がつていてるお星さま達。その濁つた星は変わらないのだが、あんな星は見たことがなかった。

白く輝くお月さまの近くに、なんの濁りもない真っ赤な満月に似たものが、何気なく月と肩を並べていた。

夢で見た……あの炎に似ていた。

「あの時間に送るのは卑怯だよ」
次の日。

登校中に一人からの苦情。といつても、笑い飛ばすことができるようなことだ。

「「めん」「めん。あの後寝ちゃつて、目が覚めたのがあの時間だつたもん…『ごめん』」

「つたくう……いつもならメールでも起きるのに、やつぱりあの時間帯だつたからか、目が覚めなかつたみたいだよ……朝見たときはびっくりしたあ」

「メールに？」

「そうそう」

にっこり笑いながらもおれらはのんきに学校へと通つていいく。

月のことはいわなかつた。なんだかちょっとだけ眠氣があつたから、そのせいだと感じてもいたから。

「でもあんな時間に起きたら、一度寝なんてできなくないか？」

「うん。できそうもなかつたから、外に出て眺めてた」

「はあ？ おまえ風邪引くだろ」

「大丈夫大丈夫」

「病み上がりに近いっていって」「に」

渋い顔をしながらも相澤はそう説教してくる。

それと反面するかのように、杵島が少し頬笑みながらも聞いてくる。

「きれいだった？」

「んーどうかなあ。あんまりってところかな？ 空気濁ってる感じ

だった」

「そつか。なら今度、空気がきれいだらう森でキャンプでもしてみるか？」

「キャンプとか趣味？」

意外なものを見るかのように相澤の目が見開いていた。

「ああ。詳しいわけじゃねえけど、自然に少しだけ興味があつてな」初めて知った。杵島にそういう興味があつたなんて。今までそういう会話にならなかつたからだろうか。

少しだけ知らない部分をしつて嬉しく感じてくる。

「じゃあ今度三人で行こうか」

提案したのは俺だ。

この三人だつたら、何の問題もなく過ごせそうな気がする。

やつぱり一緒にいる時期が長いからだろうか。あまり時間などを気にしたくはなかつたのだが、気楽に話せる相手と最初は行きたいものだ。

それは俺のわがままだろうか。少しだけ不安になりながらも一人を見上げる。

「そうだな。行こうか」

最初に賛成したのは意外にも相澤のほうだった。

「うん。行こう」

につこり頬笑む杵島。

ホツと安心しながらも、俺も強くうなずいた。

あれから何度見ても紅い用らしきものは見当たらなかつた。

あれはただ寝呆けていただけだ。そう諦めに近い納得を覚え、約束のキャンプだ。

もともと杵島の父さんがキャンプ好きだったからか、ほとんどの準備は、杵島のほうでやつてくれていた。

場所取りとかがある場所らしく、より山に近く、より施設がきれいな場所を選んでくれたらしい。保護者として「一緒に締してくれるらしく、本当に任せっきりとなつてしまつた。

一泊三日という、キャンプが初めての人にとってはつらいかもしれない日程だ。

一日目で楽しければいいのだが、一日目が最悪だと、三日間はつらいらしい。

「いい天氣ですね！山のほうは天氣の変化が激しいつてありますけど、何だか今日は大丈夫みたいですね！」

まだついてはいないのだが、もう少しだといわれ、ついつい窓から顔を出してしまう。

きっと一番はしゃいでるのは俺だと思う。

何ともいえないけれど、すぐく胸のどこかがざわざわしている。今の俺には、そのざわめきは良い方向にしか感じられなかつた。

つくなり早々荷物下ろしだ。

それがなんとか落ち着くなり、力一杯腕に力をいれ、その腕をのばして体を反らして力一杯のびをした。

新鮮な冷ための空気が口に入り、すぐに喉に通つては肺一杯に入り、一気に吐き出す。

「新鮮つてこういうことなんだな」

隣でも伸びをしている相澤にいう。

来慣れているだろう杵島は、そんなこともせず、のんびりテント

の中でも荷物の整理をしては、虫除けスプレーを取り出し、テントから出てきた。

伸びをし、ボーッとしているおれらに、力一杯遠慮なく全身にスプレーを放射した。

「ぱつ！ ゲホッゲホッ！」

不意にスプレーをかけるなんて、肺にスプレーの粉が入つていつてしまう。

体をまるめ、新鮮な空氣探し求めるようにしゃがみこんだ。

「こんのやひお～……」

怒りを見せたのは相澤の方だった。

一緒にしゃがみこんだ相澤は、一瞬にして立ち上がり杵島の胸元を掴みあげ、ギヤー・ギヤーと怒鳴り付ける。

早口でうまく聞き取ることは俺にはできなかつたが、杵島はきちんと聞き取れているらしく、きちんと言ひ返している様子だった。それすらも聞き取れない。

「元気だなあ～」

隣に顔を出してきたのは、杵島の父さんだった。

「まだまだ若者ですから」

なんとなく、あんなに楽しそうな杵島と相澤を見るのは、後もう少ししかないうちに気がして、胸のどこかが冷たく、苦しい気分になる。

この一人を残しておきたく、携帯を取り出しカメラモードにし、テントを背景に写真を撮った。

カシヤッとなつたその音を合図かのように一人は固まり、ゆっくりと俺の方に振り向いた。

もうすでにその時には、自動保存設定でSDに保存されていた。

消してやるうと思ったのか、一人して俺の方に手を延ばしてきた。

「なぎさあ～！」

「なに撮つてやがる！」

「ええ～いいじゃんかあ！ 記念だ記念！」

「何の記念だバカもの…」

「いいじゃあん！」

携帯を撮つてやろうとのびてくる一人の手が、どうしてかすゞく焦つていておもしろい。

そんなに一人戯れているところを見られたくなかったのだろうか。でも、こんな一人は可愛くてからかいがいがあるので。

ハツハツハツと笑つている杵島の父さんが横目に見える。うれしくて、につこり笑顔を向けてみる。

「泣あ」

「ハハツ取れるもんだつたら取つてみや……あつ」

グイツと後ろに体重をかけたとき、踵の方に少しでかめの石があり、それに少々乗つてしまい体勢を崩す。

「おい」

「ばかつ」

二人して俺を支えようと手をのばすが、完璧に俺の体重は倒れる方向にむいている。もし俺を捕まえられたとしても、杵島達も巻き添えを食らう。

ガシツと一の腕辺りの服を掴み、自分達の方に腕を引っ張るが、思つた通り足に力が入つていない俺を起こすのは無理で、杵島達までもが倒れこんだ。

一人の体重がかかるのはそれなりにつらいが、そんなことよりも、今のこの状態が楽しくて、ついつい笑つてしまつ。

「あつはははは……巻き添え巻き添え！」

「てめつ……わざとかよ」

「助けよつとしたおれらがバカだつた」

ゆつくりと体を起こしながらも、呆れるような口調で言つてくる。

「おい杵島……何で複数形なんだ？ バカはおまえ一人で十分だ」

「ああ？ せえつかくおまえだけじゃないつていうのを示してやつたのに、なんだ？ その言い草は！ 本当は、バカはおまえだけで十分だ」

「あんだとお！？」てめえ調子に乗るのも大概にしろよ？」

再び相澤は杵島の胸倉を掴み上げ、杵島も相澤の胸倉を掴む。

「はいはいはいはい！」

パンパンツと手をたたき、一人の行動を止めたのは、近くで見守っていた杵島の父さんだった。

「喧嘩も良いけど、ちゃつちゃつと『飯作っちゃおうねえ』。二人だけご飯抜きを食らいたいかな？」

『それだけは勘弁してください』

二人して手を離し、ペコリと頭を下げる。

一人に気付かれないうちくすっと笑い、杵島の父さんに三人でついていった。

男だけで作る料理はかなり大雑把で、キャンプといえばカレーを作った。その芋はもうボコボコでかく、まさに男の料理という感じだった。

食べているときも、ちょっととしたことで喧嘩する杵島と相澤に、杵島父さんと笑いながらも、観覧する。

すごく楽しい。樂しいけれど、俺の頭には、あの見たこともなく、怪しい男の言葉が脳裏を過りつづける。

守れるか……大事な人を。

それは一体どういう意味なのだろうか。

「元気だなあ」

「仲良い証拠ですよ？」

「だな……おれにもこんな時代があつたぞ」

懐かしいような口調でそんなことをいうものだから、どういう意味なのか、どうしてそんなことを話したのか。

時代。

どうして時代といつのは変わつていつてしまつたのだろうか。同じ時代といつのはないのだろうか。何の問題も起きない時代といつのは、現われる」とはないのだろうか。

こう考えるようになったのは、全てあの怪しいおじさん。いや、怪しいお兄さんの言葉が気になつて仕方がないからだ。

不吉な予感。

きっと、感じる人は不安に感じてくるのだろう。

「夜といえば天体観測だろ」

夜になり、おれらはテントに戻つた。

「さすが相澤、キャンプの夜の心得を知つてゐるな」
にやりと微笑み、めずらしく相澤を讃める杵島。

「まだまだ序の口よ」

「序の口の意味を知つてのことか?」

「ばあか。しらねえで使つたんだよ。まだまだ始まつたばかりみたいな意味だらう?」

適当な奴だなあと杵島がいい、そこに相澤が言い返し、喧嘩になる。いつものことだ。

また喧嘩をするのかと呆れるように杵島父。少しだけ気持ちは解りますよと苦笑する俺。

「ワイワイガヤガヤ」と叫つのはこうこうことだらう。

「こおら。そこで喧嘩してゐるお子さま達よ、わざとこなこと置いていくぞー」

さつさと観測する準備をして、テントから出ようとした。

二人の口喧嘩は止まり、できるだけ暖かい格好に急いで着替えた。

「あいつらを扱うコツがわかつてきただぞ」

楽しそうに叫ぶ杵島父に、くすつと笑い、上手いですねとほほえ

んだ。

「今日、なんかつらかったか?」「え?」

観測をしに、持つてきいていたブルーシートに身を任せ、空を見上げていたときだった。

隣にいた相澤が不意に聞いてきた。もちろんのこと、俺は言葉に固まつてしまふ。

「辛いっていうより淋しそうかな? 最近、この世の終わりが近づいてきたかのような顔してる」

逆隣にいた杵島までそいつてくる。

「この世の終わりか……どちらかといえば、この世が終わつてほしいかもしれないや」

「何があつた?」

「ん……相澤たちはいつから気付いてたの?」

『おまえがぶつ倒れた後くらいから』

一人息を合わせ、じつと俺の方を見ていた。

ということは、最初からわかつていたのだろうか。少しだけ嬉しこれど、やっぱり安心する。ちゃんと俺のことを見ていてくれているという事が。

「んーばれてたか」

「なにがあつた? いい加減言つてくれないか? 十分おれらは待つた。それとも、まだおれらに信用ないのか?」

「違つ! ……信用ならあるよ。あるから怖いんだよ。俺は一人が大事だからさ」

「なんか脅されたのか?」

心配そうに体を起こし、相澤は俺の左手に触ってきた。その時にピタツと固まつた。

固まつたというより、何かに反応してとまつたという感じだ。

「沚……手、暖かいな」

「えつ？」

「いつもより熱い」

「相澤の手はいつも冷たいから」「冷え性だからじやねえか？ つていうかおまえ、熱あるんじや？. 杣島はすっと手を伸ばしてきては、俺の額に触れようとしつくる。その時だった。

『いつ！』

二人して身を引く。

めずらしくも額と手で強めの静電気が発した。

「『いつ！』めつ」

「いや……うん。大丈夫だけど……びっくりしたあ。手と額でも静電気って発生するんだね」

「あつ……そうだね」

「？ どうかしたの？」

深刻な顔になつた杣島を見るなり、視線は少し相澤の方を見ていた。

相澤も、何かを知つてゐるかのように、視線が合つなりすぐに俯き、誰の視線からも逃げてしまつかのように。 「なんでもないよ。沚。おれらにとつて、おまえは大事だから……絶対守つてみせる」

「はつ……はあ？ なにがいいたいの？」

それは俺の台詞だよ。

今日のまともな会話はそこまでだった。

「あれ？ おれ……何してるんだろ？」

気付いてみれば、周りは暗くて何を焦点を合わせていいのか解ら

ず、目が疲れてくる。

いつも見る夢とは少しだけ違う。

明るく赤い炎が目の前に現われてはいないし、手も熱くならない。もうあんな夢を見たくないから、微妙な位置に放り投げられたのだろうか。

あわてない自分がいる。夢ならいつか覚めるから、ここで慌てていたって、どうなることもないことを自分が知っている。それだけで十分だった。

どこをみても、ほんの少しの光もみつかない。

いつもの炎はどこから放たれていたのか。知っていたはずなのに、途端に見なくなつてから感覚を忘れてしまつた。なにか罪悪感を感じていたはずなのに。

「罪悪感……か」

罪悪感というならば、自分から発しているのか。ふと思つてしまえば、何かを自分でできる気がする。

ゆつくつと左手を目の前にのばし、すこしだけ炎をイメージしてみる。

あつく、今まで見てきたような炎を。

「俺とは関係ないってか」

ため息とともに出来る言葉。

目の前に火が出るどころか、いつものように左手に熱が籠もらなかつた。

その瞬間、ああダメなんだな、とすぐに理解することができた。

諦めが良すぎる。

自分の悪いところのかもしれない。

粘り強く何かを成し遂げようとする気持ちがあるわけでもなく、ダメだと一瞬思つてしまえば、たいていのものは諦めてしまう自分。そして、諦め後で後悔するのだろう。

「結局俺一人じゃあ、何もできないへなちょこだつてか？」

夢だからと時間に任せ、目が覚めるのを待つことしかしない。そんな自分が嫌い。

でも……改善しようとする自分。そんな自分も嫌い。ぎゅっと目を瞑る。それでも真っ暗のまま。目が覚めてくれるような感じもしない。

「いい加減解放してくれ」

座り込み、頭を抱えるようにしながらも、思考の何から逃げる。『逃げ続けるのか？』

ふと声がした。

耳から入つてくるのではなく、頭のなかに直接入つてくるかのようないい男の人の声。

聞き覚えはない。あの怪しい男の人の声ではないことは、はっきりとしている。

「な……に？」

弱々しい口調で聞き返す。

『逃げ続けて大事な人を護ることができるので』

「杵島……相澤？」

『その二人を護りたいならば、強くなるのだ。俺を呼び起こせ』

「え？ 呼ぶ……？ 起こす……？」

なんのことと言つているのかがチンパンカンパンだった。

話しているということは、起きているということだろうし、強くなるというのは、どういう意味での強くなるなのだろう。精神的に？ 肉体的に？

「あなたは前の人とは違うの？ 雨が降ったときの……あなたと俺の左手は関係あるの？」

『まだ……わからないのか』

「だから聞いてるのに。知つてたら聞かないよ。呼び起こすつたつて、どうやつたら出てきてくれるの？ 夢なんだからさ、もう少し大雑把な内容にしてくれない？」

『夢だと思っている間は、おまえは強くなんかならない』
それきり、何を問い合わせても返事が返つてこなくなつた。

「おはよう」

目が覚めたら、チュッチュッと鳴く小鳥や、カアカアと鳴くカラスの鳴き声が鳴り響いていた。

先に起きていた杵島父と杵島は、目覚めすつきり笑顔で朝のあいさつだった。

軽く手をこすりながらも、ボソボソッと挨拶を返す。

まだ隣で寝ている相澤を見つめ、今自分達がキャンプに来たことを、はつきりと思い出す。

（やつぱり夢だつたんじゃ……）

夢じやないなら夢じやないと書いてほしい。夢なら夢だといってほしい。

人の顔を見て何かを理解しようとするのは苦手だ。ましてや顔すらも見えない、人なのか何なのか解らない得体の知れない人物なんて余計に。

顔色を伺うということは、その人自身に嫌われたくないか、相手がどんなことで怒るのか解らない、信用ならない相手だといふどちらかの理由だ。

俺が杵島や相澤になら、いくらでも顔色を伺う。嫌われたくないから。親友で、大事な人だから。

「相澤よく寝るねえ」

ボーッと相澤の方を見ながらそつぼそりといつ。

「おまえも十分な睡眠とつてたけどな」

「え？ 今何時？」

「9時」

「おつ起こしてよお！」

休みの日は確実爆睡中だが、今日から一日はそんな」としてはいけないと思っていたといつのに、初っぱなからしてしまったとなると、何とも言えない。

「涎垂らして幸せそうにしてる奴を起こせるかよ」

「よつ涎垂らしてた！？」

急いで口元をグイッと拭うが、その姿がおもしろかつたのか、ertzと吹き出し、大声で笑いだした。

「だらだらにな」

笑いを堪えようとしながらも、杵島がそういう。カアツと赤くなる自分が反応し、よつやくからかわれているだけだとわかつた。

「きしまあ！」

「つるつせえやあ」

怒鳴り起きる相澤の声が聞こえてくるなり、杵島の顔に近くに置いておいた懐中電気が飛び込んできた。

がつんといつ、鳴つてはならないような音が響く。

「いつ……」

丁度ぶつかつたのが額なだけに、体を丸くさせて頭を抱え込んでいる。

「杵島……！ 大丈夫？」

「大丈夫じゃない。立ち直れそうもない……」

冗談のように言つ言葉に、半分乗るかのようになつしり杵島を覆うように抱き締めてやる。

「きしまあ～！ 死んじややだ……あ？」

「何で疑問系？」

「なんか……体が熱い」

ゆつくりと体を離し、自分の手のひらや全体を見た。

なんだかほんわりと暖かい自分の身体。いままでは、すべて左手

にしか集まらなかつた熱が、俺全体を暖めているかのようだ。

「熱であるのか？」

のそのそと体を起こして、額に触れてくる相澤。

相変わらず冷たい手をしている。

「んー熱いには熱いな……」

「でも、体怠かつたり、熱っぽいって感じはしないなあ

「少し休んでおきなさい。きっと慣れない空氣で、体がきっといついてきれないんだと思うから、今日は無理しちゃダメだからな」

「杵島が慣れたような口調で、ペラペラとそういった。昔に一度でも自分がかかったことがあるかのように。もしくは、誰かがなるか、父からか何かから仕入れた情報かのようだつた。

反抗する理由も、できる立場でもないため、おとなしく頭を縦に振つた。

でも、そんなんじやない。

自然についていけなくなつたとか、体に何かが合わなかつたとかじゃない。左手の熱の力が、体に何かを教えているかのようだつた。これじやあまるで、自分に何かの力があると信じてしまつているかのようだ。

夢だ。でもそれが、杵島と相澤を危険なことに巻き添えを食らわせてしまうのならば、俺はいくらでも強くなつてやる。でも、信じきり、本当にただの夢だというオチはいやだ。

でも、いつも見たあの夢などは、すごくリアリティがあつた。

きつと、体が何かを教えたいたのか。

そう考えてしまうのは、ただの自意識過剰なのだろうか。

できることはしたい。実際、体には何の症状（熱いのを除き）はないのだからか、少し動く、だなんてもの、何の恐れもなかつた。しかし、杵島のおでこは大丈夫なのだろうか……。

楽しい一日とこりのせ、過ぎていくのはとつとつもなく早い。だからこそ、一日一日を大切にしたいという気持ちがあらわれてくる。

キャンプ場の夜は涼しかった。

ビニからかやつてくる冷たい風が、人間の体をとことん冷やしていく。

杵島は、俺の体を気に掛けながらも、話があると、相澤とともに電灯すらもない場所につれていかれた。

遠くにいくなよと杵島父に言われ、守るつもりがあるのかないのか、できとうにはあいと答えてテントを出ていった。

キャンプ最後の一日の夜。記念に何かを残そうと思つていいのか、言いにくい話をするつもりなのか、一人は少しだけしんみりした表情をしていた。

「あのよ……おれら、おまえも気付いてると思つナビ、普通とは違う特別な力持つてるんだ」

杵島が先頭きつてはなす。

急な話題だった。何ていつたらいいものか、杵島達も同じ力を持つているということだ。といふことは、ちやんと自覚できるところまでわかっているのか、力といつものを発動できてしまっているのか。

半信半疑な状態の俺には、何とも反応しにくいものだつた。ただ茫然と杵島と相澤を見る。どうも、冗談で言つてているようこそ見えない。

どう反応するべきか。はつきりと気持ちが整理できないでいる。

「……なにいつてるの？」

もしかしたら俺が考えてこりみづなことではないと、必死に思い込もうとする。

「力だよ。運命さ。きっと神は、俺たちを選んでくれたんだ」

誇るよづな口調で相澤が語る。

奇跡じゃないんだ。生まれ持つた力なんだ。神の子なんだ。

少しだけ心のどこかに警告が鳴り響いた。こんな相澤なんか知らない。すべてを信じ切つてしまい、大事なものの見落とし過ぎている。瞳は輝くというより、かなりの貧乏人が、いきなり億万長者になってしまい、お金を持て余している様子だ。

怖かつた。なにをしでかすかわからない、なにを考えているのかわからない。いまにでも、今まで憎んでいた者を殺すかのような。

「お前だつて持つてるだろ？ 特別な力を」「どちらかといえば杵島のほうが冷静だつた。

相澤が見ていないものを見、たいていのものを知つてゐるかのようだ。もともとおれらのなかでは冷静な奴だつた。

「沚……わかるだろ？」

「い……怖いよ二人とも……」

「こわい？ そんなことねえだろ。少し興奮してるけど、怖くしてゐるつもりはねえよ？ なあ、教えてくれよ。お前はなにを持つてゐるんだよ」

取り乱し気味な相澤が、ガシッと俺の肩をつかみ、じっと睨み付けられる。

怯える姿に気付いてくれたのか、杵島が間にに入るよつこじ、真剣に聞き入れるかのような口調で言つてくれる。

「夜に、俺との間に静電気が起きたの覚えてるか？」

「うつ……うん」

「俺は電気の力を持つてる。だから電気に敏感で、静電気がおきやすくなつたんだ。制御することはできるけど、余り気にしないで触れたりすると静電気が起きやすいんだ」

ふと、実験するかのよつこじ、やせしく俺の手を取つた。その瞬間、小さいが確かに静電気が起きた。

な？ つと伝えるよつこじに、たまたま静電気が起きたんだ。

でも、どうしてコントロールすることができるのだろうか。俺なんか、力を信じじることも、あるという存在自体、半信半疑。いや、

どちらかといえば、信じていないに近いとこうの。これは夢なのか。

そうだ。これはきっと夢なんだ。そう、思い込みたい。

でも痛かった。静電気が、俺の芯をやわしく痺れさせるよつた程度の電流が走った。

痛かった。痛いというなら、それは夢ではないのだけれど。夢だと思つてしまつだらうと、先に考え、夢ではないことを示してくれたのだろう。

「相澤は……相澤はなにを持つてるんだよ？」

「水。だから俺の手は冷たかっただらう？ なあ、お前は？ 泣はなんだよ。オレらにあって、お前にはないなんてことはないだらう？」

「ないよ……わかんないよ！」

必死に首をぶんぶん横に振る。

「嘘だろ。なあ、本当のことってくれよ」「わかんない……今の二人がわかんないよ！」

手で顔を隠した。

きつと今泣きだしそうな顔をしている。夜だから見えないだらうけど、この距離だつたら見えないほうがおかしい。

悲しかつた。こんなにも二人が遠くに離れていく感覚、初めてだつた。

高校で知り合つて、当たり前のように隣にいてそれが普通だつた頃を思い浮べると、いまは、かなりの異常さを感じさせられた。気まずい状態は家につくまでだつた。

夏休みという期間は、一人と距離をおき、考えるにはちょうどよかつた。

今まで、三人でいたほうが楽しく、休みもそれなりにちょくちょく会つたりしていた。会いたくないなんて感情、今まで考えたことなんかなかつたし、思い浮かぶこともなかつた。

だから、今の自分は普段の自分とは違う。一人には会いたくないし、今は未だ顔をあわせたくないと思つてしまつ。

力という名の壁。

まだあれば夢だつたんじゃないのだろうかという気持ちがある。すごく眠くて、眠いが故に仲間がいてほしいという、半信半疑な力のことを題材に、夢として何かが流れたのだろう。

杵島がそうであつてほしい。相澤がそうであつてほしいと、勝手に思い込んでは二人との間に勝手に壁を作つて。

もしそうであるなら、自分はどんなに理不尽なのだろうか。

自分の力というものがだんだんわかんなくなつてきては、それは本当にあることなのかと疑問に感じてくる。

漫画などで、よく平凡な主人公がわけもわかんないような力を、ひょんなことから手に入れたりするものがあるが、どうしてそんな簡単に力というものを信じることが出来るのだろうか。

夢だとか、幻想だとか幻覚だとか考えたことはないのだろうか。もしかして感じていいかもしれない。でも、大体そういうものは強いと決められている。

でももし本当に自分の中に力が宿つていたら？

なんのため？ 最終的になにをしなければいけないのか、もしかしてただのお飾りだつたら？

夢が本当なら、自分が炎だという事を知られてはいけない気がする。

物陰に隠れるようにその力を隠し、成すべき使命を果たさなければいけない。相澤たちのように無防備に自分の力を表せてはいけない。

本当に信じた仲間にしか……。

（信じた仲間……）

もしかしたら俺は一人に信じられていたのだろうか。

一人で必死に話し合って、いつ言おうか悩みあつていたのかもしない。そしたら、その悩みに悩み、出した結論から逃げてしまつたということなのだろうか。

ひどい……

なんて自分はひどいことをしたのだろうか。

視界がウルツと水のなかに沈めこめられ、ぼんやりとしてくる。両手で顔を覆い、少しずつだが流れる小さな水滴を手のひらに感じる。

裏切つてしまつた。そんな感情ばかりが、俺の心を悼み付けてくる。

どうすればいいのだろうか。謝るべきなのか、このまま壁を作つておくか。自分の力というものがはつきりするまで、一人とはいつもどおりに接してくれるよう頼むか。でももし、力が起きなかつたら？

『俺を呼び起させ』

いつだつたかどつかの誰かがそう言つてきた。

呼び起こすという意味がわからなかつたが、もしかしたら一人はその力を呼び起こし、いまに至つたのかもしれない。

努力をするものとしないもので分けるなら、きっとしないほうだ。杵島達は、きっとした側。努力すれば力が手に入る。簡単な原理だ。でも、どう頑張ればいいのだろうか。

努力をしない人間は、努力をする人間にすごく失礼な存在だ。今自分は、失礼な場所に位置している。
一人をわかつてやる。今自分にできることは、それ位しかないのだろうか。

その日も夢を見た。

真つ暗な闇の中に放り投げられ、何かの罪悪感のみが自分を襲い続ける。なにが悪いのかわからない。なにを示しているのかがわからない。

自分が必要とされていないかのようだ。

どうしてここにいるのだろうか、どうしてこれしかないのか。もしかしたら、本当の存在位置はここなのかもしれない。

ここで生まれここで力のみが育つ。それだけなのかもしれない。

「俺は……生きてていいのかな？」

それすらもわからない。

本当は生きていてはいけない存在なのかも知れない。でも、今は生きることしか手段はない。

暗やみにも慣れた。罪悪感にも慣れた。この暗闇だけの夢は、この数日つづく。炎を見ていたあの頃がすごく懐かしくも感じられてしまう。

なにをすれば自分が変わるのが、なにをすれば、自分の存在価値を見いだせることができるのか。どうすれば、自分が生きていくのか。ただそれだけを考えるための場所になってしまつてしまつて、呼び起こす。その言葉も頭に回る。

なんのために呼び起こすのか。呼び起ししたといひで、何の役目があり、自分になんの得があるのか。
それがないと呼び起こしてはいけない気がする。

今はまだ、自分が生きている理由すらも見当たらなこといつの^ア。

そう簡単に田代は過ぎなくなっていた。

丸一日考えることに費やし、それでも答えが見当たらなくて散歩に出で、時間が経つただろ^アと思つた頃に帰つても、三十分も経つていなかつたり。

一日がこんなにも長く感じることなんて、そんなにないだろ^アといつくらい長く感じて。

どうすればいい？ だなんてそんなこと、誰に聞いていいのかもわからない状況で。

暑さなんか忘れて。いまが、夏休みだといつ^アことも半分忘れて遠出することを決めた。決めたその瞬間に体は、思つた以上の行動を起こしていた。

財布を出し、一万近くあるのを確認して家を飛び出した。
家のテーブルには、ちょっと遠出してくると母にメッセージを残した。

した。

行く先は駅。

有り金で往復できるようなくらいの切符を買い、快速や特急ではなく、普通列車に乗つた。

まだ混むような位置じやないからか、座る場所を確保できた。
通勤通学ラッシュ、帰宅ラッシュとは時間が違うおかげだったのかもしれない。

然程混んではない。

景色を見て心を癒そ^アうにも、周^アにはビル、ビル、ビル。ビルでなくとも、背の高い店やマンション等が建ち並び、癒^アれるような

景色なんて見当たらなかつた。むしろ、窮屈感がある。

狭いところに立たされ、なにをする」ともなく周りから睨み付けられていそうな気がして、状況すらも考へる余裕を与えてくれないかのよ。少しだけ、^{たと}喻えを間違えてしまつたかもしれないけれど、とりあえず窮屈。

何かを急かされている気がすると回じよひ。

考へをまとめるため一回氣を紛らわし、ゆくつと都えよつとした計画が、今から崩れているようだ。

(なにから考へよ)

急かされていようと、少しだけでも早く答えを導きたい。
氣を紛らわせるのは、景色が変わつてからにしよ。心にそつ決め付け、そつと瞳を閉じた。

潮の匂い。塩の匂い。普通はどうやらを言ひのか。
生まれてこの方16年、海岸で考へ続けた。
生まれてずっと海岸にいるわけではないが。

「風邪をひく」

冷たい口調でそつやつて言つてくれる人がいる。それに甘えて、
されるがままに上着を掛けられる。

「お兄ちゃん、あたしが怖い？」

「どうして」

肩をあわせて隣に座り、出来るだけ風邪を引かないよにしてく

れる。

「なんとなく」

「おまえは俺が怖いか?」

その問いに首を横に振る。

「どうして?」

「えつ……お兄ちゃんだから。仲間だから」

その答えに、お兄ちゃんはクスッと微笑み、言つ。

「だろ?」

「うん。よかつた」

傍にいてくれる。それだけで十分だ。

ただそれだけ。近くにいて、一人残してあの人を見ないよう

に。 守つてくれる。自分達は自分を信じ仲間を信じる。それだけでよ
かつた。

いや、それだけがいい。

「お兄ちゃん、暖かいや」

スッと兄の手をつかんで感想を一つ。

「便利だろ? お前の手は……冷たい」

お互い死なないように。ただそれだけが、たつた一つのお願いだ
つた。

乗る電車を間違えてしまったのだろうか。でも、目的地には着いた。と言つても、適当に選んだ場所であつて、深い目的があつてき
たわけではない。

景色は邪魔な大きな建物がなくて、周りを見回すにあたつて面倒
なものがいる。

切符を通した時点で、なに駅だったかも忘れていつてしまい、何
の興味もないんだなど確信した。

でも、考えるための癒される景色は見てきた。駅から出たり、すでに夕日が見えていた。考えるには十分な癒しだ。
思った以上に考えたけれども、思った以上に考えはまとまらなかつた。

明るいうちに帰るのは、到着してすぐに無理だと察した。
どこかに野宿か、早急に帰ろうか迷つた。故に出た答えは、スッと顔を上げて見えた景色が答えてくれた。

海がある。

真っ青な海が広がつていた。

どこまであるんだろうか……。答えの見つからない質問を、誰かに投げつけ、茫然と海を見つめる、

その海に行くのは当然のことだ。そんな気がして、足は駅前に並んでいるバスを探した。

どれに乗れば一番近いのだろうか。ここに詳しくない自分には、はつきりとはわからない。

わからぬからこそ、なんとなく田についたバスに乗ろうかと思つた。でも、後々考えてみるとお金がない。

帰りの電車代も、きりきりの場所を選んでしまつたため、無闇にお金を使うことはできない。

歩いて、帰るのを明日に回そうか、電車で今すぐ帰^モするか。すぐ究極な選択のような気がしてきた。

休みの日は後もつ少しある。でも、所持金も貯めたお金もそんなにあるわけではない。今できること、今やつておいたほうが後悔はきつとしない。

足をすすめた。真っ青に広がる海のほうへと、あの海はどこまでも繋がっているのか考えながら。

「あ、じつ。やつぱりむりだつたかな？」

「おまえが焦らせるようなこというからだろ？」

「……それは、じめん。でも、お告げが出たんだろ？俺には出なかつたけど、杵島。おまえにはわかつたんだろ？ そのなんとかつて奴が沚の名前を呼んだって」

「ああ。でもわからないんだよ。どうして……どうしておまえの名前は出なかつたのかが」

場所は杵島の部屋。

キャンプからかえつて、少しだけたつた日付の頃、杵島は相澤を呼んだ。

用件を言わばずとも、相澤には何となくわかつていた。

杵島自身が力の存在を知つたのは、沚が倒れる数ヶ月程前だつた。夢のなかにカリフォンスという青年があらわれ、力の存在を簡単に説明してくれた。

自分にそのなにかを納得させるためなのか、いやに落ち着いていられた。

頭が着いていなかつたのかもしねない。

そのカリフォンスが言つことには、「沚について行け。それがおまえの唯一の光の道だ」ということだつた。

それからというもの、夢のほとんどがカリフォンスと出会つことが出来た。

徐々に話を聞いているうちに、カリフォンスになら自分を捧げてもよいと感じるようになつていて。

力を手に入れたのはいつ頃だつただろ？ か。捧げてからそつまく日付はかわつていなかつたはずだ。

それからしばらくしてから、相澤が変な夢を見るよつになつたと言つてきた。

相談を受けているうちに、だんだんと相澤にも力が芽生えてきた

らしい。それは、沚が倒れる数日前の話だった。

しかし、杵島はなんどカリフォンスに相澤のことを聞こえとして

も、口を開いた彼の声だけが聞こえなかつた。

いや。聞こえているのだが、どうも目が覚めたときにはその声だけが思い出せなかつた。拒絶されているかのよつこ。

「ごめん。俺の力が足りないばかりに……」

「あついや。別に責めてるわけじやねえんだ。きつく言つてしまなかつた」

沚を挟んだときと、二人は話し方が違う。

どうしても、こいつの力の話を持ち出してしまひやうで怖かつたから、必死にテンションを上げ、沚を中心にするように気配りをしていた。

「沚、この夏休みが終わつたらいつもどおりにしてくれると思うか？」

「……オレら次第。もしくはあいつの精神状態次第だらうな」

「だな」

杵島にはなくて相澤にはあって、相澤にはないものが沚にはある。沚が持つていらないものを、杵島にはある。

誰かに出来ないものは違う誰かにはふとしたときに出来てしまつことだつてある。少しだけ今の状況に似ている部分がある。

沚自身に起きていることを本人ははつきりと直視しきれていないが、相澤はそれも運命だと、目で見たものははつきりと信じ切つてしまつが、いざといふときに落ち着いてはいられない。その分、杵島は必要以上に落ち着き切つている部分はあるが、沚みたいに何かを癒してくれる雰囲気を出せない。相手を不安にさせ、自分の感情をうまく出せないでいた。

三人が仲間一人一人の欠点を補うように存在している。

しかし、今回はその欠点がはつきりと現われた。

『お兄ちゃん……お兄ちゃん? ……お兄ちゃん!… お兄ちゃん!』

穴に落ちていく。

驚いた妹の顔がだんだんと離れていく、自分はただ真っ暗な穴のなかに沈むように落ちていく。

だんだん泣きじゃくる姿になる妹が微かに見えては、消えていく。なにが起きたのかわからない。

ただ妹を残して、自分がもう元いた場所に戻れないといふことだけがなぜかわかる。

真っ暗に染まったとき、まわりからクスクスと、なにが面白いのかもわからない、子供の笑い声がすぐ耳元で聞こえてくる。その瞬間……パッと目が覚めた。

反射的に上体を起こしたその視界は、いつもの部屋のなかだ。窓の外からは、雀の高い鳴き声が響き渡る。

「……夢?」

何の変哲もないいつもの朝。

自分が、消えていく夢。

いやな予感で胸が騒ついてくる。なにか、現れてはいけない何かが近づいてきているような。

胸騒ぎは、時間が経つにつれて大きくなる。

心臓が跳ねるような感覚がして、口から本当に心臓が飛び出していくのではないかといふくらい。

緊張しているときは、少しだけ違うような、何とも言つ難い感覚。

「麻紀……」

ハツと大事なものを思い出し、布団を捲り足をベッドから出し、飛び出す勢いで部屋から出る。

すぐ隣の部屋の戸を、ノックをせずに力一杯開き、まだ寝ているだろう妹の姿を探す。

しかし、その中はきれいに誰もいなく、すでに起きて、外に出ている。

妹である麻紀の場合、部屋にいなければ、すぐそこの浜辺の岩場のちょっととした場所にいては、じつと海を眺めている。

なにを考えているのかは知らない。ただぼんやりと眺めているのかもしれない。人の気持ちまで知ることなんか、できやしない。

誰にも。

急いで家を飛び出し、すぐそこの浜辺まで走った。

「麻紀！」

浜辺に出来る数段の階段を駆け下り、足を浜に取られながらも岩場に急ぐ。

微かに見えた麻紀の姿にホツと胸を撫で下ろし、首に脚を掛け、息を整えながら近づいていく。

相変わらず近づく気配に気付くこともなく、ただぼんやりと海を眺め続けている。

いつものように隣に腰を下ろす。

「お兄ちゃん。今日は来るの早かったね。いつも夕方近いのにうつすらと微笑む妹にやわじく抱き締める。

「怖い夢……厭な夢を見た」

「厭な？」

「うん。怖かった」

「珍し。お兄ちゃんの弱み初めて聞いたかも」

「弱み？ 弱音じゃなくて？」

「うつ……そうとも言つ」

かわいい。そんなちょっとした間違えが可愛い。妹だからこそ、憎めない可愛さも持ち合わせている妹。

「どんな夢なの？」

「どんなって……どんなのだつたかな？……忘れた」

なんて嘘だ。しつかりと落ちていく感覚も、はつきりと覚えている。でも、今それを言って、妹を心配なんかさせたくない。

べつに、ただの夢なんだしと割り切つたつてかまわないことなんだけど、あいつのことがあつたから。あいつのことを、麻紀が一番根に持つていてるから。

『優貴！ 優貴ーーー！』

血相を変えて、どうにか助けてやろうと手を伸ばす麻紀。その隣で、現実が飲み込めていない自分が、見開いた眼で、あいつ……優貴を見つめていた。

あいつを助けることが出来ない自分達。ただあいつを呼び、叫んでは現実逃避をしかけてしまう。

姿が薄くなる優貴を、麻紀はあきらめずに優貴に触れようとした。しかし、いくら触れようとしても、結局触れられずに。

その場には泣き崩れる麻紀の声しか響いてはいない。

でも、最後に見た優貴の微笑みだけが脳裏に焼き付いて離れない。どうして微笑んだのか。

どうしてその微笑みが、麻紀と俺を納得させるかのような、少しだけこうなることを知っていたかのような微笑みだったのか。

もう聞くことなく、自分で理解しようとしなければいけなくなつた。

この場所が愉快な場所である麻紀と優貴に、この場所が天敵な俺。

いつかはここを離れたいと思つてゐる。もちろん麻紀と、と思つてはいる。

でも、きっとそれは難しいだろ。ひ。

麻紀がここにいれば、麻紀自身の身ぐらいい、行くところには出来るだろ。でも、俺にはただの弱点にしかならない。

それを回避するにはここを離れなければならぬ。でも、麻紀を一人にしたくない。

結局この循環だ。

優貴は、俺を護るといった。麻紀を護るといった。でも、俺と麻紀は、対立してしまつ位置関係だ。

麻紀や優貴が俺を護るということは、直接的なダメージはなくとも、ほんの少しのダメージを食らつてしまつのは確実だろ。ひ。

「麻紀。おれな、いつかはここを離れようと思つてるんだ」「…………え？」
なにを言つているの？ と訊くように、軽く眼を見開いたまま、ゆつくりと顔を向けた。
「いつしょに……いてくれるんぢやないの？」
「ああ。だからその時は、お前も……一緒に来てくれるか？」
見開いていた眼は、ゆつくりと目尻が下がつて、すうくうれしそうな顔をしていた。
ここは麻紀にとつて愉快な場所。いつかはかなうず返つてくる場所。

「つすりと閉じた目蓋には、再びここに戻つてきた麻紀の姿が見えた。でも、どうしてもそこには返つてくる自分の姿が見当たらなかつた。

でも一人じゃない。それ位はわかつた。でも、そこには確実に自分がいないだろ。ひ。

寂しいはずなのに、それが当たり前な気がした。

ここを離れるのは今すぐというわけには行かないだらう。俺にも麻紀にも学校がある。今は夏休みだけれど、いつかは夏休みも終わってしまい、自由が利かなくなってしまう。

「いきたい……行きたいよ。お兄ちゃんと一緒にだつたら、どこにだって行ける気がするよ」

「じゃあ、学校卒業したら行こうか」

「うん。じゃあそれまでにバイトで旅費稼ごうかなあ」

「それは俺がするから、麻紀は勉学に励んで？」

「それ、私が馬鹿だつて遠回りに言つてる?」

少しだけ疑うように、ブウッと頬を膨らませた顔が可愛い。結構成長したと思う。

数カ月前。優貴を失つてからはそういうふうに、表情を変えることなんて、知らないかのよつて、無表情。というよつては、寂しそうな顔しかしなかつたから。

話しているうちに表情が変わるなんて進歩したほうだと思う。

「言つてない言つてない」

ついつい微笑み、そういう聞かせるよつて言つた。

一日が過ぎるのは、今では目的がある俺にとって早く感じられた。それもこれも、無謀なことをしてしまつたからなのかもしれない。でも、そこへ行くという選択を選べなくなつてしまつた身からしてみると、「歩く」という選択以外には考えられなかつた。悔しいほどに、真つ赤に腫れた太陽が東に見えていた。

「あと何キロだろ……」

気が遠くなつてきた気がする。

と感じられるなら、あと一時間は大丈夫だらう。

夜更かしが得意なわけではない。

長距離歩くのが得意なわけではない。

数メートル前に、「海水浴場まで後15キロメートル」だったか、数字はあやふやだったが、もうすでに何キロも歩いた自分には、億劫にしかならなかつた。

近づいてきたせいか、不思議と海の匂いがしてきた。

いや、向かっている先が海だから、海の匂いがしてきて喜ぶべきだろうか。

…海に行ってどうするんだ？

自分の答えを見つけにいく。

…そこに答えがあるのか？

わからない。なかつたらなかつただけど、なにか、行かなればならない気がする。

…もし答えが見当たらなかつたらどうする？

だから……なかつたらなかつただ。行つてみないとわからない。やつてみないとわからない。

好奇心つて、そういうことだらう？

…子供じみた思考だと思わないか？

大人になつたら、それも必要だ。

理屈だけをしゃべつて、実行に移さないだなんて、かつこわい。子供の思考は、無意味な疑問だつて抱くことが出来る。無鉄砲な行動が出来る。

それ何が悪い。

誰ともしゃべらない日々がつづいてしまい、自問自答で必死に自分が今ここにいるということを実感させる。

すぐそこに見えているところから質問し、自分に必死に頑張れつと応援させる。

だれもいつてくれないなら、自分で言えればいい。

最終的に意地だってかまいやしない。

意地だとしても、目的にたどり着きたい。歩けばつくんだ。今までの人生上、そんなこと簡単にわかることが出来た。わかつていても、行動に移せないのが現状だが。

「もー足が動かないよお」

足が重くつて、ついしゃがんだら腰をあげることが出来なくなってしまった。

一日中歩いたのと一緒なのだ。少しくらい休んだって罰は当たらぬだらう。もし当たるのならば、死んででも神を睨い、祟つてみせる。

「ほんと……何してるんだろう俺……」

曲げた膝のうえに肘を乗せ、その間に頭を埋めるよひしゃがみこみ、肘をあげて頭を覆つた。

眠気は起き続けたせいか、真夜中よりは消し去つていつている。おかげで精神的には歩いて行けるのだけれど。

「肉体的に……ねえ」

しゃがんだ拍子に伸びた筋肉が痛い。

いかにも「筋肉を異常に使いました」と、身体がヘルプを出しているのが見え見えだ。

「あともう少し……」

と自分に言い聞かせる。

でもこの時の俺には、大事なことを忘れていた。

「」の長い距離を歩いていくなら、帰りだつて……。

日は東から昇つて西に落ちる。
いまは、真っ赤な太陽が西にいる。

もうすでに一日が過ぎようとしていた。

夢を見たあと、何度も考えていた。今日、何かが変わるはずなんだ。と。

変わつてはいけないものというものが必ずある。でも、自然の摂理というのか、変わつてしまつことなんである。

仕方のないことだらうけれど、人はそれを恨み、呪う。

例えるならば、数年前に起きた関東大震災。

だれもが興るだなんて思わなかつた事態が、自然現象で起こり、人生を台無しにされる。

それを恨み呪つた人は、少なくつたつて、一人はいるだらう。十人はいるだらう。

でも、呪つたところで人生は返してくれない。

ただ苦痛に耐え、助けを求めるしかない。

いま、そんなようなことが起きるような気がしてならない。

「寒くなる。何か上着をとつてきてあげる」

「ほんと? ジヤあまつて……るつて、お兄ちゃん!」

立ち上がり、家に戻ろうとしたところ、ギュウッと服を掴まれる。

「なつなに?」

「あれ!」

振り向くなり、指を差した方向は、車どおり人通りの少ない、すぐそここの道路だ。

じつと見てみると、かすかだがふらつき、いまにでも倒れるんじやないのかという、ヒト……をみつけた。

「本当にあれ、ヒトか？」

ふらふらしていい、ヒト……ではあるだらうが、正常ではない。なんだか、断食していく、まともな肉が付いていないような気がする。

むづくつと麻紀と共に砂場におり、道路に向かつて恐る恐る足をすすめた。

ふらりふらりと歩く姿は、すこく惨めで、だらしなこづに見える。

近づけば、だんだん本当にヒトなんだなと納得出来るよつになつてきた。

年はまだまだ若い。麻紀が俺くらい。もしくは、もう少ししたくらいだらう。背を曲げ、長いとも短いとも言えない前髪が垂れ、きちんとした顔まではわからない。

身長はさつと、一六〇くらい。悪くてもう少し低いだらうか、といつところだ。

道路につながる、三段くらいの階段を下ってきた。

オレらが接触するまであと数歩とこつといふで、いきなり前のめりに倒れてきた。

反射的に受け止めるのではなく、一人して一步ひく。

一步ほど前へ足を出しこればぶつかっていたかも。受け止められたかもしれないが、雰囲気が怖くて避けてしまった。

しかし、下が砂だからといって、受け身をとらなかつたらさすがに痛いだらうに、そんなうめき声すら聞こえなかつた。

起き上がるような様子はない。

このままにしておけば、砂によつて窒息死してしまつ。

むづくつと肩に手を触れ、グイッと仰向きにせせつやる。

決して汚い顔というわけではなかつた。何かを成し遂げてやつた

といつよつな、達成感を感じている清々しい顔に見えた。

きれいな顔だ。

ふとやつ思える」ことが出来た。

口に出していたかもしれないが、あまり覚えぢやいなかつた。

そつとその男の子の口元に手を近付けてみる。
息はしている。心のせこからホッと肩を落とす。

（着いた……着いたんだ……？）

きれいな海が見えた。

捜し求めていた何かを見つけることが出来たような気がした。
答えが見つかったわけではないけれど、決めた目標に向かって行
つた自分を讃めなければいけない気がした。

讃めて育てる。

その言葉を作った人に、愛を叫んだってかまわない。いや、ぜひ
叫ばせていただきたく思っていた。

休むことはした。

でも、本能的に行いたいと思つことは、必死に耐えた。耐えなけ
ればならなかつた。睡眠や食事。

やはり一番つらかつたのは断食。つまり食事。

人間、水さえあれば三日は生きていられるといつたが、水すら持
たなかつた自分、少しだけすこじこと思えた。

途中からは、お腹が空きすぎて、「空腹」だということを多少忘
れることが出来た。

眠くて眠すぎて、「眠い」ということを忘れることが出来た。

でも、海を見た瞬間、限界というものがあらわれたような気がし
た。

お腹が空きすぎて、本当に背中とお腹がくつつきそうだし、眠す
きて目蓋が一ミリとも開けることが出来なくなってしまった。

疲れ切った身体は、筋肉が大声で泣きだして体を起^ひすとすら出来なくなつたし。

まず先になにをすればいい？

寝ればいい？

食事を取ればいい？

筋肉を解^{ほぐ}せばいい？

とりあえず、目蓋が開かないから、自然的に睡眠を取ればいいだろう。

「お兄ちゃん……この人眠りながらお腹がなつてる」

「後で良い笑い者にしてやろう」

「そだね。でも、この人なんなんだろう。（家に）あげてよかつたのかな？」

「まあ、未来からやつてきた。とか、過去から……云々（うんぬん）はないだろうけど、そんなこといつてきたら、即座に外に放り投げればいいだけさ」

「そだね。じゃあ、当分は起きないだろうけど、そのお腹に満たせられるようなもの用意しておくね」

立ち上がり、麻紀は部屋を出でいった。

それを目だけで見送り、再びベッドに寝ている男の子を見つめた。着ていた物は、洗濯機に放り込んで、反応を知りたいがために、真っ裸で布団のなかに放り込んでみた。

もちろんそのとき、麻紀は部屋の外で待機させておいた。

でも、脱がしたとき、足の裏には長距離歩いたような豆が出来ていた。いや、豆だけなら可愛かったかもしれないが、血豆すらも出来ていたし、一つの豆なんか割れていた。

見ただけで痛々しいその足を治療してやつたけれど、思い出しただけで痛みが移つてくるような気がした。

でも、頑張ったような足裏にしては、体格的に運動とは程遠そうな体付きをしていた。

していたとしても、学校の授業程度で、特別決まったスポーツはしていないだろう。

しかしどうしてここにたどり着いたのだろう。ここに来ただければ、バスを使えばいい。といっても、回数が多いわけではないが。

もしこの人が追われ、逃げていたのならば、こんな足での疲れ具合はわかるとしても、あれ以来追っ手というのか、訪問してくるようなものはあらわれやしなかつた。

「まさかこいつ……本当にどこからかワープしてきたとか？……
あんて、ワープなんてあつたらもつと早くにワープしてくるだろ
うなあ」

わからないことがおおい。もつと単純で、すっきりわかるできる
ことだつたら喜んで手伝つてさつさと追い出せるの。

「頼むから、田が覚めたら記憶がありませんだなんて状況になりませんように」

一番やつかいなのが、目を覚まして記憶がありません。という状況だ。そんなことになつたら、さつさと救急車に運ばせてやる。
面倒だけはごめんだ。といいたいが、中にいれてしまつた以上、
面倒承知だということなんだろうけれど。

それから目を覚ますまで、だいたい一日もたつていた。

「今日目覚めなかつたら、海にでも沈めてやるうが

「そうだね……こんなに目が覚めないと、今まで病院につれていかなくて悪かつたかもだしね。死体になられたら、面倒だもんね」
あれから何度もお腹の空腹であるサインを聞いただろうか。
いつからこの人が寝ていないのかも気になるところだ。
どんな無茶してきているのか。

そんなことを考えているとき、急に彼の持ち物である携帯が鳴り響いた。

俺も麻紀も反射的にびくつき、ゆっくりとその携帯の方に顔を向ける。

「びっくりしたあ」

電話なのだろうか。一分もしないうちに切ればしたが、その後、五秒程度の着信音が鳴り響いた。

次はメールか。

電話に出ることは避けてやつたのだから、本人のことを少しでも知る権利があるのだから、メールくらい読んでも罰は当たらないだろ？

何かが変わるとと思つていた二日前。本当に現実、いつもの平凡な長期休校が、少しだけ波をたてはじめている気がした。

「なんて書いてあるの？」

「えつと……いきなり電話してごめん。暇じゃなかつたのかな？
だとしたら、後ででもいいから返事くれないかな？」

「この前のこと謝りたくて。ごめん。急にあんなこといわれても、泣が困るだけだもんな。反省してるよ。」

もしよかつたら明日でも会えないかな？ 会いたくないようだつたからしばらく連絡しなかつたけど、もうそろそろ限界かも。

いつもみたいに三人でばか騒ぎしたいんだ。わがままだろうけど、聞いてくれるとすごくうれしい。

この前みたいなことは言わない。今までどおり、笑いあいたいか

ら……

良い返事、まつてます。

だつてよ

「相手は男の人……かな？」

「つぽいな。沚つていうのはこいつのことだつ。んで、メールしてきた奴は……島？ なんて読むんだ？」

「どれ？」

持つていた携帯を、ゆっくり麻紀に手渡した。

「えつとお……木偏に午後の午？ んーわかんないや。あつ、アドレス帳見たらわかるんじやないかな？」

あまり慣れない手つきで携帯をいじり、アドレス帳からその人のものを探しだしていた。

読めないぶん、ふりがな検索という楽な機能が使えずに、少しだけ苦難している様子だつた。

「あつあつた。きしま……だつてや」

「へえ杵島……ねえ」

一応日本人らしいし、日本に住んでいて、別に漂流してきたわけでもない。

やはり、どこかからか歩いてきた。もしくは、走ってきたのだろう。

「いい加減、目を覚ましてくれないと病氣か何かにかかるぞ？ 餓死とかはやめてくれよ」

強制的に起こそと、多少乱暴に開いたままの携帯を麻紀から取り戻し、机においては、軽く回れ右をしてベッドの隣に立つ。

それを田で追いながら、ゆっくりと後を追う麻紀。

「ねえ、今どうして携帯、取り上げたの？」

ちらりと俺を見た後、ベッドに横になつている彼に田をやつた。

「この人、もう死んでたりして……」

「んー、一応息はしてるしなあ……麻紀、強制的に起こすから、この前用意したご飯、悪いけど温め直してくれないか？」

「了解」

出していく麻紀を見送り、再び彼の方を振り向く。

すやすやと、死んでるかのよう睡つている。

寝相は悪くない。と云つか、本当に死んでるかのよう、身動

き一つしない。それがまた、怖かつた。

まわりを見回し、なにか起こせられるものがないかと探す。

安全なものを使うとすれば、いつの時代のものかすらわからないよつな、古ぼけ、誇りに埋まっているかのよつな雑誌だつた。

きつと昔に母が読んでいたのだつ。それを丸く丸め、その目的である男のまえで、それを振り上げ、思いつくりそれを振り下ろす。

ベシッ……

とこり淋しい音をならしたまま、静けさは再び戻つた。

「……つほお～良い度胸してるな」

寝相はいいくせに、寝起きだけは悪いのか。

厄介な奴だなと思いながらも、何度もそいつの頭を叩きまくる。

バシバシと叩かれる夢を見ている。

ただ目を瞑つているだけのように暗く、自分の姿は見当たらない。

ただ、頭を何かで叩かれているだけ。

夢を見ているという実感はない。本当に殴られているかのよう…

…いや、本当に殴られているのかもしれない。

（ああ、腹減つたあ……）

起きあがきて、体や頭が狂つてしまつたつだ。

（起きあがきや……）

眠りが浅くなってきたのか、だんだん現実に戻つていく気がする。

少しだけ重い目蓋を開ける。

そこには、丸く長いものが力一杯振り落とされる。一瞬、その、丸く長いものを持っている人が、あつと気付いたかのような顔をしたのを瞬間に視界に入ったが、遠慮もなしにそれは頭に刺激を与えた。

「いいっ！」

「よお、起きたか」

「でもおにいちゃん、結構ひどい起こし方だけどね」

（お兄ちゃん？ 起こす？）

「仕方ないだろ。俺の妹にひどいことをした男なんだからな」睨み付けるように俺を見る。

いつたいなんのことを言つていて、『じじせじじじ』、『じじじじじ』にいるのか。すべてを説明してほしかった。

でも、こんなようなことを一度体験したようなことがあった気がする。でも、確かあの時は誰もいなかつた。

居て、状況を説明してほしいと思っていたかもしけない。でも、まさか居て、暴力を振るわれ、流れのわからない会話をされるだなんて思わなかつた。

「ひつひどいことつて？」

「ひどい……忘れたとか言わないよね？」

もぞもぞと体を軽く揺すりながら、チラチラと何度も俺を見る。

ゆつくつと上半身を起こすと、右腕に力をいれ、軽く頭を上げたとき、何かの異変に気付く。

（あれ……？ こんなに布団に触れてるものだっけ？）

少しだけ自分の体温で暖まった布団。いま、少しだけ隙間を空けたときに、その隙間から冷たい空気が入り込んで体を直で冷やす。

体は足と腹筋の筋肉痛という重み以外、いやといつほど軽かった。いつも絡みくるパジャマを着ていないかのようだ。しかし、ぱつと見、自宅ではない。着替えさせてくれて、違う服を着せられたのかもしれないけれど、にしては動きたいように動けてしまつ。

かといって、ピッタリすぎるような窮屈感もない。

もしかして……と、だんだん血の気が失せてくる。

軽く布団をめぐり、その中身を確認するなり瞬間的に固まつた。

(服……着てない?)

「ひどい……本当に覚えてないの!?

「えつあの……えつとお」

女性のまづが、信じられないといつもいつな悲鳴をあげ、ひどいと
いつて両手で顔を隠し少しだけ下を向く。

まさか、してしまつたのだろうか。でも、今まで歩いていた記憶

しかないし、この一人にあつたのだって、初めてだと思ひ。

本当に記憶がないのならば、今の状況を納得する他ないのだろう

か。

「ちょっと待つた……状況を説明してくれないか?」

とりあえずそこからだと、男性……といつても、そんなに年齢差
はないようにも見える方に聞く。

「そうだな。簡単に言えば、へ口へ口歩いては急に倒れたのを
拾つた。だけど、深く言えば、倒れたおまえに悪戯したつてところ
かな?」

「いた……ずら?」

「やつ。お前、その布団の下どうなつているのかわかっているんだ
る?」

「あつ……ああ」

「それで、どういう反応するか試したってわけ」

そうネタばれをするなり、疲れたかのよつこため息を吐き、多少前かがみになつていていた体を起こす女性。

つまり、すべて楽しむために仕組まれた罠に、疑つことなくきれいに填まつてしまつたのだ。

「なつ……なんだよそれ……」

力が抜け、へなへなとベッドのうえに再び仰向けになつた。

それならそつと、驕さずにはつきり言つてくれればよかつたのにと思ひながらも、それじゃあ意味はないかと少しだけ思い返す。

その瞬間、緊張感が抜けたからか、力強いお腹の鳴き声が響き渡つた。

着替えを渡し、服を着替えていた間、麻紀には『飯の用意をさせた。

その足で歩かせる気にはさすがにならず、準備が出来しだい、持つてきてもらえるように頼んだ。

その間にでも、俺はこの男に事情を聞いた。

「んーっと、ちょっと考え事がまとまらなくって、自棄になつて飛び出してきたのは良いけど、片道きりきりを選んだら、余計なところに使うお金がなくなつたんだ。でも、ここ……海を近くで見ないといけない気がして、駅から歩き通しでここまで来たつてわけ

つまり、ただのバカ。

普通だつたらそんなことはしないし、下手したら餓死をしていたかもしれない。しかも、それから一日間寝続けたのだ。今きちんと意識があつて、こいつやって話が出来るのもすここかもしれない。

「無謀なことを」

「自分でもそう思つよ」

そういうつたあと、淋しそうにそつすることしか出来なかつたといつた。

そんなに何かに追はれていたのだろうか。
ふとその時、電話とメールのことを思い出した。

「はい」

「え？」

机に置いておいた携帯を手渡すなり、少し不思議そつな声をあげる。

「電話とメール着てた。てこいつもこわつかのことだけど」

「そつか。悪いな」

「え？」

「色々迷惑を掛けてしまつて」
携帯を開くことをせず、じつと俺の方を見つめていつてくる。
迷いとか、照れとか恥ずかしさなんてなく、ただ真っすぐな瞳だつた。

最初は、すぐ憎み、意地悪ばかりをしてやろうかと思つていたところに、そんなにも真つすぐだと、運がよかつたと思つ他ないだろ。

「はつ早くメール見てやれよ」

逆に恥ずかしくなつてそのまま口で言つなり、クスッとほほえみ、うんとうなずいた。

調子が狂う。

なにか、オレらに期待とかではなく、心の何かを許していくような感じがした。

「お待たせ」

扉を開け、良い匂いを漂わせながらも麻紀が入ってきた。
お盆をベッドの近くのテーブルに置く。

「これ……」

「寝ながらお腹なつてたぞ」

「あつ……」

カアツと火照るその男の顔は、すごく子供みたいだつた。
でも、今でもメールを見ることはしていなかつた。
見たくないのか、何か心当たりがあるのか。

「飯を食べ、お風呂に入れた後は、適当に色々話した。
ここがどこなのかから、お互に何才なのかまで。
どこに住んでいるのかなども話したし、どんな学校に通つていてる

のかや、夏休みの過ごし方など、とにかくたくさんのお話をした。

話していくうちに、だんだんこの男には大きな害がないような気がしてきた。それとともに、不意にこの男になら麻紀を頼んでも大丈夫な気もした。

どうしてそんなことを考えてしまうのかはわからないが、俺が出来なかつたことをこの男になら出来そうな勘が働くのだ。根拠があるわけではない。本当に感覚だ。

一日程前から何かが起きている気がする。

何かが変わると……。

きつと変わつていくきつかけはこいつ、辻と名乗るもの現れだ。変わつたのはこれだけじゃない。これからも、今まで知らなかつたようなことが、次から次へと現われてくるのだらう。

今日は、まだ前兆でしかない。

これから起きること。すべてが理解できないことにならうとも、現実を見ずに逃避するよつた人間にはなりたくないし、なつてはいけない気がする。

「さつ今日はもう寝たほうが良い」

「あつああ。『さつ今日でもう帰れ』って言われるのかと思つた」と、すこし驚いたような表情でいつた。

「そんなにひどい奴に見えるか？」

「いや、そうには見えねえけど……」

「けど？ 何か不安なの？」

「不安つていうか、どこの骨の輩かわかんないようなやつを、そつ軽がる預かつていてくれるもんなのかなあつて」

不安そうに見上げる辻を、今更放つておけないだらう。それに、まだまだ何かが変わるはず。

変わつてほしくないとも思つてはいるけれど、なにか、変わらなければいけない気もしている、

感覚と思つてゐることが一致しない。きっとそれは、運命というものが交わつてゐるのだろう。

「沚、年齢は俺と同じ。それだけ知つてゐるだけでも、十分だ」
深入りはしない。

しなくてはいけない氣がするなら、もうとつゝの前にしてゐるし、追つ払うなら、それこそ起きた時点で追い返してゐる。いや、拾うことすらしなかつただろう。

それに、この男、沚に少し疑問点を持つてゐる。

携帯のメールや電話を確認しないのか。

未だずつと一緒にいるが、携帯を見ないのかが疑問に感じられた。

「拾われたのが、あなたの家で良かつた」

軽くにつこりと、警戒心ゼロな笑顔を向けてきた。

きつと憎めない存在。

向こうに親友二人を待たせているんだといった。でも、急いでそ

の二人の元へ帰ろう。戻ろうという素振りはしない。

二人との関係に距離を置いているように。昔の俺に似ていた。

「喜べ。そして心の底から麻紀に感謝しろよ」

「え？ 私？」

急に話を振られて、どう反応していいのかわからないかのように、自分自身に指を差し、キヨロキヨロと俺と沚を何度も見た。

その姿が可愛くて、ついクスッとほほえむと、釣られて沚も笑う。二人で笑つていると、麻紀は拗ねるようにプウッと頬を膨らませる。自分はパソコンと同じ分類にはいるといつても他言ではない。そうだとわかつたのはいつたいつの頃だつただろうか。

「ありがとう。麻紀さん」

改めそういう沚に、赤面しながらコクンと頷く。

夢を見た。

懐かしく、カラフルで普通の夢。

あの真っ暗な部屋みたいな囲いの中について、訳が分からぬまま呻いたり、寂しがつたり罪悪感を感じる夢ではない。

真っ青な空を、杵島と麻紀に挟まれ、間に俺が座つて見上げていた。

いるのは三人だけじゃない。

杵島の隣に立つてるのは、髪がきれいで真っ黒で。前髪は短くて、サイドが少し長いかな？ くらいで、後ろだって長いとはいえ。眼鏡をかけていて、可愛らしく、男か女か迷うような容姿だ。甘えたがりなのか、麻紀の股のなかに入るかのように、小さく座つて麻紀が頭を撫でている女の子もいた。

髪の色が少し薄くて、前髪は真ん中分け。ショートヘアで、人見知りが激しそうに、弱々しそうな表情をしていた。

五人。なんだか、この中にいたら、すごく気分が良くて落ち着く場所。

何かを捜し求めて草原にきたはいいが、気分が良すぎてここを動く気がしなくなってしまったみたいに。

会話することではなく、ただ風にあたり、草のにおいを嗅ぎ、心を落ち着かせていた。

そんな心和む夢だつた。でも、疑問点はある。

なぜそこに杵島はいて相澤がいないのか。

なぜ麻紀がいるのに、シスコンじみている兄貴がいないのか。

何がが、今まで考えていたような平凡な人生を変えようとしている。

死ぬまで色々なことがあって、頭を必死に使って考え、それでも分からぬことがあるながらも、必死に生きようとしている姿がある。

夢というのは怖い。

いつかこれが現実になるんじゃないかなって、不安を募らせていく。

ゆつくじと田を覚ました場所は、寝る前と変わらなかつた。
さつきの夢は幸せな夢だつたのだろうか。淋しい夢だつたのだろうか。

はつきりと覚えている夢なのに、感情までは覚えてはいない。
感じていなかつたのかもしれないし、感じようともしていなかつたのかもしれない。なんだか、他人の行動を、なにとなく眺めているだけのようだ。

まだ周りは暗い。

朝日も出ないうちに起きるだなんて、懐かしい。
枕元に置いてあるはずの携帯を、手探りする。

時間は四時。

前にもこんなことがあつたか、そのときは確か一時だつた。しかし、それは夢で起きたようなものだ。
「何の夢だつたんだろ?……」

(予知夢を見れるような力なんてないしなあ)

「あつてもいやだけど」

ため息混じりに独り言を終わらせ、軽く髪を搔き上げては布団に再び入りなおす。

眠れるだなんて期待はしていない。

三日間寝通していたらしいし、少しばかり考えていた所為で、頭が覚めてきた。

布団をきれいにめくりあげ、左足から降りていぐ。
着替えを準備してきたわけではないから、お兄さんが昨日準備してくれた服を有り難く使わせていただく。
少しばかりブカブカで、袖がだいぶ余る。
ちょっと悲しみを覚えながらも、ゆつくじと袖をおむ。

カーテンをきちんとあけて、携帯をゆっくり開く。あの二人が見たのか、来ていたというメールは新着として扱われていなかつた。

危ないメールではないと思うが、キャンプの時の話だつたら、さぞかし頭を傾かせただろう。

メールの内容は

「いきなり電話してごめん。暇じゃなかつたのかな？ だとしたら、後ででもいいから返事くれないかな？」

この前のこと謝りたくて。ごめん。急にあんなこといわれても、泣が困るだけだもんな。反省してるよ。

もしよかつたら明日でも会えないかな？ 会いたくないよつだつたからしばらく連絡しなかつたけど、もうそろそろ限界かも。

いつもみたいに三人でばか騒ぎしたいんだ。わがままだらうけど、聞いてくれるとすごくうれしい。

この前みたいなことは言わない。今までどおり、笑いあいたいから……

良い返事、まつてます。……か。良い返事つて言われてもなあ。やつぱりこのメールは見ないでおいたほうが良かつたかな」

会いたいというのは昨日か一昨日の話だらう。

いまさら返事をするのも変な気分にさせるだけかもしれないけど、返事をしておいたほうが二人の為だろうか。返事がなくともおかしな話ではないかもしれないが、返事をしないと心配するだらうか。

(しないよりは良いのかな？)

慣れない手つきでメールを返信画面にもつていく。

(電話じょうつかな？)

ふと壁に書けたある時計の針を見る。

(非常識な時間だよな)

それに、なんだか口ではつまへ言葉を選べ」とができないかもしない。

「んーと……」

ピコピコとはならない携帯。

カタカタと小さく音を鳴らしながら、文字を打つたり、打ち直したり全部消したりしていた。

うまく言葉がまとまらない。なんといえば一人にうまく伝わってくれるのか、どうすれば今の自分状況を伝えることができるのか。なんとなく、少しだけでも納得をいかせると、ゆっくりと送信ボタンを押した。

「パンはお嫌いかな?」

一人のどちらかが部屋から出てきて、リビングの方に行く音が聞こえる。

その時の時間は七時くらいだった。

もうお腹がペコペコで我慢がきかなくなってきた頃だ。釣られて起きるよつにリビングに向かうと、オハヨウの次の台詞だった。

それに首を振る。

「朝ご飯、パンなんだ? パン大好きだよ」

起きていたのは妹の方だった。

どちらかといえば、お兄さんのほうが早く起きるようなイメージがあつた。

「よく眠れました」

「あつはい。さすがに向日も寝たからか、朝は早く田覓めたかな」「なり朝日を見た?」「ここれから見える朝日と夕日はきれいですよ」「うん。朝日、きれいだった。今日は夕日見てみたいかな」「うん。でも、帰らなくて平氣なの? 友達……待つてるんじゃない?」

「あー……やつぱり見たんだ?」

「ええ」

「つすうとほほえみ、何も悪いとは思わないかのよつた笑みだ。出されたパンを手に取り、口に含む。む」

パンは食パン。

ふわふわしてこいやわらかい。ゆつくりと角度を変えるだけで、簡単に口に含むことができる。

「良いんだ。やつき返事を送つた。できるだけ早く帰りつとは思つたけど……あつせうだ。一つ頼みがあるんだけど」

「なあに?」

「俺帰るとか……」

「なんだよ、おまえりむつ起きてたのか

「おはよ。お兄さん」

「お兄ちやんおはよ」

パンを一度食べ終えたとき、お兄さんが起きてきた。

「おまえにお兄さんつて呼ばれる筋合いはねえよ」

「つんと音を鳴らすように叩き、クスリと微笑む。

「だつて名前面倒な名前なんだもん」

「この俺の名前を面倒だと？ 失礼な」

なんて笑いあえる間、俺はまだここにいるところの証でもあるんだ。
ここにいていいのかとけば、居たいだけ居ればいこかと黙つてくれたお兄さん。

ボーッとしていても文句を言わない妹の麻紀。

この場所は、とても居心地が良くて長居をしたくなるけれど、早くここからでなければ、何か大きな異変に巻き込まれるような予感がした。

帰らなければならない。

帰りたくない。

考えていることと感じていることが、うまく絡み合つてくれやしない。

「もし……もし俺が帰りたくないんだなんていつたら、君たちはどうする？」

「帰らなければ良いぞ。俺たちはかまわない

「邪魔だつたりしない？」

「しない。むしろ、おまえがいると、何だかこの先何かが起きるような気がしてな」

淋しそうというより、清々しい感じ。その起こうじやうな出来事を待つているような、迷いのない瞳をしていた。

「……、私の特等席なんだ」

誇らしげに自慢するようじつこう麻紀の隣に座る。

お兄さんがご飯を食べ終えた後、おれらは海岸に来ていた。海岸とこより浜辺といったほうがいいような気がする。ゴツゴツとした岩場に座った麻紀は、すくべその場に溶けこんでいるような気がした。

長い間その場にとどまり、その場を愛していたよう。

「す、い、綺麗で澄んでる……。こんなにテレビでしか見たことないし、沖縄以外にもこんなに綺麗な海してる場所なんてあるんだ……」

「あっ……それは。そうだね」

少しだけ言つてはいけないことを言つてしまつたのか、少しばかり焦るような様子を見せる麻紀。

今になつて、ごめんだなんて謝ることはできない。

もしかしたら、ただ返答に困つただけかもしない。

「こんなに綺麗だつたら、汚すわけにはいかないよね。なんだか、神の聖域みたい」

「たしかに、聖域かもな。にしても、おまえ……泣つて結構ロマンチックなのとか好きだろ?」

「良くわかってるじやないかお兄さん」

なんだか今の会話、何かを思い出させる。

いつもこんなふうに話して、こんなふうに笑いあえて、一緒に居て幸せを感じさせんやつらを、俺は知つてゐる。

今までだつて一緒に居たというのに、自分から突き放した奴ら。

「おまえさ、いざ誰か一人にしか会えなくなつた場合、誰を選ぶ?」

「えつなにを唐突に…… そうだなあ。だれだろ?……」

一人だけ選ぶだなんてできやしない。

あの人にもこの人にも…… と言つわけではないが、選ぶ難しさを問われているような気がする。

実際、そんなことになつた場合、杵島にだつて会いたいし、相澤にだつて会いたい。このきょうだいにだつて会いたい。

「一人にしか会えないなら、誰にも会わない。絶対に会わなきやいけないなら、名前も知らない、赤髪の男の人に会いに行くかな」

「赤髪?」

「そつ。一回だけ会つたことがあるんだ。土砂降りの雨の日に……つと……気にしないで。俺もよくわかんないし気付いたら病院にいたし」

「お前……」

兄さんと麻紀は、少しだけ心当たりがあるかのよつこ、じつと俺を見つめる。

少しだけ胸騒ぎがする胸と、何かを追い詰めるかのような瞳。どちらも痛いもの。苦しいものだつた。

ゆつくりと麻紀は俺の右手に触れた。その瞬間、何かに反応したかのようにはがびくついた。

そういうえば、ここに来てから左手に熱を感じなくなつた。というより、左手の熱が抑えをなくし、左腕全体を占めるかのように熱を伝え、熱くなるという感覚をマヒさせてしているようだ。

まだ右手には熱はいっていないはずだ。

にしても、麻紀の手はすぐ冷たい。何かで急激に冷やされたような冷たさだ。

確かにここはお世辞にも暖かいとは言えないけれど、適温のはずである右腕ですらすく冷たく感じられた。

「冷た…… 寒いのか?」

あまりにも異常な冷たさだ。

冬、北海道に住んでいればこの冷たさも納得はいくのだけれど、そんなにも寒くはない。

それに、冷え性という冷たさを通り越して。どこかで感じた異常な冷たさ。

あの時はこんなにも感じなかつたが、あいつ……相澤と同じような冷たさ。

「水……」

「知ってるんだ？」

「あつと……」

「なにを知っている？　どこまで知っているんだ？」

「わかんない。どの話をしているのか」

「そう……か」

少しだけ残念そうに言つ兄さんの表情に、少しだけ何かの違いを感じた。

問い合わせようとはしない。素直に諦めてくれるこのやりとりが、少しだけ淋しかつたけれど、うれしかつた。

「私もね？　似たような経験をしたんだ。青……というよりスカイブルーの髪した女性。実際そんなヒトがいたら変な人じゃない？　でも、その人にはそれが当たり前のような気がした。しつかりとした表情で、私をじつと見つめてきた。その人には、私は何か懐かしいものを感じたんだ。あなた……辻さんにはそういう感じの人とは思わなかつた？」

「その言い方だと、俺が会つた人と、何か関連があるつて言いたいのか？」

「うん。私はその人のことを知つてゐるし、きっとあなたがいつた人のこともわかる。知りたい？」

真剣な眼差し。

きっと麻紀に聞けば簡単にわかることのようなきがした。

どんなに危ない人だつて、どんなに人が恐れるようなものだつて、

あそこにいた理由とはなした理由があるはずだ。

「いや。知りたくない」

首を横に振る自分。

本当は物凄く知りたくて、体がこれ以上ないくらい「うずうずしているけれど、何となくわかつた気もする。本当のことがどうかはわからないし、麻紀が言うなら、麻紀がいったほうが正解で確実なのかもしれないけれど、あえてそれを聞きたくなかった。

「そう」

「止。いざとなつたら麻紀を頼むな」

「え?」

「おつお兄ちゃん!？」

麻紀もそんなことをいつてくるだなんて思わなかつたのか、二人揃つて兄さんの方を見る。

俺には意味はわからないが、麻紀は少しだけ心当たりといつのか、そういうお兄さんのほうが言いたい意味が多少でもわかつたようだ、それが確実にも、良い方向ではないようだ。

何かをお別れするかのようだ。

お兄さんは、特に淋しそうな表情を見せているわけではない。ただ、何かをすつきりさせたいかのような表情だつた。

「……わかつた。ただし、いざとなつたらだ。普段はお兄さんが、必死にお守りするんだろう?」

「ああ。いざとなつたらな。それまでは、俺が麻紀を護つてゐる」

麻紀を挟んでの会話。

麻紀のほうが内容を深く知つてゐるようなのに、今の会話にはついていけないようだ。

でも、その時感じた。

左腕に熱がこもつてきているのが。

正確には左手だ。

何かに反応している。確実にこの体を乗つ取るかのよつて、左手を燃やすかのようだ。

火傷をする。なんて感覚はない。なんだか、左手の意志で熱をためているかのようだ。

ゆづくと左手に手をやるが、異変を見ることなんてできやしない。

その眺めていた左手を、ゆづくと麻紀の手に添える。

「あつ……」

何かに反応したような顔をした後、驚いた表情のままもづくの方の手で俺の左手を包み込む。

「暖かい……」

（これを暖かいといつのか。俺には、すこく熱いんだけどなあ）

その奥からも、身を乗り出した兄さんの右手が左手に触れた。

「不思議だな。俺は右手なのに、おまえは左手か。対になつていてみたいだな」

「え？」

「おまえ、俺の手も冷たく感じるか？」

「いや……」

「同じくらいの温度同士では、熱いも冷たいも感じないだろ？」

「え？」

わけもわからなく、手をかえ右手で兄さんの右手に触れた。

（あつ……）

「熱があるのか？」

「頼むから風邪を引いたのか？とかは聞かないでくれよ？」

「じゃあ……？」

「ここまで言えばわかつてくれると思つんだが？」

手を離し、じつと一人を見つめる。

もしかしたら、この一人は杵島や相澤と同じ力を持つているとい

うのだろうか。

もしかしたら、俺もその同じような力を持っているかもしれない。もしかしたら、旅をはじめ、ここにたどり着いたのも、こうなると何かで決められているのだろうか。

(もしかして……駅に着いたときに感じた、行くのが当然な感覚はこの一人に会うため？)

「わかるよ。なんとなくだけど、俺も同じかもしないってことだよね？」

「ああ」

「……俺がここにきたの、考え方があったからみたいなこといつただろ？ それ、そのことなんだよ。メールみただろ？ あいつも、同じような力持つてて……」

「私は水だよ。辻さんのことだからびりせ、理解しようとしてあげなかつたんでしょ？ じゅやつて力を見せられて動転した？」

そういうて両手を目の前にある海に向けて軽くのばし、何かを唱えるように静まつた。と思つた瞬間だつた。

ザバーンと言つような大きな音を鳴らしながら、岩場よりも……おれらがどう必死に背伸びをしたつて、どんな道具を使つたつてとうてい届かないくらいの水柱がのびたと思ひきや、それは形を変えて空想の龍の形に似ていた。

それが自然現象じやないことくらい考えなくつたつてわかつた。

麻紀だ。

麻紀が今、オレらと向かい合つている龍を作り上げている。

「それとも、こんなの？」

次に口を開いたのは兄さんの方だった。

立ち上がつた兄さんは、右腕をボールを投げるとき、軽く後ろに

降る腕のように振り上げ、一気に体重を前に持つていく。

ボールを無鉄砲に、力任せに投げるような振り方だつた。

手は火玉に囲まれるようになつたのも一瞬で、その火玉は形を変えて兄さんの目の前を力強い勢いで飛んでいく。

火玉は玉ではなく、同じように兄さんが火柱をたてたような形になるなり、龍というよりはもう少しからだがはつきりしているような、ドラゴンに似た姿になつた。

それと麻紀の龍が絡み合ひ、仲がいいのを証明するように、一気に何とも言えない鳴き声に似たものを鳴らした。

ちらりと二人を見ると、麻紀は両手で、兄さんは右手だけであらを操作しているようだつた。

再び絡み合ひ龍たちを見るなり、今まで俺が悩んでいたことが、馬鹿馬鹿しく感じてきてしまう。

「でも……俺にはそんな力はない。ただ手が暖かいだけさ。その火を見ていると、懐かしい感じがするだけ。でも、俺には使えない」

「……おまえはガキか？」

「え？」

いきなり言つてきたのは、手をグーにしてドラゴンを握り消し、ため息を吐いて振り向く兄さん。

麻紀も手を下ろし、兄さんの方を見上げる。

「何度も試してみりやいいんだよ。おまえに力があることは確実なんだよ」

「なつ何で言い切れるんだよ？！」

「今このれをみておまえはなにを感じた？ 怖くて逃げようだなんて考えちゃいなかつた。懐かしいと感じているようだし、叫ぶことすらしなかつた」

「そつそれだけで？」

「それだけじゃない。俺が、なんだか主にあつたような感覚なんだ」「主？」

「人というのは、意識的にでも、無意識でも無自覚でも、権力や能

力が高い奴に集まる性質をもっているんだ。その無意識になつたり
ーダー。それがおまえは、沚に感じたんだよ」

「俺が……リーダー？」

「……この力は、同じものが集まつてはいけない。リーダーだけが
集まつたつて意見が食い違い、まともに話し合いができなくなつて、
争いをはじめてしまう。そのためには力が必要となる。そしてその
力が適わないと、自滅行為に走つてしまつ。だから、同じものは消
えてしまう。違う種類のものを集めなければいけないのさ」

「えつそれ……どう言つこと?」

震えた声で質問するのは麻紀だつた。

何かを恐れているかのように、表情はすく青ざめていた。
「麻紀には黙つていたんだけど、そういうことを。俺の主は沚さ。
沚には未だ力は呼び出されていないみたいだけど、きっと目覚めた
ら俺は沚には適わない」

「もし、俺に力が目覚めたら……どうなるんだ?」

「きっと俺は、炎に食われる」

「そんな……！」

「沚……おまえは目覚めるべきだ。おまえなら、何もかもを変え
てくれそうな気がする。護りたいものをしっかりと近くに寄せてお
きな。力は、護りたいという思いの力に反応する」

食われることに恐れを持つていない目だ。

でも、俺の力が目覚めたつて、兄さんが死ぬとは限らない。同じ
力を必要とされないなら……。

「でも、兄さんが死ぬつて言い切れるのか? いなくなるべきは俺
かもしれないだろ?」

「いや、わかるんだ……何となくだけど

「……」

自信満々にいわれては言い返す言葉が見当たらなかつた。

護りたいものを傍に置く。

でも、もし今のことが本当なら、傍にいてくれないほうがいい。

護りたいほど誰にも気付かれない場所に隠しておきたい。近くに置いておいて、守り切れずに傷つけてしまうだなんていやだ。

だからなのだろうか。一人から離れた理由は、一人を危ない目に遭わせたくない。遭わせたくないから一緒にいることがつらかったのか。一緒にいたくないと思ったのか。

「……わかつたよ。俺が一人から逃げてここにきた理由が「その理由はなんだ？ その二人を敵だとみなしたのか？」
「違う。一人が大事だから。すごく失いたくない奴だつたから、一緒に行動したくなかったんだ。だから考えるために来た」「護るべきものが怖かつたってことか？」
「……多分。これから危ない目に遭うかもしれないならよけいに涙が出てきた。

杵島や相澤のことを考えると不安が舞い降りてきたようだ。
怖い。相澤が。

同時に兄さんと麻紀までも不安だった。

一人しか選べられないのなら、相澤はどうなるのだろうか。

どちらが食われる？

どちらが上か……。

こわかった。いすれはどちらかを失うのが、自分が失うよりも、
麻紀か相澤、どちらかがいなくなってしまうのが。

どちらかなんて俺には選べられない。
麻紀や兄さんも大事に感じるから。

「悪いけど、俺、明日帰るよ」

「見つけたか？ 護りたいもの」

「違う。見つけていたんだ。でも、どちらと俺は選べられないから。
兄さんが食われるなら俺が用意めなければ、兄さんはそのままい
られるんだろう？」

「原理はたぶんあつてるだろうけど……」

「なあ、一つだけ聞いていいか？」

「なんだ？」

「その食われるって、そのリーダーと出くわさなければ、食われる
とか……そういうのはないのか？」

「たぶん……でもそれははっきりと俺は知らないから、なんともこ
たえられないけど、会つてすぐに食われるわけじゃないみたいだし
「そつか……なら俺はやつぱり早く帰るべきみたいだ。早くあいつ

らと会つて、できるだけ長く一緒にいるべきみたいだ」

「……なんとなくだけど、おまえが考へてること。わかつたかもしない」

「そうか」

伝わつてくれて。わかつてくれて素直にうれしい。

どちらとも失わいためには、会わない会わせないが一番いい。もし会つてしまつのが運命ならば、それまででも、杵島や相澤の二人と長く一緒にいたい。

「沚さん……一つわかつていてほしいんだけど、そのリーダーっていうのは、もしかしたら特徴があると思うの」

「特徴が？」

「いやな話、私や沚さんには怪しい人があらわれたと思うの」

怪しい人。赤髪のあの男の人

「あの人ガリーダーの証なんぢやないかと思うの」

「それを証明するかのように、俺にはそれに値する人は現われなかつた」

「あの人にも現われなかつた」

「麻紀！」

意味ある言葉を麻紀が言つた瞬間、兄はいきなり怒鳴つた。

「いいから。ごめんねお兄ちゃん。ずっと私が立ち直れないでいるから、心配掛け続けたんだよね」

話が急に分からなくなつた。

まったく分からぬといつわけではないけれど、なんとなく今までの会話上、一度誰かが何かの力に食われた。と知つてゐる様子ではあつた。

兄さんが、食われるだのなんだのつて話をしていたとき、麻紀は何かつらそうに何も口を開かなかつた。

でも、何かに区切りがついて、はつきりとしたかのように口を開いた。ということは、何かの覚悟を決めたのだろう。少なくとも俺にはそう見えた。

「お兄ちゃんには、一人で一人つてくらい、息ピッタリな親友がいたの。私には、私もお兄ちゃんも愛してくれる彼氏がいた。つて言つても同一人物で、私もお兄ちゃんもその人、優貴を愛した。

でも、それは起きてはいけないことを起こした。

優貴は私と同じ力を持つて、すごく喜んでいた。でも、日々過ごすうちに優貴は私たちを必死に護る力が増した。そして力が安定するなり、その力は主である私よりも強くなつてしまい消滅してしまつた。その優貴にも現われなかつたの」

「そして俺にも現われちゃいない。つまり、ここにいる主は一人「証が現われるのは、力を預かる前だと私は聞いた」

「誰に……？」

「その怪しい人に……」

その後俺は何ともいえなかつた。

本当は何もなかつたんじゃないのだろうか。
自分になんか力はなかつたんじゃないか。
実際証拠なんてない。

力を発揮できたわけでも、発揮して良い氣すらも消えてしまつたのだから。

もし自意識過剰に感じたとして、自分が主だつたら、兄さんをなくしてしまつ。それだけはいやだと思つてしまつのだ。

力なんかなければ良い。力なんか目覚めなければ良い。

生きてはいけないと感じながら過ごした日々。どうして生まれてきてしまつたのか。なんのために生きているのか。いつたいいつ、俺には生きて良いという権利が生まれたのだろう。

その後の話は、聞いていたが、ほとんどを聞き流してしまつたような気がする。

明日、本当に帰ることにした。やつこつと、兄さんは少し淋しい顔をしていた。でも、その淋しい顔で言つたんだ。

「じゃあその帰る背中を眺めることができるたら良いな」と。

その日、疲れた体を癒すように眠りに入った。

考え事をして眠れやしないだろうと思つていたといつのこと、そういう日に限つて夢と/orものに急かされた。

いつのまにか夢の俺は、田をばっちらりあけて、今までになつて力強そうな炎に囲まれていた。

久しぶりだつた。炎に囲まれる夢を見るのが。

いつもとは少し違う。そんな部分がありすぎる。

炎の恐怖を呼び起しすよ/うな大きさ、自分の体温があがつていいくがリアルな感覚に陥られる具合。しかし、一つだけ消えてはいけないものが、きれいに消えていつたものがあった。

罪悪感。

罪悪感といつもの自体を忘れてしまつたかのようだ。

ただ茫然と炎を見つめる。

(なに……してたんだっけ?)

増えていくのは疑問ばかり。

「助けるよ……俺を」

(なに言つてるんだ?)

呪われた。あるいは操られたかのよつて、声は炎のなかにのまれていいく。

『正気以外のおまえと話す気になれないな』

(正気?)

「……そつかよ」

「そつと田蓋を閉じたと思えば、すぐに視界は自分の物にもじつた。
「なにが……どうなつてるんだよ?」

あまりにも今までとは違うすぎでいて、夢のなかまでも混乱してしまう。

違う自分が居たことは確かだ。何となくそんな気はするけれど、あんなにもにらみつけるような瞳、力強い姿勢に力強い口調を出せるなんて。

ふと、小さい頃のことを思い出した。

近所にどうしようもないガキ大将がいた。

運悪く一人でいるときにそのガキ大将に田を付けられては、ああだこうだとわけのわからないようなことをいわれた。

なにをいわれたかなんて覚えていないが、馬鹿馬鹿しく思えてきて、何も反論しないでにらみつけたことがあった。その時にいわれたショックな言葉を、今でも覚えていた。

『おまえの田なんか怖くねえんだよ!』

子供心の強がりだったのかも知れないけれど、自分には誰にも勝るものなんかなかつたんだと思い知らされた気がした。

なのに、自分じゃない自分にはあんな顔ができるなんて……。

(力がほしい)

自分じゃない自分が羨ましかつた。

だから、はじめてそう思えた。

力を貰つてどうするつもりなんかなんてものはわからない。でも、今みたいに自分じゃない自分が強いなんて許すことができない。

「なあ、正気な俺には力を貸してくれるのか？」

『貸すだ何ていっていいない。正気じゃないおまえとは話す気になれなかつただけだ』

(屁理屈……)

「なら、一先ず話そう。貴方はなにもので、呼び起しすとこうのはなに？」

『話すといつより質問攻めだな……。名前は教えられない。自然におまえが生み出すものだ』

「それは、俺が作つていいってこと？」 山田太郎とか田中勇作とか

……」

『さあな。いつかわかるさ。で？ 次の質問は、呼び起しすことか？ 俺を呼び起させ』

(なんかできとうな人だなあ……)

「どうやつて？」

『心と名だ』

「じじじりとなだ？」

『……面倒な奴だな。心と名前だ』

ため息をつきながらも、こいつは馬鹿かといつよいに額に手を当て、疲れ果てている様子が手に取るよつにわかる。

「ああ。心ね……つていうか、名前つて、教えてくれないとわからんつて。結局質問、循環するばつかりじやないか」

ため息混じりに出たその言葉は、結果的な答えを導きだすための言葉にはなりそうもなかつた。

会話として成り立つていいのかも不安な会話でもあつた。

『おまえは力がほしいか?』

その質問に、おれはぎゅっと歯を噛む。

ほしいといつほどの欲しがつていてる自分がいない。

こりなことはつたり言える自分もない。

(俺が力を得れば兄さんは……)

貰えるなら貰いたい。でも、誰かを犠牲にすらへらにならへらないし、使い道がない。

杵島や相澤をその力で守ることができるのならば頑張っておきたい。『今の俺にはまだ決められない。誰かを犠牲にしてしまつなら余計に』。まだ、まだだけど、その力はいる。いつかは必要となるだろつから、しばらく保留つてことにしちゃダメかな?』

『タイミングをつかんだときに、また呼べ』

「うん。貴方は俺が話したいときによく出でてくるもんね」

それは途中で気付いた。

どうしてタイミングよく来てくれるのかを考えたとき、感付いた。なんとなく、自分はこの人を必要としているのかもしれないと……。護りたいものが増えた。

だから、そのすべてを護るために、用意する前に、今までどおりの生活に戻ればよい。

麻紀と相澤をあわせてはいけない。

どうなつてしまつのかがわかつていてるのなら、それを避けるだけ。そんな簡単なことじゃなくつたつて、時期をのばすことはできるはずだ。

「じゃあ。ありがとうな麻紀さんに畠代さんまやゆき」

「ええ、約束を守れてよかつたわ」

「約束？ なに？ おまえらなにコソコソと約束してたんだよ」

（そういえば、あの時いなかつたんだっけ？）

予知夢じみたリアル感あるカラフルな夢を見た日の朝だった。下に降りたら麻紀さんが朝ご飯の準備をしていた。

お兄さんはまだ起きていなく、一人きりになつたときだつた。帰りの時の話をしたとき、少しばかり頼み事をした。

「約束というより頼みごとだけね。また空腹で倒れないためにも、おにぎりをね。頼んだんだよ」

「つて言つても、結局寝ないんだつたら倒れるだろ」「呆れるように畠代がそついた。でも、口元は、少しだけ頬笑んでいるような気がした。

「電車の中で倒れるな」

「乗り過ごすなよ」

「……気を付けます。じゃ、気合を入れていつてきます」

「おう」

「気を付けて……」

歩きだしていた俺は、振り向かずに片手をあげて別れを告げた。金をやるからバスで行けといわれたが、お金を返しに来たくなるから、それだけは避けておきたかった。

でも一つだけ言葉を違えていたことに俺は気付かなかつた。

「いつてきますつてことは……また、来てくれるかな？」

「だな」

（あいつのことだ……気にせず言つた言葉なんだろうな。バカな奴）

すつと再び頬笑んだその笑みは、誰も見ることはなかつた。

（お金は余分に持つていいくつていつのを学習したな……）

早朝に出たおかげか、終電にのるしができ、家に着いたのは深夜だった。

母さんはもうすでに眠つており、玄関以外は真っ暗だった。

母の優しさだらう。

もともと休み中は自由だった。学校について、問題さえ起こさなければそんなに文句を言わない、大雑把にできた家族だからこそ成せる遠出だった。

家の匂い。

家の床。

家具の配置。

なんだか、何十年も家に帰つていなかつたかのよつな懐かしさを感じさせられる。

夏休みも、もうそろそろ終わりに近づいてきてる。

その前には杵島達と話をしたい。

ぼんやりそんなことを思いながらソファに腰を下ろした。

「ただいま……我が家」

背もたれにだらしなく頭を乗せて天井を見る。

（短い期間にいろいろあると、その期間がすごく長く感じられるんだな……）

すゞく眠くてすごく疲れた一日は、疲れすぎて、寝すぎたなにからすれば良いのかがつかない。

寝ればいいのかお風呂に入るべきか。

「風呂だな」

風呂ならば寝れるし休める。

と思い、風呂の様子を見に風呂場に行くなり……。

「……つめてえ」

風呂を追い焚きにする気もしなく、ため息を吐いて部屋に入つて布団に潜り込んだ。

約束どおり、今度は俺から杵島に連絡を取つた。

『「ひつちに帰つてきたから、約束どおりメールします』

約束というのは、向こうにいるときに来たメールの返事だつた。「心の整理をするために遠出しています。帰つたらこつちから連絡します。それまで、待つてくれると嬉しいです」という約束。

わかつてくれたのか、返事が来なかつた。

『しばらく連絡を切つてごめん。心の整理がはつきりした……つてはつきり言えるわけじゃないけど、旅先で色々あつて、色々な人に出会つて……。

杵島や相澤が力を持つたことには素直にびっくりして、別人になつたような気がしてたけど、やっぱり杵島は杵島で、相澤は相澤であることはかわりないんだよね。

実際、一人の力は怖いよ？ でも、何かを守れる力になるつてことを考えたら、いい力なのかもつて思つたら、俺にもほしくなつてきちゃつた。

あの時、一人は俺にも力があるようなことつてた気がするけど、本当に自分にはそんな力はないんだ。

でももし、俺が努力すれば手に入れられるものだつたら、俺は頑張るから……だから、まだ俺には一人と話したり遊んだりできるかな？』

すっと田舎を閉じ、そこまで打つて、送信ボタンを押すのをためらった。

本当にこんな文でおかしくはないのだろうか。

力がほしいところのは、もっぱら嘘ではない。

でも、力を手に入れるここには少しばかりためらいがある。

そんな心でこの文を送つてしまつていいのだろうか。

グチャグチャ考えているうちに、また旅に飛び出してしまいたい衝動が舞い起きる。

でも……。

(もう逃げたくない)

勇気を持つて送信ボタンを押した。

一息着くなり、服を寝巻からいつもの私服に着替えた。

夏休みもあともう少し。その間に仲直りをしておきたい。しておかなきやいけないような気がする。

携帯をベッドに放置しておきながら部屋を出ようと、ドアノブに手を掛けたとき、ベッドに放置されていた携帯がバイブ音とともに初期設定である“着信音一”が鳴り響いた。

一瞬携帯以外のすべての時間がとまったような気がした。

振り向くこともできず、ただじつと携帯に背を向けたままの自分がいた。

はつと我に返ったときは、鳴つてから数秒たつていた。

すぐに回れ右をしてベッドに振り向いたと共に駆け出し、携帯をキヤッчиしたと同時にだらしなくベッドにダイブしていた。すぐに携帯を開いて通話に出る。

「……もしもし?」

『俺だけど、泣? だよな』

「つづくん

いの声は、相澤だった。

さつきは杵島にメールをしたはずなのに、どうして相澤が電話を寄越してきた。

しかし、携帯の画面を見るかぎり、携帯は杵島の物ではあるみたいた。

『旅の感想、聞かせてくれないか?』

意外な言葉が飛んできて、素直に目を見開かせた。

「うん。でもその前にさ、今杵島もいるんだろう? 電話じゃ料金もかかるからそっち行って話さない? いや……一人に会いたいから行きたい。どこにいるか教えてくれない?」

『杵島んちきてる』

「そつか。なら、今から自転車でいく。途中でお菓子買つていくよ

『わかった。待ってる』

プチッと電話を切るなり、少しだけホッとするとともに、全財産を旅に費やしてお菓子を買つお金がないことを思い出してしまった。電車片道4・950円。往復して残るお金は、100円。もともと入っていた十円玉を足すと、120円のジュースが一本買えて、少しあつりが出る程度。

その料金から買えるお菓子を捜し出さなければいけない。

(つゝとは、お菓子一個程度か……)

少しがつかりしながらも、その価値のない財布を持って部屋を出た。

家を出たのはそれから数分後。

洗面所で、顔や歯のお手入れしたあとだつた。

結局、普段自転車で一十分のところ、三十分かけて杵島の家に向かつた。

途中、雲行きが怪しく、雨が降るんじゃないかと不安になる雲行きがつづいていた。

(やういえば、あの時も雨降つてたな)

ゆっくり指を伸ばし、呼び鈴をならそつとした瞬間、いきなり玄関の戸が開く。

驚いて田を見開いたまま田があつたのは、杵島と、その奥にいる相澤だつた。

「あつ……窓からくるの見えたから……そんなに驚かれるとは思わなかつた」

「ああそつか。杵島の部屋道路側だつけ」

「ああ。とりあえず入つて」

「うん」

(よかつた。いつもの杵島だ)

もともと落ち着いている奴だからか、あまり動転動搖する姿を見かけない。

さすがに俺が驚いたのはびっくりした様子だ。

未だ一回一回程度しか来たことがないぶん、驚いて当然だ。

「相変わらず大きい家だよなあ」

「無駄にねえ。大きくて得したものは特にないな」

「損もないだろ?」

「まあな」

ほほえんで聞いた言葉に、やさしく笑みを浮かべて返してくれる杵島。

両親が、政治家や資産家だつたり、大手企業会社の社長だつたりする特別な仕事に就いているわけでもない。仕事の要領が良いらしく、社長や課長のように上の人に認められ、給料が高いらしく、太つ腹に大きな家を建てたらしい。

外見だけではなく、内部もいい素材の物を使つていて、特別金持ちだと見つける見せないような、控えめに整わされた家具。

もともとはかなりの貧乏な家に育つたらしい両親は、それなりに節約方法を使つてゐるらしい。

見栄を張らないのが、憎いや羨ましいという感情を出させない。いや、羨ましいには羨ましいが、皮肉さを持たせないというのか。階段を上り、杵島の部屋に入る。

三人くらい入つても、狭いとは思わせなかつた。

「あつそだ。これ、買つてきたお菓子……つていつても旅で使い果たしたお金でかつたから、いいもんじゃないけど」

ガサガサッとビニール袋をならしながらも、杵島達にさしだした。

「あまりにも良いものだつたらもつたいなくて食べられないよ」

なんてクスリと杵島が微笑んだ。

新しく持つてきつたコップに、杵島や相澤と同じ飲み物を相澤が注いでくれて、はいと手渡される。

にっこり頬笑んで、受け取つた。

相澤は何度か来ているのか、何だかこの家になれているような様子だつた。

「旅の話をしてくれないか?」

さつそくと、相澤が口を再び開いた。

「そうだね」

突発的に家を飛び出したこと。

電車に長い間揺られたこと。

計画性を持たなかつた所為で、歩いて、何キロもある海に向かつたこと。

ぶつ倒れたことに、その時出会つたキヨウダイの事。

能力のことを抜き、あつたことを事細かに説明した。

「途中で、すゞく一人に会いたくなつた。ホームシックつて言うのかな? 自分の居場所はここなんだなつて、しみじみ思わされた。

でも、それもまた嬉しかつた。

メールが来たとき、まだ一人の傍にいても、許されるのかな? つておもつて……だから帰つてきた。きっと、メールがこなかつた

ら、「一人のもとに帰つてくるのも、もう少し遅かつたと思うんだ。
すじく、嬉しかつた……。俺、まだ一人の傍にいても、許される
のかな？」

すべて話し終えると、相澤達は、少しだけ嬉しそうな。それでも、
少しだけ驚いたような瞳を見せていた。

すつと頬笑み、二人はそつと近づいてきた。そして、挟むように
俺を間にしギュッと抱き締めてきた。

『当たり前だろ』

「もう、沚と連絡とれなくなるんじゃねえかつて不安だつたんだぜ
？」

「メールか返つてくるまで、何だか生きた心地がしなかつた。メー
ルが返つてきて、本当に安心したんだから」

「生きた心地つて……大げさな」

「大げさなんかじゃねえよ。俺たちはおまえが大事なんだつてまぢ
で」

相澤は、照れる様子も、格好つける様子もなしに言つてくる。
それは力に関係するのだろう。もしかしたら、一人が守りたいも
のも、俺たち三人が関わつてきているのかもしれない。

「二人はどうして力を手に入れたの？ なにが目的なのか……聞い
てもいいか？」

『この関係を守るため』

「それ以外に理由なんて、あとからついてくると思つ」

『沚は、この関係、いやか？』

相澤は、そう不安そうな顔になる。

「いやなんかじゃねえよ。俺だつて、ずっとこのまいまいきたい」

でも、いやな胸騒ぎばかりが騒めいて、落ち着きをなくしてしま
いそうだ。

あの時夢に見た、平原に並ぶオレら。

その中に、杵島はいても、関係を保ちたいと主張する相澤が、存
在していなかつた。

もしその場に麻紀がいなくとも、相澤はやっぱりいなにような気がする。

麻紀たちが言った言葉が本当ならば、その証というものが麻紀にいることにはかわりはないし、それがいるかぎり、その力を持った他の者は食われてしまう。否応なしに、相澤が麻紀にあつた時点で、相澤は……。

それが怖くてこの一人のことを、あのキョウウダイに伝えることはできなかつた。それとともに、この一人に、キョウウダイのことを伝えることはできなかつた。

「沚。おまえは今、なにを恐れているんだ？」

ボーッと手前のテーブルの足一点だけを見つめていた俺に、杵島がやさしく聞いてくる。

「この一人だつて、何も恐れていらないわけがない。

「証……」

「え？」

「二人には、『証』って言葉だけで、なにが思いつく？」

それを聞いて、一番に反応したのは杵島だつた。

ピクシと眉を一瞬ばかり揺らし、じつと見つめてくる。

「……沚。おまえは、旅をしてきて何を得たんだ？」

「先に質問したのは俺だよ？」

息をつく余裕も作らせない早さで、俺はきちんとと言い直した。もし杵島なら、話をナチュラルにすらそうとするだらうという予感はしていた。

でも、自分から話を振つておいて、この話をしてしまうと、自分に何かを確信してしまうようで不安になる。

じつと見つめあう状況で、最初に音を立てたのは杵島の喉だつた。唾を飲み込む音。

何か覚悟を決めたんだろう。

「力の話をしても？」

「かまわない」

「証と言つのかどうかもわからないし、実際相澤にはいないらしいから違うとは思うんだが、俺たちの力には象徴があるんだと思うんだ。それがいつてる証のことかはわからない。実際関係ないかもしれないけど、その象徴は道しるべもある。

自分が、今何を聞きたいのか。今、何を知ろうと必死なのかを、聞かずともわかつてくれて、自然と答えを出して、自分で開こうと手招きしてくれる奴が俺にはいる。

それが何の証なのかはわからないけど、排除しなければいけないものではないと言つのは確かだと思うんだ」

そこまで言つと、まだ言いたげなんだけれども、悩んでいてはつきり言えないものがあるかのように、杵島の表情には迷いがあつた。あまりそういうのを顔に出すタイプではないのに、こんなにもはつきり悩んで、迷つてゐる杵島は新鮮だつた。

とまつた口は、たまに開いたり閉じたりが繰り返され、言葉は出でこない。少しだけ、テーブルに軽く乗せていたては、急かされていふように、絡ませ無闇に遊ばされている。

いきなりその手が離れると、杵島は自分の頭を抱え込んだ。

「わかんないんだ。どうして相澤にいないものが、俺には存在しているのかが」

そのことは、相澤も知つていたのか、特別驚いた様子はなく、ただじつと、俺でも杵島でもないどこか低めの一点を見つめていた。杵島はきっと、はつきりとした何かがわかつていらないだけであつて、なにとなくと言う想像はついている。断言できるわけではないが、ついていないようすではない。しかし、それをまだ、相澤に相談するしないかを迷いつつも、いまに至つてしまつたかのようだ。

相談すべきではない。

直感的にそう思つただけだが。

「杵島は、その存在するそれを恐れたり、敵視したりしてゐるか？」

「あ？ いや。それはないな。怖くもないし、敵つていうのだつて……まあ、最初はさすがに……なあ？」

誰に聞くわけでもないその問い合わせに、戸惑う人はいない。

「でも、会った瞬間から、“怖い”っていう分類がある事すら吹き飛んでたな。怖いかつて、今言われて思い出したような感じだからな」

きっと、俺が見た怪しい人と、杵島の言つているその人とは、違う人だというのはいわれなくともなんとなくわかった。

でも、きっと種類は同じだろう。

いつものこの三人が、一人一人違うけれど、“人”と言う分類では同じ事だ。それと同じで、きっと杵島には証がついている。それを本人は、“怖い”ということを忘れて、いられるくらいに楽にしていられている。

そりや迷つたり悩んだりしたかもしねないが、きちんとそれに向き合つて生活しているように見える。なのに俺はどうだ。

恐がつていなかのよう見せておいて、内心ではかなりビクビクして、落ち着きというものを忘れかけてしまいそうになる。

受け入れることをせず、必死になつてそれから解放されようとしている。自分の都合のいいように、事を進めていこうとする。でもそんなことはそう簡単にはできっこない。

何一つ受け入れることをせず、逃げてばかりで手に入るものなんて何一つない。あつて良いものではない。それはわかっているのだけれど、この三人の関係に、何かの邪魔が入つてきているような胸騒ぎがつづいている。

はつきりしたものではないから余計に怖いものだ。

恐れと恐怖が交ざりこみ、一気に何もかもを胸のどこかに入り込んでいたような感覚が、ずっとしているのだ。

さつきの杵島の言葉に、嘘はまったくないだらう。

「あいつを“怖い”って言っちゃうと、自分のこの力まで“怖い”つてことになるんじゃねえかな？」

「……杵島の言つてることはわかるよ。わかりすぎて怖い。……、相澤は、相澤はオレらと二人で居たっておもう？」

杵島と肩をぶつけるように座つて、俺とは向かい合つている状態で、いきなり話を振られて、少しばかりキョトンとしていた。でもそんな間抜けな顔はすぐに戻り、にやりと口元をあげて話に入る。

「俺が思わないでも思つか？」

「この先どんな障害があつたとしても？」

「障害なら乗り越えるなり耐えるなりできるだろ？」

「どれだけよじ登つたって、乗り越えられない壁なら？！」

色々と出てくる想像と妄想で、相澤を攻めていく。

相澤に麻紀を会わせなればいい。ただそれだけ。“それだけ”が“こんなに”に。“ただ”が消え語尾の“も”になつたとしても、どうにか耐え、どうにかして生きていこうとするそれがないかぎり、一緒に居ては危ないから。

今はまだ、“ただそれだけ”で済む話。でも、相澤のことも杵島のことも話していないからこそ、色々事情があつてこっちにあの一人が会いに来てくれたら？ “こんなにも”大変なことはないと思つてしまふかもしれない。

（こんなことになるなら、話しておくんだったろうか……でも）

でも、キヨウダイと二人が会うということは、もちろんその場に俺がいるかもしれない。

ということは、互いが互いに危ない状況に追い込まれる。はつきりはまだしていないが、炎だらう俺の力と、キヨウダイの兄の炎はきっと同じだ。

もし、会うときに俺が力を手に入れていたら？
相澤を失い兄を失う。

麻紀は、大事な人を失うのを体験してしまい、同時に違う近くの人も失う。同じく、俺は一気に大事な人を一人失うことになる。そうなると決まったことではないだろうが、いつかはなつてしまふというのが怖かった。

もしそうなつたとすれば、麻紀は大事な人を失い、一人にさせてしまふ。

そうなつた場合、麻紀はどうなるのだろう。

（でも、まだ俺が炎だと。証を持つているとははつきり言えないよね？）

あれからあの人があの夢に出てこない。

というか、夢 자체を見なくなつていた。

「んーまあ、そん時はそん時考えるしかないんだろうけど、良い方向にもつてくよう努力でもチャレンジだつて、なんだつて命かけて頑張つて乗り越えてみせるさ」

につこり笑つて、優しく。でも、どこかに力を入れて語つていた。強い。

（やつぱ二人にはかなわないなあ）

つられたかのように、俺もにつこり笑つて言つ。

「うん。一人はやっぱり強いなあ。俺も置いてかれたくない。俺だって、一人みたいな力ないかもしないけど、ないなりに頑張れることは人一倍頑張るよ」

まだ俺に力があるなんて決まったわけじゃない。
と言い張りたいのだが、いつだかに見た夢で俺は力が本当にある
んだろうという確信を持たされる夢をみていた。

俺じやない“泣”が、必死に力ほしさにしがみついていた。
でもあれも、きっと俺のどこかの心なんだろう。

『うん』

杵島も相澤も、にっこりと笑って頷いた。

「……って何でこいつと息ぴったりに一つ返事してんだろう俺……」「つたく。この空氣でそれを言つ까？ 少しは場の空氣を読んで、グッと我慢しろ。俺だっておまえと息が合うなんて最悪な気分なんだよ」

ケツと文句を遠慮なしに言つ相澤と、冷静にそれを同意しながらも、いやそうな口を叩く杵島。
相変わらず少しホツとした。

（そつか……。俺ももう覚悟を決めなきやなんだな）

心のどこかで何度も思つていたことも、もう最後になつてしまつ。
家に着いた俺は、暗くなつていた部屋に電気を着けて、上着を脱いでベッドにダイブした。

仰向けになつて左手を見る。

熱くなることが、たまにある。ということから、しおりちゅうあ

るようになり、こまに至つては熱くないときの体温を感じるくらいだ。

だからこそ余計に、異変といつものを感じてこなくなっていた。でもわかる。

頬に手を乗せると、左手だけが異様に熱い。手の中で発火しているかのように、あたたかいのだ。

「手の中で……」

ソッと離して両手を見つめる。

外側は、誰と大きな違いもない、細胞と筋肉、骨と皮でできた、やわらかいとも言い難い男の手。

「うん……わかった。今の俺には何もできない。自分を知ることからがスタート地点だつたんだ」

きつとそれを知るために、キャンプに行き、突発的に旅に出た。この変哲もない“泣”という皮を羽織つた自分を、より良く知るために。

でも俺はその機会を見失っていた。すぐそこにある答えすら、見つけだせないほど、視界を自分で縮めていたんだ。

そしてきつと最後の猶予を、神だか仏さんだかが与えてくれて、漸く見つけることが出来た。

杵島や相澤によつて出来た、俺のスタート地点。

「おはよー」

「おう」

「あれ？ 杣島は？ 寝坊かな……」

珍しく杣島が朝の待ち合わせ場所にいない。今日から学校があるというのに、初日から寝坊もしくは遅刻だろうか。

寝坊や遅れ自体杣島にはめずらしかった。いつもそれらをやるのは俺か相澤くらいだつた。

「なんか不吉な予感が……」

そうゲッソリした顔で言つと、相澤もそれに倣うかのよつて、俺もと同意してきた。

「なんか雨降りそうだな」

今は晴天夏日和。こんな口に言つてしまつのは、杣島が休んだせい。

『日頃のバカがいきなり天才になつたときは雨が降る』きっとその真逆だってありえる事だろう。

日頃の天才が、いきなりバカになる。それとイコールで繋がつてしまふのではと。

「何不吉そうな顔してんだバカもん」

「そうじやなくて、してるんだよつて……」

「杣島！」

「よう！ 遅れてわりいな」

なんて、なんでもなかつたかのような顔をしているが、俺にはわかつた。

遅れてきたのは、寝坊なんかじゃない。違うなにかがあつたんだと。

「まあ、間に合わないわけじゃねえし大丈夫だよ。早くいこー」

「ああ」

歩きだすと、ちらりと杵島を見た。

先頭切って歩いている相澤の後ろ姿を、じつと淋しそうな顔で見つめている。

この顔を知っている。

この顔は、俺が旅先で出会った麻紀に、"証"の話を聞いたとき、海に反射して見えた自分の顔だ。

「杵島。今日の夜電話していいか?」

相澤に聞こえないように、ボソボソッと杵島の耳元でさりげなく。

少し驚いた様子で振り返った顔は、助けがあつたかのよう、半分安心したかのようないまいな表情だった。

放課後。

言つたとおり本当に雨が降ってきた。

これはただの偶然か。もしくは、本当に不吉な予感があつたのか。

「なんか前にもこんなことあつたよな

「あつ? ああ」

窓を開け、外をじつと眺めていた相澤に、動搖した声で答える

杵島。

風もなく、まっすぐに力強く地面を叩きつける雨は、一人の声を俺の耳から遠ざけた。なんだか、テレビドラマのつぶやき、囲われた声を聞いてるみたいだった。

これも何も考え方のせいだ。

「相澤今日は傘持つてきてないのか?」

「んなもんもつてこねえよ。降るつて知らないかぎり」

「じうじう話良いかどうかわかんないけど、相澤の力で全部送り返

せないかな？ 空に』

不意にそんな提案を出してみるが、他の人から言わせてみれば、

ただの怪奇現象だ。

「あつ。なら、オレらの周りにだけ水の膜張るうか？ 地面から「ばあか。変に目立つぞ」

『杵島可愛げねえ！』

「んなもんいらねえっつかなんでだよ…」

相澤と息を合わして言うなり、呆れたように杵島がそれに答える。確かに傘もささずに濡れないのは、ただの悪目立ちかもしれない。『なら、三人で相合傘する？』

『きつつう』

俺の提案に一人して却下を出す。

（速答つて……）

「んじや買いに行くかな」

よつこらせとオジサン臭く立ち上がる杵島に、相澤とともに立ち上がる。

「こういう時つて、売店儲かるよな

「確かに……」

結局別れるところまで来たら雨は止んだ。

水溜まりを避けながら家に着き、夕飯を待つた。

電話をするのは、夕飯がおわつたらと、一応迷惑にならない時間を目指すのがいつもの約束だった。なのにいま、いきなり電話が鳴つた。

『はい？』

『ごめん。こんな時間に。今平氣か？』

相手は杵島だ。

電話をするといったのは俺の方なのに、向こうから電話がくるのは、予想外だつた。

「うん大丈夫だけど、どうかしたのか？」

『どうしたつていうか、電話するつて沚がいつてたから、気になるつて待てなかつたから。今話せれるなら、気になるしダメかな?』

「うん。そつちが良い言つなら。うんとさ。あの時、相澤をじつと見つめてたから。至極淋しそうだつたから、何か知つたのかな?つて」

実際夕飯までに、その聞く質問の仕方をじっくり考えようと想つていたから、聞きたいことを聞かずに過ぐしてしまつそうだ。

『あつたのかじやなくて、知つたのか……か。つてことは、もしかしてオレらよりも沚のほづが色々知つてたりして』

「あつ……えつと……。一人がどんなことまで知つてるのかわからなくつて」

ベッドにきちんと座りなおし、少しだけ前かがみになり、膝に肘を乗せ、話に集中する。

『沚はどこまで知つてるの?』

「……杵島らしくないね。最初に質問したのは俺だ」

クスッと軽く聞こえるように微笑み、自分を主張する。

『そう、だつたね。昨日の夢でね、カリフォンスつて言つやつに会つたんだ。そいつは、“俺”的証なんだけど、そいつが言つたんだ。相澤は、偽の選ばれし者だ』つて』

(偽の……選択者?)

麻紀と話していても、そんな単語は聞き覚えがなかつた。

『もともと、沚のことは教えてくれたとしても、相澤のことは頑固に口を開かなかつたんだ』

そこで杵島の言葉は途切れた。これは口を開いても良いぞ、といふ証拠なのだろうか。

今の杵島は少しだけ動搖し、微かに落ち着きがないだろう。すぐ“偽の選択者”ということばがきになるが、今直球で聞くのは避け

けたほうが良さそうだ。

「で、淋しそうな顔は、どうしてだつたの？」

『……偽の選択者は、落とされるんだ。そうカリフォンスは言ったんだ』

「落とされる？」

『ああ。願つてもいられない世界に、落とされ苦しみながら永遠なる命と戦うんだって』

（永遠なる命……戦う？）

もしかしたら、それは証を持たなかつた者が行く末のことを言つてゐるのだろうか。

麻紀の話にあつた、優貴の話。

（世界へ行くつて……“食われた”後の世界……！ じゃあ、偽の選択者つて言つのは、証の現われなかつたもののことか）

「んな話……聞いてないぞ」

電話中だというのも忘れて、ついついそう呟いてしまつた。

『なに？』

「あついや……」

『質問していいよな？ 沢の知つてる話を聞きたい』

「うん。えつと……その、杵島達の力はダブつてゐることがある。でも、その力同士集まつてはいけない。ヒトは権力を争いはじめてしまうから。自分のほうが強いと……それと同じで、能力同士が強さを求めて合つてしまつ。それで中にはリーダーがいる。そのリーダーには、特別な“証”が手に入る。その証が現われるのは、力が手に入る前らしい。つてところかな？ でも一部はあいまいで本当のところはわからない。でも、一部は本当のことらしい」

麻紀から聞いた言葉を、少しばかり言い換えた形で説明した。少しばかりの無言がつづく。

『沢には現われたのか？』

「……実際わからない。そのことを言つてゐるのか、ただの一般人なのか。杵島が言つてたカリフォンスっていうのはだれ？」

『力の源。そいつ……カリフォンスの力が俺の力とイコールで繋ぐことができる存在。うるさいやつだけね』

うれしそうな声。

力が手に入ったことについての喜びではなく、カリフォンスに執着していく、そのことについて喜びを覚えているみたいだ。

『だいたい俺の情報は、そいつ……カリフォンスから聞いた情報だ。沚が言う証つてのは、たぶんカリフォンスのことだと思う。で、その証（だらう人）とその媒体……つまり、俺みたいに使う側は、力を使うとき、一心同体に近くなる。意思や意気が合わないかぎり、『力』をうまく発揮・コントロールすることは難しい』

一心同体。意思・意気。

その言葉が思考を回した。

一番に今までのことを思い出したのは、俺が俺じゃないけれど、あれは俺である姿を見た夢。あの時の俺を、強いと思つた。弱い自分なんて蚊帳の外に放り投げた。

だんだん思い出してきた。

あいつ……あの人は、話したいときにはあらわれてくる、幻想・幻覚みたいな雰囲気を醸し出している人。いや、声をしていた。

自分の都合よくしゃべってくれるんじゃないかと、解釈してしまいそうになる。

名前だつて、山田太郎や、田中勇作などではなく、俺が名付けるといった。力を獲るにも名前が必要だといった。

「じゃあ、そのカリフォンスっていうのは、どうやって名を付けた？」

そう聞くと、耳元……電話の向こうで何かを置く音がした。そのあと、ズズズズと飲み物を啜る音が聞こえてきた。

何か飲み物を飲んでいるのだろう。

一呼吸おいてから、返事が来た。

『覚えてない。でも、教えてもらつたわけでも、俺のセンスでもない。そうだなあ……いうなら、不意に脳裏を走つたって感じかな』

？』

「脳裏を？ ならそれを待つしかないのか……」

時間が掛かるかはわからない。

どれくらいの状態でそれがおきて、不意に聞き漏らしているかもしれない。でも、脳裏を走るものとこのもの、今は思い出せない。『急ごうとしないで、辻。辻の言つ。『証』つてもつと、仲良くやつていけばいい。問題は、どちらが早く打ち解けるかだ。あとは、辻が打ち解ければいいのか、向こうが打ち解けるだけなのかだ。お互にお互に知り合うのがいいと思つ』

「俺とあいつが……？ そつか。頑張つてみる。いや、心得ておくよ

『うん。知りたいことや、わからんないところがあつたら、できるだけ教えたいたとは思つてるからセ』

「ありがと」

『ああ。じゃあまた明日な』

そういうて電話は切れた。

この会話を聞かれているとも知らず』。

何もかも変わってしまったのは、夏休み前の、ある雨の日。

不意に降ってきた雨に、杵島と相合傘をした辻。相澤は予備の傘を持ってきていて、折畳み傘を女々ちゃんと名付けた。

（そういうえば、相澤はあの時持つっていた傘……）

いつたいどうしたのだろう。

今日は持つてこなかつたし、今日だけあの日だけ、雨が降る予兆はなかつた。なのに、降るつてわかつていいのにと相澤は言った。

なら、あの時はわかつていたのだろうか。降るところを。それともただの偶然か。

「偶然……だよな」

そう思い込み、すっかり忘れかけてしまった。

『報告します。あいつには、まだ力は宿っていない。むしろ、名前すらわかつていよいよあります』

『そうか』

籠もつた声の主が、薄暗く、必要ある場所だけ、黄色に近い光で照らされながら答えた。

置かれている家具類は、ふるく、よく音を響かせる鉄のような素材でできていて、あまり目立たせないようになつていて。

この場に人がいるのは、籠もつた声の主と、その主を守るもの数人のみ。

籠もつた声の主のすぐ手前には、数量の水が入った入れ物。声はそこから報告をしていた。

『何か特別なことを?』

『いや……様子を見たいところだが、そうだな。おまえの意見を聴かせてくれないか?』

『私の……ですか? そうですね。私の命もそう長くはつきません。なので、今、少しでも自分達が危険な状況にあるということを示してみては? まだあいつは力を得てはいない。しかし、力の使い道や、その力そのもののお手本を見ています。もしかしたら、状況を把握したとき、何かおもしろいことが起きるかもしれないと思うのですが』

『おもしろいことか……おまえは、あいつが覚醒したら、強いと思うか?』

『弱いと思います。もしくは、見かけ倒し……というんでしようかね? バカでかい能力があつても、それ相応の威力はないでしょ。あいつは、人を傷つけることなんかできない』

『そうか。あとはおまえに任せた。何かあつたらまたこちらから連絡を入れる』

『御意』

ふつんと連絡は切れた。

その場には、籠もつた声のみが響く。

『あいつには“証”をあつめることはできない……絶対に』

世界はだんだんと変わっていく。

どちらが間違いか、どちらが祝福できるか。

そんなこともまともに判断することが困難になるくらいに、団体と団体が別々の……対立する……曲がりくねった人間関係になりつあつた。

なにを滅ぼすためか。

なにを正当化するためか。

なにを覆すためか。

いつたい誰がリーダーとなるべきなのか。

人と人が裏切り合い、人と人が信頼し合う。しかし、信頼して味方と思つてしまつても、片方は敵に繋がつてゐるかもしれない。そこには信頼関係があり、裏切りを知らないかもしれない。しかし違うところに繋がつた裏切りもあるかもしだれない。

どこでどう繋がつていくのかがわからないから世界は繋がり、離れていつてゐる。

それから日立ちま、一日一日が過ぎたある日、ようやく覚悟とうものがついたような気がした。

特に変わった何かがあつたわけではないが、じつと考えた末の覚悟だった。

相談できる相手には相談したし、あとは自分の勇気と自信したい。こんなに悩んだというのに、能力が備わっていなかつたらと思うと、今までの自分に自信が無くなつてくれる。

「一つ問題が、名前なんだよなあ」

そのことを考えるたびに、冷たく重いため息が、口から出される。まったく良いものが出てこないし、杵島がい「は、名前は付けるものではないらしい。しかしあいつは教えてはくれないし、思いつきも閃きもしない。

ということは、ことなどうでもいいから質問攻めし、ほんの少しでもあの男のことを知る必要がある。知つておいて損することはないだらうし、暇つぶしにもなる。

「じゃあさつさと寝よ……」

パソコンと布団のなかに潜り込み、枕元のリモコンで電気を消した。

余韻として残つてゐる電気の光が目に残る。

こや寝ようとするときに限つて、睡魔はまったく現れやしない。

「口口口」と、あつちをむいたりこつちをむいたり、質問事項を色々整理しながら、目を瞑つた。

『呼び出しおきながらにを考えている』

「えつ……ああ。あんたに恋人いるのかなあつて、当初の質問から脱線してた」

なんだか、どうでも良いことも質問しようこう考へがでてきては、色々考へた末、恋人まで脱線していった。

「で？ 恋人いるの？」

『いいから呼び出した理由は？』

「なんだよ。怒らなくつたつて……。じゃあ聞くけど、あなた、男だよね？ つていうか、名前を知るまであんたで通すの面倒だからさ、仮名として、山田くんって言わせてもらつよ？」

偽名でも仮名でも、何か呼び方がないと、呼ぶのに苦労する。たぶん一応年上だらうじ。

「山田くんぞ、性別は男であつてるの？」

床という床はないが、今立つてているのだらう態勢から、ゆつくりと座り込んだ。

『ああ』

『……』

『……？』

「えつそれだけ？」

『なにがだ？』

「なんかもつと付け足してくれるとかいう親切心はないわけ？」聞

き返すとかさ

『沚。性別は男。趣味は寝ること。特技は人を振り回すこと。好きなものは、とりあえず不思議なもの。嫌いなものは、不思議なものに関われないこと。大体こういつことは知つてているんだ。なにを聞き返せとこうんだ？』

すらすらと何も関心がないような口調で言つ。もともと干涉するタイプではないのだらうか。

「何でそこまで知つてるんだよ

『いつも俺はおまえを見ている』

『ストーカー？』

『……』

ため息混じりの無言。

呆れていることなんて、改めて聞かなくつたってわかったものだ。

「いつたい山田くんは、何者なの？俺の何？」

『俺はおまえの証』

“証”。麻紀や、お兄ちゃんが言っていた証。でも、その証の意味が、今まで考えていたような意味とは異なつているような気がする。

能力の“証”と俺の“証”。

「俺の……？」

『他に聞きたいことはは…』

意味を答えないかのように、次へと話を変えようとする。これは、きっと泣である俺が、知つていかないといけないものなのだろう。

「あの雨の日、家の前に現れたのは、お前？」

『ああ』

「どうしてあんなとこにいた？　どうして……雨が降った？」不思議すぎた。

テレビでは、快晴。雨が降るような様子はないと、笑顔で言つていた。それと、あんなことを言つた相澤が傘を持っていた。

『あそこには、今おまえが危険な状態にいるのを気付かせるためだつた。しかし、あの雨は誤算だつた。きっと何者かが邪魔をした』

「何者か……？」

『そこまで突き止めることはできなかつたが』

鈍く重い声質。この声でわかる。

今この人は、すごく悔しいんだ。

「どうして？」

『……炎は何に弱いかわかるか？』

「……水……雨か！」

『……力が足りなすぎた』

悔しいのは、自分の無力さ。

あつと誰のせいにあるかも、できない、しない生き方をしていたのだから。

誰のせいにもできないことが多くある。明らかに自分のせいだつたり、そうなる運命だとつことわかつてたりする」と。自分でなぜひつよつむやきなに苦しみでいるのだろうか。

「だったら、いつやつて夢のなかに現れればよかつた」

『夢を見ていると、おまえが落ち着いているときが、一度でもあつたか?』

「……」

『直接会つて、おまえは俺のことを気にするようになる。違うか?』

「うん。あつと、夢だったら、所詮夢だつて流していたかも。もしかして、俺が倒れたのも……あなたのせいじゃなくて、雨……」

『そうだ』

別にこの人のせいにすべてしていたわけではないが、関係しているのではないかとは思つていた。しかしそれは、直接的に俺に関わつていた。

しかし誤算といった。あの時、いきなり雨が降つた。なのに、相澤は傘を持ってきていた。降ることを知つていたかのようだ。雨を降らせるという自然現象に関係するようなことまでもやつてしまえられるのだろうか。

「あなたと俺は、同体?」

『ああ』

「俺が怪我をしたとき、おまえも同じような傷がある?」

『ああ』

「じゃあどうして姿は違う? どうして姿を現さない?」

『おまえは俺の姿を見ようとせしていない』

「……」

別に見えないならそれで良こと、諦めることをするまえに、願う

』とすらしなかつた。

姿を見せてはくれないものだとおもっていたから。

「うん。 そうだね。 今は俺、 まだ顔をあわせたくないのかもしれない

い

『 知つてる』

「 山田くん、 本当に何でも知つてるんだね? 」

『 同体だからな』

「 知つてる? 感情までわかつちゃえるのは、 一心同体つていうんだよ? 」

『 ……知つてる』

田を覚ましたときは、 田覚ましがなる前だった。

まだ寝ていいたいという余韻は残つてはいない。 田覚めは、 まあまあいい気分だ。

名前を知つたわけではない。 ただ、 最初にしては順調に話が進んだ気がする。

一心同体。

今考えていることも、 何もかも気付かれていたなら話は早い。 いつかは、 何かをわかりあえるかもしれない。

(でも一心同体つて、 意見の相違はないのかな?)

一心同体といったつて、 相違があつては一心同体とはいわないのではないのだろうか。

今はまだ相違はないかもしれないが、 これからあるかもしれない。 でも、 向こうは俺のことをわかつていても、 こっちは向こうのことを何一つわかつていないと見えるようなものだし、 考えてこむこ

となじまつたくだ。

一心同体といつよりは、向こうが俺のことを一方的に感じ取れるだけなのではないのだろうか。

一心同体といつたのは俺だ。でも、違うのかもしれないと思付いてしまつた。

きつと俺があの人、山田くんを見よつとしないのと同じように、山田くんの心までを見よつとはしていないのだろう。きつと知りうとすれば、知ることがができるのかもしれない。

考え込んでくるとき、さきなり携帯から音楽が流れた。

田覚ました。

鳴る前に起きてしまつたのだから、鳴つて当たり前だといふの、肩がびくつとびくついた。

携帯に手を伸ばし、恐る恐る田覚ましを止めた。

(準備するか)

着替えようと、まずははじめにカーテンをあけた。しかし、次に進むことなく、俺はその状態で固まつた。

「……雨？」

『……炎は何に弱いかわかるか？』

そう聞かれたとき、俺は、水・雨と答えた。

(雨の中のは極力避けたほうが良いな……)

この前みたいに倒れるとは考えにくいや、あとでの山田くんに何かを言われるのもいやだ。

でも、雨なんかに負けていたら、今までの風呂はどうだったのだろうか。

(故意的な雨しか効かないとかだつたら良いの)

傘さえあれば、雨はたいてい防ぐことはできる。

もし、乱闘することになつたら、俺は反射的に傘を選ぶだろうか。
(存在を忘れてるだろうな)

雨が降れば、一面は傘でうめられるか、水溜まり、もしくはまつたく人気がなくなってしまう。

人が多ければ、傘が重なり合い、すゞく歩きにくいう状態になり、人ととの間があく。進むスピードも遅くなり、いろいろしてくる。

そして足取りが少なくなるのを待つかのように、雨宿りを口実にカフェや喫茶店に入る。

もしかしたら、そこで何かの出会いが起きるかもしね。もしかしたら、自分と同じように立ち寄った人に出会えるかもしれないと感じた放課後だった。

一人で放課後フラフラ歩くのは慣れない。

なんだか、杵島と相澤は、一人で話したいことがあるらしく、先に帰ってくれといわれてしまった。

どちらかといえば、杵島から誘つたような様子が見当たれた。

(仲間外れかあ)

こんなことは今までなかつた。

一人で話していたり会つてしたりすることはあっても、放課後まで一人にさせられるのは初めてだ。

「暇くさいなあ」

暇覚悟で喫茶店に入つたけれど、まさかこんなにもはつきり暇になるのは淋しい。

頼んで出されたオレンジジュースにストローを刺す。

“刺した”というような手応えが感じられないのも無理はない。刺したまま回してみても、カラカラと氷が重なり、ガラスのコップと擦れ合う音が響く。

それだけだ。

ストローをくわえてなかのものを吸い上げる。甘酸っぱい味が口のなかに広がっていく。

それもすべて当たり前なこと。

当たり前なことが当たり前に過ぎていい。だからこそ当たり前なのだ。

なのに俺の中には、『俺の中に』いて当たり前なものがいる。その“当たり前”は、誰が言ったのだろうか。

そつと皿蓋をあらす。

このまま眠つてしまえば、その“当たり前”的存在に出来ることができる。

すぐそこにある窓の向こうには、大粒の雨がコンクリートにむかって叩くように降っている。音も聞こえる。

止む様子はまだ見当たらない。むしろ、余計に強くなってきていくような気がする。その反面、人の混み具合は、それなり減つてしまはいた。

この喫茶店に向かい合つかのように、国道を挟んである眼鏡屋。よくCMで見かける有名な眼鏡店だ。

眼鏡の女王。

フレームの柄的にも、女性が多く利用し、好評である。

海外のほうにも出店しているという噂が流れているが、本来のところはわからない。

わからうとしない。

窓とは逆の腕の肘を乗せ、立たせてはその手のひらに頬を乗せ、窓の外を眺めるふりをする。

そのまま、ゆつぐりと皿蓋をあらす。

(山田くん……)

眠つていなげ、現われてくれるだらうか。願いながら暗やみを探した。

知りたいけどわからうとしない。聞こうとしない。

知つて損をするのを恐れている。その反面、好奇心は遠慮せずに

あらわれる。

知らないで損をするのを恐れて、知つて損をするのを恐れている。

矛盾。

山田くんのことを知らない。知つて、何かを抱えてしまつたり、崩れてしまふのを恐れている。

『知りたいなら聞けばいい。知つて後悔するなら、知らないふりをすればいい』

「あつ山田くん……山田くんは卑怯だ」

『は?』

「聞かなくとも答えをくれる」

『今のが答えか?』

いつもどおりの暗やみ。

(だんだんここが安心するような場所となつていく
「変なの」

『いいことじやないのか?』

くすっと微笑んで言ったその言葉にそう答える。

「口に出してないことに答えないで貰いたいなー」

『それはすまない』

心がわかるというのも、いいものなのか悪いものなのか。

「もつと謝れよー」

『なにを考えているのかはわかるんだ。一人で悩んでないで、俺にでも言えばいい。だから呼んだんだろ?』

「うん。一人じや淋しいや」

相澤や杵島においてかれるのは慣れない。

『それだけか?』

『だめ? でも変だよねえ。前に一人で旅に出たつていうのに、いまさら一人が淋しいんだよ? バカみたい』

『寂しがつてなにが悪い? 人は淋しがる動物だらう?』

「淋しがる動物は兎だよウーサーギー！」

『人が淋しがるのはいけないことか？』

「いつ……いけなくはないけどさー」

何だかテンポが狂う。

人間だろうに、スイッチがONになりたてのロボットのような……いや、生まれた赤ちゃんが、いきなり大人になってしまって、基本的なことを知らない人みたいだ。

「調子狂う」

調子が狂う？

いや、違う。

（頭痛がする）

だ。

『俺は何ともないが？』

「あーもー無意味に心を読むな！」

不安だ。すぐく。

一心同体だとかぬかしたが、まったくの別人にしか感じられなくなってきた。

ゆつくりと目蓋を瞑る。

目蓋を開いても真っ暗に近いが、その暗さを余計に暗くし、自分の世界に入るようになってしまった。

感じ取る。

目には見えていないものを、目で見ようだなんて思う人は少ないし、目には見えていないものを信じる人は少ない。それに、その存在を知らないものもいる。でも、今の俺には感じ取り、知らなければならないものがある。

大きい大事なものから逃げるには、何か計画を立てなければいけない。

大事なものは、警察だつて人生だつてなんだつていい。逃げ切らなければならぬものは、その逃げ切る方法を考えなければならぬい。

そしてその方法や計画の一つの項目には、逃げ切る期間も必要とすれば尚善いだろう。

だから今の俺にも期間を作らなければいけない。

自分の気持ちから逃げ続ける期間を。

逃げ切つてはいけない。逃げ隠れしてはいけない。

逃げ続けなければいけなかつた。

でも、いつかは自分の気持ちと向かい合わなければいけない。

『なにを考えている?』

不意に黙つていた山田くんが口を開いた。いや、閉じていたのもわからぬが。

「山田くんにはわからない」と

聞いてくるということはわからないのだろう。

今の気持ちは、自分にしかわからないことだから。

覚悟と勇気と自信。

思ひ描く。自分の目の前に人があらわれるシルエットを。

今はまだ、山田くんの姿がわからない。名前も、まったくわからぬ。

だから、わからないといけない。知らないといけない。いや、知らなければならぬ。

「山田くんはや」

『なんだ?』

「俺が呼んでないときはなにをしてるの? 暫じゃ、ないの?」

『なに……つて』

不意に聞かれた質問を答えるかのように、ぴたりと言葉が消えた。何か聞いてはいけないことを聞いてしまつたのかと不安になる、長い沈黙が流れしていく。

「もしかして、何もしなさすぎて、答えられなかつたりして」

冗談混じりに、笑いながらそつそつとやると、しみじみとした返

事が帰つてくる。

『ああそつなのかもしれない。よく、覚えていない』

「え……」

『おまえがなにをしたのかは覚えてはいるが、自分のこととなると全然』

「まつまじかよ……」

そんなことを言われると、正直困る。

「あなたに過去はあった?」

記憶の片隅にでもいい。なにか、俺以外の記憶といつもののが、一つでもあってほしい。

どうしてかなんて、わからないが。

『いや……そうだな。ないに等しいが、これは言つておこい。』『え

られた宿命……いや、使命は覚えている。もつといえば、使命の下で生きている』

「使命……そり聞くと、縛られて息苦しいイメージだな」

『いや、そんなことはないが?』

「でもその使命って誰が下したの?」

『誰が? それは必要なのか?』

「は?」

その質問の意味を、理解することができず、裏返る声をだしてしまった。

『おまえが生まれたときに俺は存在した。その時から必然的に持つていた使命だ。いや、やっぱり宿命のよつた言葉がしつくつくる』自分一人で納得されても、俺にはわからない。

宿命と使命の違いがわからない。

どちらも縛られ、窮屈なことには変わりが無い。

「その使命の内容は?」

『沚を育てることだ。身も、心も』

『そつ育てるつて……証なんだよね? だつたら、証としてのなにか、目標とか目的とかはないわけ?』

「

『そんなものが必要なのか？ 目標が必要ならば、おまえが作ればいい。おまえが、その目標に向かつて頑張らせればいい』

卷之三

第三回 他人事お

卷之三

卷之三

卷之三

國朝詩人集卷之二

「 うふ、うふ。」

卷之三

「ああ、田中へさへ」

四三

「ちよつ何その重つ苦しいため息ー！」

ひとと「」「」子供みたいに口を尖らせでは不安を口にする

はじめてみたときのこの人の姿を懐一浮べ

赤い髪で、長くて肩辺りというくらい。少しチヤラチヤラしているおかしくない容姿なのに、少しもチヤラチヤラしてなくて。怖いイメージを『える田付き』だけど、何だか淋しそうで。身長は高くて、なぞを深めるマントをまいていて。

的な体型。

中くんがいるのを願つて。

「ようやく見れた

『ついに見られた?』

「一回会つてゐるからかな？」

がもな

目を閉じ、うつすらと微笑むそのやさしい口元。

その人の名は、まだ呼ぶことを認められない気がした。

だからまだ呼ばない。まだ。

「ま……お客様」
遠いところからすぐ近くへ寄ってきたかのよつた声に、ハツと田
が覚めた。

「あ……」

「お客様具合でも？」

顔を上げれば、名前も顔も知らない店員が、心配そうな顔をして
いた。

「いえ、すみませんボーッと考え事をしてたら寝てしまっていたみ
たいで」

必死に言い訳を作りながらも、急いで店を出た。
激しい雨が降っていたことをすっかり忘れていて、急いで傘をさ
す。

（真つすぐ帰るわ……）

そもそも、なぜ寄り道なんかしてまでの人を呼び出したのだろう
か。

家に帰り、のんびり寝てしまつとこう選択肢は無かつたのだろう
か。

「俺つて……バカ？」

「……」

乃木坂歩。15才。中学三年。

髪が黒くて、耳辺りのサイドは多少長い。といつても、肩にはあたりないくらいの後ろ髪。眼鏡を掛けっていて、まだすこし幼い顔つき。

性格、生意氣とよく言われる。

生意氣だという自覚はまったく無い。と思いこもつとしている。思つていることを、素直に口にしているだけであつて、周りの言葉に惑わされる人は、ただのお人好しだという性格をしている。

そんな歩が、夏休みが明けたある雨の日の学校帰り。道端で、きれいなエメラルドグリーンのネックレスを見つけた。

ただ、何だかそのネックレスが、見覚えがあるネックレスのような気がしてならない。しかも、とても大切な大事なものだという記憶があつた。でも、どこで見たことがあるのか、誰が持つていたのかという記憶は、まったくなかつた。

しゃがんで右手で拾つてみても、まったく思い出せずに。

「交番に届けたほうがいいのか？」

このままもう一度あつた場所に置いておくといふ選択肢はない。あるのは、自分のポケットにしまつていいのかだ。

雨にあたつて濡れているものを右ポケットにしまつたとき、少しだけポケットが重く感じた。

立ち上がりつて止みそぬ空を見た。

「あつ。虹だよお兄ちゃん」

海岸の岩場に座つてゐる女の子は、晴天の空を見上げてその見えた虹を指差す。

返つてくる返事はない。

いつもと変わらないしおの匂い。

波は穏やかに流れゐる。

「お兄ちゃん、今ごろあの人、なにしているんだね?」

それでも返事は返つてこない。

「ひつひな、特別かわったことはないですよー」

透き通る声が、誰も聞いてくれない海へと響いていた。

「梓あぶない」

という声が聞こえた瞬間、ドテッビシャツヒーフ、思いつきり水溜まりに転んだ音がした。

足を止め、聞こえたほうをむく。そこにま、髪の色素が少し抜けたシートヘアーの女の子が、ベッチャリ濡れた制服とともに起き上がりうとしていた。

「あああべちやべちや……」

さつき叫んだ声と同じ声。

起き上がる手伝いをしているのは、染めましたといつ茶髪のショート。転んだ子と同じ制服を着ていた。

「じつしよおー」

なんて、いまにも泣きだしそうなその転んだ女の子。どこかで見たことがある気がする。

現実にではない。かといって、写真やテレビとかではないと思つのだ。

(どじでだつたつけ?)

じつとその子を見つめっこると、不意に田中が合つてしまつた。

(「の田だ）

「の、甘えるのが上手そうな瞳。

その、助けている子ではない女の子と一緒に居たといつイメージがある。

思い出せない不安感。

見られたのが恥ずかしいと思ったのか、スッと顔を背けた。助けた子は特に何も気付かなかつたのか、急いでハンカチか何かで拭いて上げていた。

とても仲が良い様子。

面倒見の良い友達と、おつちょいちょいな女の子。対でいるから、息が合つ。

「羨ましいかもな」

三人でいるのがつまらないとか、いやだというわけではない。ただ、たまに疎外感がある。

「それを、不満というのか」

どうしても思い出せなかつた。

どこで、あの子をみたのか。

もう一度、女の子はこつちをみた。次は、俺から田をそらした。

「泣！」

「え？」

後ろから杵島の声がした。

後ろを振り向くと、杵島が不思議そうな顔をしていた。

「先に帰つてたんじやなかつたのか？ それとも迷つた？」

（そつか……こつちは杵島の帰るほうか）

「迷つたつて……子供じやないつてば」

「じゃあどこに行く気だつたんだ？」

「あつ……」

「ヤーヤしている杵島の口元が、すごく相澤のなにか企んでいる

ような口元にすごく似ていた。

確かに、今自宅に帰ろうとしていた。

考え事をしていたから、帰る方向を間違えてしまった。

「う～……」

何という言い訳も思い浮かばなく、ソロッと先ほど女子高生が転んでいたほうに視線を向けた。

すると、不意に田に入ってきたチカッと光ったものが落ちていた。ゆっくりと足をすすめる。

「址？」

近づいてしゃがんでみると、そこにはきれいなエメラルドグリーンのネックレスが落ちていた。

「ネックレス？」

「さつき女の子がここで転んでて、その子のかな？」

「どうする？」

「んー放つておぐ。どこの学校かわからなかつたから、届けようないし、もし無いのに気付いたら戻つてくるだろ？」

「ふうん」

体を起こし、杵島と別れて家に帰る。

なんだか、ネックレスをみた瞬間、やつぱりあの女子高生をどこのかでみた記憶があるといつのが頭から余計に離れなくなってしまった。

「これ……やつぱり青山梓か」

家に帰り、ポケットにいれたネックレスを取り出し、昔のアルバムを開く。

自分と同じ顔をした男の子の隣に、甘えたよつよつたりくつつく女の姿。その女の首にドガつてているものは、今手元にあるのと同じネックレスだった。

青山梓。

従姉だ。一個上で、甘えん坊で。一人にさせては不安なイメージを持たせる女。

歩の、大っ嫌いなタイプだった。

でも……。

「ちくしょう……ちくしょうちくしょうちくしょ——！」

思いつきり叫びながら、手に持っていたネットクレスを壁にむかって投げつけた。

「ちくしょう……渉……」

わたる

家に帰り、すぐに着替えてベッドに仰向けになった。

（思い出せ……どこで見たことがある？）

歩いていても、そればかり考えていた。

「あー！ 脳の小ささが憎い！ 記憶力こんなに無いのかよーだれか脳みそ割つて、過去を読んでくれないかな？」

（俺の脳よー働けえ）

「ん？ 記憶？ 読む？」

何か違うことを思い出せそうな予感がする。何か頼りになる……。

「あつ……」

思い起こせた一つ。

あのなぞの山田くんが言っていた。『おまえがなにをしたのかは覚えてはいるが……』といふことば。

「おー、なら覚えていてくれるのかな？」

だんだん楽しくなってきた。

田を瞑り、山田くんを呼び起します。

『なんだ？』

「なんだ？ つて……どうせわかつてんくせに」

『まあな』

「むかつくーー!」

『わけわからん』

なんだか、言わなくともわかられてしまつてこいつのが、悔しくてたまらない。

「で、覚えてる? あの女の子、ビリで見たことがあるのか」

『……いや、ない。一つだけ言つておくが、俺はおまえが独自に見る“夢”は、俺が見せようとする夢以外、俺の記憶には刻まれない。

だから、夢で出会つたとか、ただの思い過しどか。もしくは、一日

惚れでもしたのではないか?』

「ひつー田惚れはないけど……。そつかあ、夢は覚えてくれてないのか。でも、最近夢自体見ないんだよな~」

『なら思い過しだら?』

「思い過しだつたら良いけど……、わつか、なんていった?』

『思い過しだら?』

「その前くりこー!」

『ー田惚れでもしたのではないか?』

「もつと前!」

『どこだ?』

「俺が見せよつとある夢だか何だかって言つてたといふー、ビリこつ意味?」

夢とこいつのは、見せることができるものだつただろつか。

そもそも、夢はびつからみてみる」とができるのか。夢の原理がわからぬ。

『覚えているだら? おまえが毎日同じよつな夢を見ゆるいと』

『あああの日の……そつこやあ最近見てないな

『あれは、一応俺が見せていたようなものだ』

『ようなつて……え! それ本當?』

『ああ』

「そつかあ。でも、何で最近は見なくなつたんだ?』

『もう必要性が無いからな』

『どういふこと?』

『おまえはもう、俺の存在を知ったからだ』

『あれは知らせるためだつたの?』

『そんなものだ』

『あいまいな返事だなあ』

『まあ、理由は色々あるからな』

『あーもう気になる言い方だなあ!!』

『だだをこねるように、両手両足バタバタと暴れてみせた。

「どうしたんだらつ……波が騒いでる。サフィン、何か感じる?」

『かすかに……』

一人しか居ないその海岸に、その子にしか聞こえない返事が聞こえた。

「いやな予感がする。どうすればいい?」

『……』

「そつ……」

『報告します』

不気味な薄暗さに囲まれている一部屋に声が響き渡る。

『今日、片割れと話しました。いま、この世界で何が起きてこるの

か。なんのために私たちみたいに、力を持つ人が現ってきたのか。
しかも、証を持たないものが現れるのか』

『結論は』

『……私たちにもわからない。でした』

『役立たず』

『もつもつしわけありません！でも、知る手立てがありません』

暗き部屋に、パリーーンと響くガラスの音。

ガラスが擦り合いながら落ちる音と、水滴の音。

『もういい。他に報告は』

『えつと、『あいつ』の精神状態が、だんだんと落ち着いていくこと。ですね』

『落ち着いてきているだと？』

『はい。今まで不思議がついていた感情や、不安感がだんだんと薄れてきています』

『……この前言つていたよな』

『はい？』

『危険な状態であることを感じさせるだつたか何だつたか』

『はつはあ……』

『すぐに……いや、明日からだ。明日、必ず『あのガキ』の精神状態を崩せ』

『御意』

パリーーン！

「あつちやあ～……」

お碗が割れる音。

『ご飯を注ごうと茶碗を出したときだった。ついつい手が滑つて落としてしまったのだ。』

「転ぶわ割るわ……まだ何か起きそうで怖いよー」
しゃがんで跳んだ破片を軽く集めようと/or/した。

しゃがんで跳んだ破片を軽く集めようとした。

あれ？」

いつもなら、チャラツと音が鳴り、首から一つのネックレスが邪魔をする。それが、鳴らないのだ。

「無いはすか無いと、首の周りを触ってみる。
「ない……ない！」

いくら探しても、

「最悪………今日絶対厄日だ！」

4

必死は今日起きたこと

お碗を片付けるのを放り投げ、急いで家を飛び出す。

める。

水溜まりが足に掛かる。そんなことも気になんて掛けない。ただ、失ったエメラルドグリーンのネックレスだけを求めて走った。

「……許せない……」

投げたネックレスをつかみなおし、傘を持って家を飛び出す。留まつた水溜まりを躊躇つて走つながらも、丁度来たバスこ

乗る。

向かう先は、渉の場所。

ない　ない　ないよお

水溜まりに座り込み、地面に手を付ける。

「どうしよう……」「めんね、ごめん……」

頬を流れる水滴。すでに雨か涙かわからなくなってきていく。

ただ周りは、静かに雨が地面にあたるだけ。

「ねえ、どうすれば良いと思つ? うん。 そうだよね、知らせ

に行かなきゃいけないよね……ありがとう」

独り言のようなことを言いながら、体を起こし立ち上がる。

雨を気にせず再び走りだす。

涙と雨に濡らした全身を余計に濡らしながら。

「なあ、俺のすべきことって何だと黙つ」

返事の帰つてこない、雨の墓場。

「どうするべきだつたんだつ……」「めんね渉」

耳元にせ、傘に当たる雨の音がつるむとく響いていた。

止む様子も見当たらぬ、力強い雨。それと、水溜まりを走る足音。その音は、次第にゆづくつとなつて、ぴたりと止まつた。

「歩……ちやん」

女の声。

ゆづくつと向つてみれば、雨に濡れた女の姿。

「渉は優しいから。怒らないと思つ……渉は。ね」

チャララチヒーンが擦れる音を鳴らしながらネックレスを見せてみる。

「あつ……それ」

田のネックレスが、不意に田の前に現われて、思わず手を伸ばす。

しかし、それはまだ畳く位置ではなかつた。

「雨に濡れてでも探したかつた?」

「大事なものだもん……」

「なのに捨てるんだ?」

「捨てたんじやないもん……転んじやつて」

「そつやつて、ドジな所を装つのはなに? わづかつて男引つ掛け

るつもり? 渉の時みたいに」

「ちがつ! 装つてるわけじや……」

必死に抵抗しようつと思つたが、歩が田を逸らしたことによつ、その言葉を繋げることができなかつた。

「涉はせ、俺が殺した」

「ちっちがつ」

「違うない！……俺が殺したんだ。おまえは何も知らない。何も知らないから……」

「じゃあ教えてよ。何があつたの？ どれだけ調べても死因は不明。

しかも、死体は左腕しかなかつたんでしょう？ 近くには歩ちゃんもいたけど、意識不明の重体。病院に運ばれて……」

「うるさい！ 俺は……俺は涉を助けなかつた。助けられるのは俺しかいなかつたのに。俺さえ生まれてこなかつたら……俺さえ生まれてこなかつたら涉は生きていけたんだ」

「歩ちや……歩ちゃん！ 変なこといわないと……それ、涉くんに失礼だよ」

「失礼？ どうして？ 涉は生きるべきだった！ 俺が代わりに死ぬべきだったんだ！」

怒鳴り付けるように叫ぶ。

涉が消えたときを思い出す。

あの日も、晴天とは言い難い曇りの日だった。雨が降りそうで降らない、肌寒い空気のなか。歩と涉は、向かう先を決めずにただ散歩感覚で歩いていたときだった。

何氣ない話をして、たまに店に寄つて。何氣ない一日が過ぎようとした夕方だった。

町の外れまで行つていて、森のなかへと入つていた。

そこは、小さい頃からよく遊んでいる森で、庭のようにあちこちを知りぬくしていたつもりだった。

しかし、ついたときには、今まで家に帰ろうとする時間で、薄暗く、足元が危ういことはお互いわかっていた。だから、奥には行かず、途中にある石段に座つてただのんびりと夕日を眺めていた。

昔から見慣れた景色。隣には、自分と同じ顔の男の子。身長も、声質も。すべて同じ。

でも、昔よりも町の光は強くなつていて、町を挟んだ向こうにあら山が見え、星は町の光に負けてしまつていて。

「歩。僕らはずつと一緒にだよね？」

「当たり前だろ？ 一緒にやないといやだね」

ベーッと舌を出し、子供っぽく渉に甘えてみせた。

いつも一緒にだつた。

周りと違うことをしたとしても、片割れと違うことはしない。いつも一緒に同じ服を着て、同じ時間くらいに起きて。片方が早く起きてしまえば片方を起こして強制起床。同じ時間に寝て同じご飯を食べて。

「でも渉、何か隠してるでしょ？」

歩はわかつっていた。

渉は秘密主義者だと。でも、歩には話していたし、歩も渉にしか話さないことをばかりだつた。

でも、隠し事をしていることを、いつだつたからか気付いていた。「あーやつぱりぱれてたか」

「隠し事するとき、渉、苦しそうだもん」

「苦しそうだつた？」

「うん。申し訳ないつていう顔してた」

「そつかあ……歩は昔から鋭かつたもんな」

なんて苦笑いを見せる渉は、ゆっくりと両手を胸の前で合わせた。ちらりと歩の方を見ると、見ててと言つた。

一瞬、どこを見ていれば良いのかと疑問におもつたが、すぐにその合わせた両手のことだと気付いた。

一瞬合わせた両手に力が込められたと思えば、すぐにそれは離されてゆく。その間には、カチカチに冷えて固まつた氷があらわれてきた。

両手から生えるよつて、所々飛び出している氷の柱が、横に。

涉の肩幅くらいになると、離すのを止め、縦に柱をたてて上の手を離し、片手でそのきれいに透き通った氷の柱を乗せていた。

「どう?」

「……どうして」

何といえば良いのかがわからなかつた。
何といえば涉を傷つけないのかも。

「変だと思つ?」

「うん。でも怖いとは思わない」

どういう表情をすれば良いのだろう。

笑えばいい?

不思議がればいい?

驚けばいい?

わからなすぎて、ただ茫然とするしかなくなつてしまつた。

「そう」

「いつからできるよう?」

「一ヶ月くらい前から」

たしか、隠し事に気付いたのは、一ヶ月前くらいだつたから、結構気付いてあげられなかつたのだろう。

「そつか……それ、どういう原理なの?」

「僕にもわからないんだよね。いつのまにか、じつ……想像するっていうの? こうなつてほしこうして形になるんだよね」

体のなかから? 氷が?

「どうして黙つていたの?」

「嫌がつたり怖がると思つたから」

「嫌がりも恐がりもしないけど……そつか」

それからおとなしく家に帰つとした。

もう、あの空気に耐えられなくなつて。

いつも歩き慣れていたはずの獣道。転がつてゐる枝や石に足が引

つ掛かりながらも、森から抜けようとした。

「あつ」

そう言葉を出したのは渉だった。

ピタリと足を止め、昔に大きな木があつた方を見ていた。

「ああ。そういえば小さい頃向こうに秘密基地作つてたつけ？ 大きな木が目印で……でもあの大きな木、どうして無くなつたんだつけ？」

いつだつたか、何かの理由で刈られたといつていたが、その理由が思い出せられない。

久しぶりに見てみたくて、大きな木があつたほうに足をすすめた。

「あつ待つて歩！！」

あわてた様子で渉が腕をつかんできた。

「なに？」

「そつちは……」

「なに？ 怖いの？ ジャあちょっと待つてなよ俺だけ行つてみるから」

笑いながら言い、腕を優しく振り払つて背を向けて駆けて行つた。後ろから渉が何かを叫んでいたが、さつきの渉のことを考えていたため、耳には入つてこなかつた。

しかし、渉の言ったことを聞かなかつたからこそ事故は起きた。少しだけ駆け足になつていた足は、不意に飛び出している木の根に足を引っ掛けた。逆の足で体を支えようとしたが、その足はなぜか空振り、上体が前に倒れてゆく。

その時不意に思い出した。

どうして大きな木が刈られたのかということを。

数年前に少し大きな地震と大雨が重なつたことがあつた。その時に、地盤が悪くなり土砂崩れが起きた。

運がよかつたことに、麓の住民達に怪我も被害もなかつた。そのことに対する、どういうことかと問題になつた。

奇跡的に被害が無かつた。不思議なことに崩れた土砂は、どこに

消えたのかもわからない。そんな不可解なことが起きた。

だからそこは、きれいに消えてしまった

「歩ー！」

茫然とそんなことを思に出してみると、渉の声がすぐそこから聞こえてきた。

宙に浮いた体は、力強くかたく冷たいものにぶつかり、どちらを向いているのかもわからない状態に陥ってしまった。

「歩……」

「わ……たる？」

気付けば渉に頭を抱えるように抱き締められていた。

冷たいものはどこにももうない。

いつのまにか地に横になっていた。

「歩……よかつた無事で」

「渉……助けてくれたのか？」

「うん」

「ありがと……」

そういうて上体を起こし、ゆっくりと渉の左手をつかんだ。

「ううん。歩が無事で本当によかつた。それだけでよかつた本当にそういうて、ホッと安心そうにほほえむ渉。その渉の左手は冷たくなつてゆく。氷のように。

体から光り輝く透明な光が、空へと向かつて輝く。

「わた……る？」

違和感に気付くのが遅かった。

だんだんと渉の姿が消えてゆくとき、今生きてくる人生に、渉の存在が消えることに気付いてしまつ。

「渉！ いやだわたるー！」

しがみ付くように、左手から左腕の付け根を抱き締める。パアツと田もあけられなくなるほど光に、ギュウッと田を瞑つてしまつ。

瞑つた田の前は真っ暗。ふらつと体は平行感覚を失い、どこかへ

とぶつかるのがわかつた。
ない。そんな気がした。

目を開けられない。目を開けてはなら

「歩ちゃん？」

黙りこくつてしまっていた歩に、女の子、青山梓は声をかけた。

「……どうして涉は俺を生かしたんだろう？」

「さつきから何を言つているの？　さっぱりわからないよ……」

「わからなくていい。あなたは知るべき人ではないんだ」「（何を話してんの……俺は。あの時のことなんて俺だけ知つていればいい。あの時の話だけはするな……俺！）

「知りたい！　知つてるんでしょ？　歩ちゃんはあの時何があつたのか……」

「知らない知らない知らない知らない！！」

頭がパニックになる。

知つてることを教えてはいけない。

今までだつて警察の人にも親にも、断固として口を開くことすらしなかつた事件。

警察の人も医者も、ショックで口がきけなくなつただとか、思い出したくないのだろうとか、しま終いには思い出してパニックに陥らせると大変だとかまで言われた。しかし、訂正することもなく、ただだんまりを続けた。

その間も、なんどかこの梓が様子を見に来てはいた。涉を好きだつた梓にとって、涉の不可解な死は、辛く淋しかつたであろう。

親も泣いた。

クラスメイトも泣いた。きっと、生意氣でガキっぽい俺のことであれば、泣かれることもなく鼻で笑われていただろう。

親戚も、先生も近所の人たちも泣いた。

「ただ、俺だけが泣くことができずに。」

「歩ちゃん。どうしてそんなに黙っているの？ 何があつたのか、歩ちゃんは誰にも言わないつもり？ さうやって、一人で抱え込むの？」

刈られたと思った大きな木は、刈られたのではなく、土砂災害で崩れてしまったのだ。そんなことを思い出すのが遅れ、渉を亡きものとしてしまった。

渉を殺したのは、渉を最愛していた俺自身だと知つたら、きっと世界のみんなは俺を恨み、憎み続けるだろう。でも、そんなのは怖くない。なんだか、言つてしまつたら渉にまでも嫌われてしまつ気がした。

あとは、どうしてあんなとこひで、左腕をつかみ、倒れていたのかだ。

崖に落ちたといふには、崖のつえであり。ギリギリにこるといふわけではなかつた。

だから一時、何者かに襲われ、バラバラに切り刻まれたのでは？ という問題になつた。

意識不明で倒れていた俺については、黙らせるために薬物を使われたという意見もでたのだが、身体から薬物反応がされることもなかつた。それに、切り刻まれたという証拠となるようなものも不十分だつた。なにせ、そこに血が出た形跡がないのだ。

切断面には、きちんと血管も通つていて、骨もあり肉もあつた。ただ、血管の切断面は、出ないよう絞めて閉じたような形になつていた。肉も崩れることもなく。

不気味だつたらしい。

何より不気味だつたのは、意識のない俺が、その左腕を強制的に離させないかぎり、手放さなかつたのと、その腕が奇妙にも俺と引き剥がすまで、生きているかのように脈打つていていたことだつた。

俺と引き剥がした瞬間、その腕が脈打つことはなくなつた。それと比例するかのように……。

「歩ちゃんが考えること……全然分かんない……」「分からぬでいい……」

「どうして！？」

「自分にも分からぬ自分のことを他人が知る必要はないだろ？」「じゃあな」

ネックレスは返してやらない。

右手でしつかりポケットに入れたのを確認し、肩に乗せていた傘をしつかり持ちなおして家へと向かおうとした。

「待つて！ お願ひ！ 渉くんがどうして死んじゃったのか……教えて！」

振り向かずピタリと足を止めた。

理由を知りたがる梓にとって、渉といつもの好きな人や、掛け替えのないものという大事な人なのだろう。だから知りたがる。

「渉のこと、神様も好んでしまった。でも俺は嫌われ者だから渉だけをつれていった」

あの力は神様が授けたものなのだろう。

なのに、俺なんかに莫大な力を使つちゃつたから、怒つて自分だけのものにしたかったんだ。

「神様……？」

「そう。神様。だから真理は知らないほうがいいんだ」

「そんな……歩ちゃん、神様なんて信じてたつけ？ 一番に神様なんてつて言いだしてたのは、歩ちゃんじゃない！ むしろ渉くんのほうが神様を信じてた」

「だから神様は渉を好んだんだ！ だから渉をつれていった！ それ以上のことは知らない……わからないんだよ」

そう言い捨てて、俺は走った。

泥が跳ねようが雨に濡れようが、そんなことを気にする余裕もないくらい、必死に駆け出した。

目的を失つてしまつた犬のよう。

気付けば、見慣れない土地にたどり着いてしまった。

いや、がむしゃらに。無鉄砲に走りだして、どこに出たのか頭が追いかけていないだけ。

建物の一つ一つに見覚えはあった。

「……ばっかみたい。俺……」

数代の車が、横を通り過ぎる。

水溜まりが撥ねる音。

タイヤが回る音。

車内の音楽が漏れる音。

すべてが耳に入ってくる。

「何が神様だよ」

再び車が横を走る。

「神様なんて信じてないくせに」

バイクも大型自動車も、数台俺を避けて横切っていく。

「俺は神様を信じてはいけない……ダメなのに……歩は信じてはい

ないんだから」

そう自分に言い聞かせる。

自分は渉とは違うと。

でも、違うところを見つけると淋しい。すべて同じでいたい。だ

から、これからは渉のために神様を信じても良いのではないか。

神様を信じてあげることができる渉の代わりに、俺が神様を信じてあげればいい。

もしかしたら、今渉は昇格して神様の一人になっているかもしれない。だったら、渉を信じるのと一緒に、神様も信じるべきなのだろうか。

誰かが言つていた。

神様は信じたものの心に存在すると。
「心なんて信用ならない」

「相澤～」

「おっ……おうおはよう。どうかしたのかよ？ すっげえだるそう
だぞ」

「うん～」

眠い体を必死に集合場所まで運ばせた俺は、目を擦りながら必死
に返事をしてみせた。

「夜更かしでもしたのか？」

「いや……うん。したのかな……？」

「何だその曖昧な返事？」

「いや……なんていうか夜中までメールしてた気分」

「気分かよ」

別に本当にメールをしていたわけではない。

ずっと山田くんと話をしていたのだ。身体は眠っていてことには
なっているらしいが、頭はきちんと起きていることになるらしいこ
とが、体験でわかった。

すく、つい。

身体は寝ていてくれたから隈はできなかつたからよかつたものの、
精神的隈さは学生にとって、強敵だ。

杵島を待っていると、不意に相澤の足が進んだ。

「あつ相澤！？ 杵島待たねえのかよ」

「あ？ 聞いてねえの？ 僕には今日休むってメール來たけど」

振り向いて、不思議そうな顔をする。どちらといえど、不思議そ

うな顔をするのは俺の方のはずだ。

一度携帯を開き、メールの受信ボックスを確認しても、問い合わせをしても、メールが来ている様子はなかつた。

「ちえー！ 僕にはメール無しかよ」

「ははは。どつちか知つてれば良いだろつて手え抜いたんだろ。どうでもいいけど早く行かねえと遅刻だぞ？」

「それはやばい！」

いやな予感がする。

本当に杵島は相澤にメールをしたのだろうか。

前、確か夏休みが明けた最初の登校日。あの日も、杵島は少し遅れてきた。

（そ、うだ……確かあの日、違う何かがあつた気がしたよ、うな……）
なんだつただろうかと、必死に考え、思い出そうとするが、こう

いうときに限つて思い出せない。

学校に着くと、色々な場所に生徒が固まり、期待と好奇心の瞳で何か楽しそうな話していた。

じつくり聞いてみると、会話はたつた一つの話題だった。

転校生がくるらしい。

どんな子かとか、髪は長いとか、学年は何年かとか。

聞けば女子らしいが。

「転校生ねえ」

相澤がぼそりと興味がないかのようにこぼした。

「へえ、相澤めずらしく興味ないの？」

教室につき、カバンを机に乗せる。

「なに？ 況は興味あるのか？」

「そりゃあまあ、多少は

「珍しい」

「相澤だつたらもつと騒ぐと思ったんだけどなあ

「なに？ 転校生くること知つてたのか？」

少し驚いた顔で言われるものだから、逆に驚いて首を横に振る。

「まさかあ

「じゃあ俺も驚くから 況も驚けよ？」

「おーけー。せーの……」

『わー』

もちろん心の籠もらない驚きだ。

驚かないのは、最近色々あって、そのことに対する驚くことが多かつたから、いまさら転校生なんかで驚かなくなつてしまつた。きつと相澤もそうなのだろうと、勝手に解釈していた。

噂の転校生は、同じ学年で隣のクラスに転入した。クラスが違えば、接点がない。そうおもつていた。

授業が始まる前に送った杵島へのメールが返つてこないまま、昼休みが過ぎ放課後となつてしまつた。

不安は募り、相澤の田を盗んでもう一度メールを送つた。

「沚

「ん？」

「悪いけど先帰つてでもらえるか？」

「んーいいけど……待つてようか？」

「いや、もしかしたら長引くかもしれないから

「う

「そつか」

また、一人で帰らないとならないのか。そう思つと、最近の相澤と杵島の行動に不信感を覚えてしまう。

昨日だつて、先に帰させられたし。なにか、内緒事でもしているようだつた。

（そりやあ人間だし、内緒事の一つや二つあつてもおかしくないけどさあ）

あからさまにその話題に俺を入れないようにされている気分になる。

教室を出でから、一人になる。

一人になつても、何だか一人ではない気がする。

山田くんのせいだ。いや、いまはおかげといったほうがいいのかもしれない。

いつものように廊下の角を曲がると、いきなり人があらわれたような錯覚を覚え、反射的に数歩下がつた。

「あつごめんなさい。少しよそ見をしていて……」

見たことがない子だつた。

クラスもそれなりにあつて、人数もいる学校だから、知らない生徒がいてもおかしくはないが、見ることはあつた。でも、この人は見たことがなかつた。

髪は長くて、少し天然ではないだろうパー・マが入つてゐるようだつた。クルクルというイメージを持つ。

顔も、化粧でくつきり一重に、真ん丸な瞳に見える。身長は高くも低くもない、162cm程度。

「あついや俺の方こそごめん」

「ねえ、今からかえるの？」

（何いきなり）

「そのつもりだけど……」

「もしよかつたら校内案内してくれない？」

「もしかして、君今日の噂の転校生？」

「**恭恵** よろしく」

人懐っこいからか、そう名前を名乗り、手を出してきた。

「**沚** よろしく」

（まだ案内するって言つてないんだけどなあ）
手を差し出し、握手をしようかとおもつたが、何だか差し出す勇
気がなかつた。

ここで差し出してしまつては、未来の何かが崩れてしまつそうな
恐ろしさがあつた。

「どこから案内してほしい？」

「握手は苦手？」

「異性に触るのが苦手なんだ」
もともと異性と話さないから、『人と』といつより、『異性と』

のほうが好都合だつた。

「そう。損な性分ね」

「まあね」

「じゃあ図書室教えてもらおうかな？」

「本好きなんだ？」

「まあね」

それから俺は、恭恵が納得するまで校内をさまよつた。

「あの女子……恭恵だけ？ なんだつたとおもつ？」「
『しるか……でも、触らなかつたのは正解だつただろうつな』

「へ？ なんで？」

『なんでつて……いやな予感したんだろ？』

「うん……でも、あれは勘だよ？」

『反射的な勘こころ信じじる』

「何その命令形！」

『悪かつたな』

「謝る気ないだろ？」「

家に帰るなり、すぐにベッドに横になり、報告する必要がないくせに、山田くんに報告した。

振り回されることになるとは思わなかつた口をいじほすといつてもおかしくはない。

『それより、杵島というものからメール、返つてこなかつたな』

「……あつ！ そういうえば」

振り回されていたせいで、確認するのをすっかり忘れていた。意識を戻して目を覚ました。

耳元に放り投げていた携帯を開き、メールを確認する。

「来てない……どうしたんだろう」

不安は募るばかりで、再び同じようなメールを送つた。

数分待つてもメールが返つてくる様子がないものだから、俺は財布と携帯をポケットにつっこみ、家を出ようとしながら、その時メールが返つてきた。『大丈夫だよ』と。

でもなんだか大丈夫じゃないことはわかりきつていたから。急いで家を飛び出した。

薄暗い地下牢。

吊されている両手両足を少し動かせば、接合されていいるチエーンが擦られ、カチヤカチヤと室内に響き渡る。

「あいつも悪趣味だなあ……」

苦笑するしかなかつた。

まさか、友人に監禁されるとなるとは思わなかつたから。しかし、その友人を恨むことはない。

「だーれーかー」

『いるわけがないだろ？ おまえも案外バカだなあ』
(おまえにだけは言われたくないかな)

『ああ！？ なんでだよ！ のこのこ捕まつたのも、おまえの失態だろ！』

(だからその考え方の足りない思考がまだ子供だつて)
はあと深いため息を吐く。

『なんだとー！』

(カリフォンスーうるさい)

『外に聞こえてないんだからいいだろー』

目蓋を閉じれば、14才くらいで薄紫色の髪が軽く外に撥ねてい
て、つり目でムツとした表情をしている男の子が現れる。
その反抗的な瞳が可愛くて、ついブツと吹き出してしまう。

『笑つたな！』

「あんまりにもガキくさくつてさ」

『なつ……ー』

「つたく……寝ないようにしてたのこ」

『べつに監禁されるんだから寝ようが向こうが勝手だらう?』

『まあそつなんだけじね』

『一度田のため息を吐いてしまつた。』

『監禁されているだけというのもつまらないものだ。』

『でもなんでわざわざつかまつてやつたんだよ』

『友人の頼みだったから』

『はあ?』

『はあ?』

『悪いけど……ちょっと話したい』とあるから、今までこれるか?』

『電話じゃ……今じゃダメなのか?..』

『話しつぶし』

『わかったよ……』

三度田のため息を吐いた瞬間、胸ポケットに入れておいていた携帯が震えた。

メールだ。

数時間前までは、一時間ほど置きになつていた携帯だが、だいたい放課後くらいになると、まったく携帯はならなかつたが、不意になつて驚いた。

数時間前までは、泣だらうという勘が働いたが、数時間置いたのと、返事を送らなかつたからもうこないだらうという勘で、違う

人だろうといつ予感が働いた。

メールが鳴ったおかげで目が覚めた。

しかし誰だろうか。

「もしかして辻も捕まつたりして……？ だつたらぜつてえゆる
さねえからな……」

『おまえ、腹黒いだろ』

「そつでもねえぜ？」「あつそお……』

『激しい独り言だな』

「……帰つてきたのか」

「ツツツとわざとらじく足音をならしてきたのは、リリで連れて
きた友人だ。

「おとなしくしてたか？」

牢屋の鍵を開けずに、扉^フに会話をする。

姿は見える。でも、背を向け、じちらを見る気はないらしい。

「おとなしくするしかないだろ？ といふで、辻は元氣か？」

「ああ。元氣そうだ。相変わらずな」

「今どこに？」

「ああ？」

「質問くらい、答えてくれてもいいんじゃないのか？ わたせからメ
ールが来てるんだ。返事を返したい」

「……一回だけだ」

「サンキュー」

「だけど、手は自由にさせない。余計なことを言わせないために、

文面は俺が打つ。文句は？」

「あるけど……しゃあないつておもつてやるよ」

少し警戒しながらも、鍵を開けて中に入つてくれる。

指定した場所から携帯を取り出し、中を見る。

「あいつもまめだな。未開封はすべてあいつだ」

憎つたらしかのよがな、嫌味混じりのほほえみ方。

「中を見せる」

「古いほづからな」

といつて、すべてみせてもらつた。

沚ではないだらうと思われた最後のメールも、沚からだつた。
メールの返事を言つと、薄情だなといわれた。

しかし、それでよかつた。

きつと沚は、その一文でわかつてくれるだらう。

『ほんと。薄情だな。めずらしじやねえか。いつもならもつと

』

（本当おまえはガキだな）

『なつ！ なんでだよ！』

（めずらしいんだろ？）

『あつ？ ああ……あ？』

まったくわからないかのように、素つ頬狂な声を上げた。
メールを打ち、送信し終えると、すぐに牢屋から出て鍵を掛けた。
それから何を言つこともなく、その場から離れていった。
(カリフォンス……。俺はおまえを信じるからな)

『あ？ ああ？』

「うう……いないわけないんだらうけどなあ

必死に呼び鈴を鳴らすが、誰かがいるような様子はない。

訪れたのは、杵島の自宅。

お見舞いという名を称した安全確認。
あのメールがどうしても引っ掛かる。
どうして返事が遅かったのか。

病院にいたのだろうかという疑問もあつたが、にしては長じよう

な気がした。でも、返事が返ってきたところとせ、もう病院にはいないはず。

もう一度、呼び鈴を鳴らしたとか。

「止?」

不意に後ろから呼び止められる。

「あ……相澤? どうしたの?」

振り向くと、そこには相澤がいた。

「おまえこそ」

「お見舞いに……」

「お見舞? あいつ、帰ってきてないだろ」

当たり前かのよつと言つ相澤の声に、だんだんと不安感を覚える。

「なんで?」

「あいつ、入院か、しばらく様子見で病院ベッドにじこつ」

「そんにひどいの!?

「高熱が続くんだってよ」

「……どこの病院?」

「さ、さあ? そこまでは……」

「知ってるんでしょ? 相澤」

「……」

「杵島が入院するのはわかつた。でも、なんでメールが返ってきたの?」

「メール? さあ? 屋上でも出たんだ?」

「なんで? 入院までいった高熱者が、屋上に行くこと許される?」

「……」

「どにつれていったの?」

「どうして疑うんだよ」

「付きがわった。」

眉間に皺が寄り、ジッと睨み付けてくる。

「だって、最近の相澤おかしそうな」

「どんな風に?」

「前みたいな楽しさが消えて、すぐペリペリして。なんかに追い込まれてるみたいに」

左手が熱い。

すごく懐かしい現象。

昔はよくあつたのに、最近になつてまつたくなかつた。でもいま、左手が熱くなる理由がわかつた。

それは、例外はあるものの、規則というものがあるみたいだ。一つは、今みたいに感情的になつたときだ。

「ピリピリなんか……」

「じゃあ言い方を変えるよ。最近の相澤は、あからさまに隠し事をしているつて顔してゐる」

「なつ……」

「ねえ相澤。杵島になんかあつたら、ただじゃおかないよ?」

「そつ……やつやつていつも俺をのけ者にするのか?」

「あ?」

「いつもお前は杵島蠶蜃だよな」

「なにいつて……」

「いつつもそつやつて杵島杵島つて……。やつなつたのも、おまえがどつか遠くに行つてからだ!」

「あれは!」

「しかも、一人で電話で相談して言いたい放題言こやがつて……」

(電話?)

いつたい何のことを言つてゐるのか。

確かに、杵島とは電話はするが、それを相澤に知られることはないはずだ。

(もしかして杵島が言つたとか……)

そういう奴でもないはずだ。

「相澤……確かに杵島とは電話をした。でもなんでそれを知つてい

る? そういうえば、最近の杵島と一人で話すことが多かつたよなお前

……お前だつて人のこと言えるのかよ

「何で知っているのか？　忘れたのか？　俺は水を操れるんだぜ？」

「忘れてはいなさいけど……それとこれと何が関係して……」

「あの日は雨が降った。杵島が飲み物を飲んだ。それを言えばわかるか？」

「え……」

確かに、杵島は電話中に何か飲み物を飲んでいたし、あの日本当に雨が降った。

前は持つてきいていた折り畳み傘を、相澤は持つてきているはずがないといつていて。知らなかつたと。でも、いつだつたか、天気予報でも晴。雨が降る様子もまったくないので、いきなり土砂ぶりな雨が降つたとき、相澤は折り畳み傘をもつてきていて、俺と杵島で相合傘をしたことがあつた。

「……でもあれば、相澤も知らなかつたつて……じゃあその前のは故意的に……？」

「どつちも故意的にやつた。最初は、朝から降らせるつもりだつたから持つてきた。でも、電話の日はあいつが遅れてきた。そこでこそ話してるのがきになつて、その時雨を降らせることを決めた。だから傘なんて準備はしなかつた。とりあえず、その雨におまえらをあてたかつたからな」

「でも、雨にあたつてどうやつて会話を？」

「雨を通じて盜聴。簡単なことさ。でも、水には流れがある。乾いてしまつたら終わり。だから、杵島の準備した飲み物に寄生した。杵島に付着した雨の水滴を落として飲み物に増幅。わかるか？」

「そんなことまで……」

できてしまふのか。といいたかつたが、あまりにもショックで口が開かない。

裏切られた一心。

会話を覗かれた恐怖。

いつたいいつからそんなことまでできるようになつていたのか。確かに、傘については疑問に思つたことがあつた。

偶然だと思い込み、すっかり忘れていた。

「裏切ったの……？」

「裏切った？……まあ、裏切ったことになるのか」

「なんてしらばっくれようとした表情。

淋しそうな表情が一瞬みえたが、すぐに堂々とした表情へとかわる。

「じゃあ、杵島とふたりっきりで話してた理由は？俺に内緒で」「特になーい。目的は、お前を一人にすることかな」「杵島をどこかに連れていったのも……おまえが？」

「まあね……」

「杵島をどうするつもり？」

「さあ？……どうじょうかはこっちの勝手。教える義務はない」「いつにいつとき、山田くんとはなせたら。眠らなくつたって、会話をすることができるば。

そう思つのと反面、それでも山田くんは、いい案を出さない気がした。

「連れていくてよ。杵島のところに

「……それはできない

「どうして？」

「どうして、急に弱そうな表情をするのか。

まだ、何か大事なことを隠している。そんな気がする。

「どうしてもだ」

「……明日、学校には来るんだよね

「さあな」

「どうして？……なんでそんなんなっちゃったの！？相澤、誰かに

頼まれたの？首謀者はだれ

「知る必要はない」

「必要はないって……知る必要があるから聞いてるんだ！俺のダチ連れていかれて、はいそうですかつておとなしくしてると思つー？

「おとなしくしているのが懸命だ

なんといおうが、冷静さを保とうとする相澤が醜く見える。

できることなら、相澤が首謀者ではなく、操られていたり脅されてやつしていることだつたりしてしてほしい。

脅されていいるなら助けてやりたい。

杵島だから助けるのではない。親友の一人だから助ける。だから、相澤も助けたい。

「俺さー、常識とか一力のこととか……、相澤や杵島達よりも知識がないのは自覚してる。でも、それに親友を助けることとは関係ないと思わないか？ 今大事な人が、自分の知らない場所で、どんなことをされていてどんなことを考えているのかすごく気になる。俺たちが尋常じやないのは自覚した。だからこそ、俺もかかわりたい」「かかわってどうするつもりだ？ 力を使うことのできないお前は、ただの杵島のお荷物にしかならないかもしねりぞ？」

「力がないものは力がないなりに。力がないからこそできることを探すことだう？」

実際、力がないものが、力のあるものに歯向かおうとしたって無理なことなのかもしない。でも、力のないものでも、力のあるもの近くにいて、何か役に立つサポートをするのは、力のないもの重要な役割ではないのか。

その中でどうにかして力を付けねばいい。たつたそれだけだ。ニヤリとほほえんでやつた。

力があろうがなかろうが、今、この相澤に負ける気がしなかつた。顔を歪ませ、軽く舌打ちをした。

ようやく顔を崩した。

あの、冷静さを保とうとしていた表情はどこにもなくなつた。

「頼むから……」

弱々しい声を出したあと、足をすすめてきては、両肩をやせしく捕まれ、ピタツと体が相澤とくつつく。

身長の差で、額がかるく相澤の右肩に触れた。

耳元に声が聞こえた。

どんなに耳を澄ませても、この微かな距離で微かに聞こえる、い
まにでも消えてなくなりそうな声。

それを聞いた瞬間、腹部に勢いのある、ずしりとした衝撃がかか
つてきた。視界は傾いた太陽で暗くなつてくる暗やみではなく、一
瞬にして目の前に星が散らばつたような感覚。

今何をしていたのか。何をされたのか……。

グラリと体は揺れ、ガシッとしつかりした頬りがいのある力強い
腕に支えられてわかつた。

殴られた。と。

しかし、それ以上のことを考へることはできなくなつてしまつた。

「また、お客様さんが増えたわね」

「……お前か」

辻を杵島と同じ空間に吊してきた。

杵島は辻を中心に入れると、数時間目が覚めない程度の軽い睡眠薬を飲ませた。

視界にお互いを映さない場所に。

その空間を出たとき。相澤にとつて面倒な女が、壁に寄り掛かり、腕を組んで立っていたことに、ついついため息混じりに口が開いた。

「お前かって……なあに？」 私じやあなにか文句でも？

「……別に」

「……まあいいわ。でも、まさかあの坊やまで連れてくるなんて思わなかつた」

「坊やも何も、お前と同い年だろ？」

「ほんと。同じ年には見えないわ」

ため息混じりに言つてこの女を。じろりと睨み付ける。

「手を出すなよ」

「あら、それははどうちこ？」

「……」

「フフ。安心して、力ではどうちにも適わないの」

薄くほほ笑みながら、壁から背を離し、不意に手を触つてきた。

「どううな」

そう答えたあと、反応が遅れて手を振り払つた。

舌打ちが響く。

「裏切りの相澤。可愛そうに真相を知らない子供は、守られているのか敵視されているのか理解できていない」

「つるさい。勝手に心を読むな。」

触れられた場所を、こじこじ汚れを取るように擦り取つてゐる。

「なにもつけてないわよ」

「学校とは性格かわりすぎ」

「裏表があるほうが好まれるわ。でもあの小さいまつは、警戒心あるわね」

「え？」

「放課後、ぶつかつたように見せて少し話したのよ。運悪くぶつかった時間は短すぎたわ。しかもそれから触れようとしない。またく、誰に仕込まれたんだか」

ひどく悔しかつたようで、親指の赤く塗られたマニキュアの爪先を、ガリッと前歯で噛む。

「接触したのか」

「ええ。何か問題でも？」

「……何かわかつたか？」

「言つたでしょ？ 時間が短かつたって」

「……」

「上にはどう報告するつもり？」

「“何も話しませんでした”」

「つづそくわ……」

「お互い秘密を持つのが、公平な相談ができるつてものでしょ？」

「……つてえ」

夢から田が覚めたように、不意に田が覚めた。

覚めた場所は、はじめてみる光景だった。

薄暗くて、地下というイメージをもたらし、声の響きそうな鉄の

壁。いや、コンクリートだらうか。

両手両足は何かで壁に括られている感がある。

「ど」「じ」「こ」「腹イテ」「」

ずしりとした痛み。

今ならはつきりわかる。あの時、殴られたのだと。

「誰かーいないのー?」

いつだつたかも、目が覚めれば知らぬ土地であつたことがあつた。しかし、あの時にはこんな不安感は感じなかつた。むしろ、ホッと少しだけ安心していた氣もする。

あの時と大きく違うのは、今の状態を説明してくれる人がいないこと。

目が覚めたとき、誰かがいてくれるというのは、安心できる。今は、すごく不安。ただ、目を閉じれば山田くんがいてくれる。あの時にはなかつたことだ。

「その声……泣か!？」

「え……あ、杵島!？」

思つたとおり声は響く。

本当に杵島のところに連れてきてくれたのか。でも、俺のところから、杵島の姿は見えなかつた。

「なぜ泣がここに?」

「杵島だつて……つてそうじゃなくて、杵島無事!/?怪我とか……」

「大丈夫大丈夫。なんにもされてないよ。泣こそ……なんか脅されたり暴力ふるわれたりしたんじゃない?」

「脅されてない。俺が杵島のところに連れてけつていつた。でも拒まれ」

「拒まれた?」

「うん。で、駄々をこねたら腹殴られて氣付けば、こい」

「」

「でも拒む理由は何? あいつは何を考えてここに閉じ込めてるわけ?」

「さあな。それがわからんねえんだよ。とくに暴力で何かを言わせようとか、何かを盾に脅してこねえから手の付けようがない。だから向こうの欲求がわからない」

「なら、ただ解放されるのを待つことしかできないってこと?」

「いまのところな」

「そつかあ」

相澤の思考がわからない。

それは、杵島も同じこと。

「杵島はさ、どうやってここに連れてこられたわけ?」

「相談したいことがある。ここや電話では話しにくい。ついてきてもらえないか」

「え! ? それにノコノコついてきたっていつのか! ?」

杵島にしては、あまりにも考えが浅はかすぎる気がした。

「お前に言われる筋合はない。俺の場合は、相澤が何かを隠しての真相を明らかにしたいから来たんだ。罵にわざと引っ掛かっていることくらいあいつにだって気付けることだ。だから、あいつを通じてでもお前に気付いてほしいから、あんなにも薄情だと責められるメールを送つたんだ。お前なら、あのバカをストーカーしてでもここにこつそり来てくれるかと思つた」

「……」

呆れた口調で話す杵島の言葉で、その手があつたと納得してしまつた。

実際特別な考えがあつたわけではなかつた。でも、どうにかしてでも、助けたかつた。杵島も、相澤も。

実際、ここまでこつそりこれたとしても、杵島の手錠はどうする? 今自分の手を括つているものすら外せないと言うのに、他人のなんて無茶だ。

カギがあるわけでもなく。

「杵島、肩凝らない?」

「話をえたな? 凝るさ。凝つて血液すら回らなくなりそうだよ

「どうすればとれるのかな?」

「カギだな。欲を言えば……」

「言えば?」

「……力だよ」

「腕力!?」

「ばあか! そんなの、俺でダメだつたらお前も無理だろ」

「ひつひどつ!」

わかつていた。

杵島が言う力といつものは、俺たちに特別備わつた、“力”的であるところのことが。

「ちょっと眠いし、悪いけど少し休むね」

「おまえに」と……いや、今のうちに休んでおきなさい泣ちゃん

「山田くん。最初の大仕事、頑張りうとは思わない?」

『大仕事……か』

「うん。眠れる獅子にならうとおもつて」

山田くんも呆れていた。

そんなの覚悟のうえだ。

深紅の髪が、ふわりとゆれた。

風ではない。ふらりと山田くんが「う」といたからだ。

『ここで力を出したら、眠れる獅子ではないぞ?』

『おっやあ? 山田くんなにか勘違いをしているよ?』

『……そのしゃべりかた、気持ち悪いからやめてもういたい』

「ええっ。わかつたよ」

『で? 間違いつて?』

「眠れる獅子はね、仲間がピンチな時に目が覚めるんだよ?」

『ピンチも何も、今はお前がピンチなんだろうが』

説教じみている事を言つてゐるくせに、表情はめずらしく、やわらかくて楽しそうだった。

鉄は極度の高熱で溶けるらしい。

力を使つたことのない俺に、そこまでの熱を放出する自信はない。でも、できるできないと、自信とでは話がかわっていく。

そんなきがする。

その中でも、目を瞑つた。

やり方は知らない。山田くんの本名も知らない。力を使つたあと、お兄さんがどうなるのかわからない。でも、今すぐそこにいる親友すら助けられないで、兄さんがどうのこうのといつてはいられない。昔に見た炎の夢。その炎を見つめていると、文字にかわつてゆく。「山田くん……いや、ラスティカ。一つ助言をしていただきたい」「助言を? ふん。そんなのいらないだろ? 今のお前には」「今俺には?」

『お前は、一度レベルの高いものを身近で見てはいるはずだ』

「あ……えつそれだけ! ?」

『ん? 自信ないか?』

『自信はない。でも、できる気がする……』

『それで十分。力に理屈なんて必要ない』

「……不親切!」

『ありがとう』

『誓めてない!』

あの日、麻紀と兄の力を見た。

自分の持つている力の手をかかげたあの姿。

再び目を閉じると、俺ではない違う人の呼吸が聞こえる。いや、

感じ取れる。

ゆつくりと、その呼吸にあわせていくと、重い何かが左手にこめられてゆく。

こつもとは違う熱さが、左手に感じられ、一緒に括られている右手にもその左手の放出した熱を感じる。

(熱い……)

考えてみれば、鉄を溶かすほどの中熱を、普通の人体にもかける
ということは、かなりの負担だ。

骨も溶け、使い物にならなくなってしまうのでは?

『余計なことを考えるな!』

その言葉に、ビクッと体が震えた。

『俺を信じろ……』

「うつ……ラスティカを……? うん……」

きっと、この力はラスティカだろう。

ラスティカであれば、きっと俺が深く傷つくことをしない。もし、
使い物にならない体になるようなことだとわかつた時点で、止めて、
力を貸してくれることはなかつただろう。

「うん。ごめんラスティカ」

方法を変えた。

太い手錠を壁とつないでいる鎖を、器具用につかむ。
まずは左側から。

鎖は、手錠よりも細い分、すぐに溶けるような気がした。
握っている鎖が、だんだんと薄く、細くなつていいくのがわかる。
だんだんと細くなり、左手がついに宙を泳ぐ。

肩の力が抜け、そのまま重力に負けてぶらりと下を向く。

(熱い……)

からだすべてが、熱にやられて汗だくになる。
相澤がくる前に、すべてを解く必要がある。
少なくとも、自分だけでも。

運がいいことに、足は地面スレスレ。落ちることになつても、問題はないだろ？

足は、手首に付いている、太い手錠のような鉄が、壁にぴつたりとくついている。根元を溶かせばどうにかなるだろ？

少しだけやすんでから、右手首をつなげている鎖を溶かす。

しかし、まだ溶かしきれていない今、不意にあることを思つて止めた。

(ヤバイ……)

両手を自由にしてはいけないことに気が付いてしまった。

それは、両手が自由になることで、ぴつたりと壁にくつついている状態の両足に負担がかかるし、しゃがむことができないとなると、足首に触ることはできない。

まさか、ここで大きな壁にぶち当たるとは思わなかつた。

(どうすればいい……)

兄みみたいに、炎を放することさえできれば、片手を手錠にかけてバランスをとりながら可能だが、離れた場所でそれほど熱を放熱することは、いろいろとリスクが高い。

もし外してしまえば、火事にもなりかねない。

(どうすればいい……)

ギュウッと目を瞑り、ラスティカを呼ぶ。

『この建物は、コンクリートでできている。木造ではない。それと、お前の熱はお前自身には熱いと感じても、それなりの耐性がある。鉄を溶かす程度の熱で火傷はしないだろ？』

「うん……わかった」

『ただ、問題がある』

「え？」

『放出するには、それ相応の振りが必要だ』

「振り？」

『あのきょうだいがやっていたのを覚えているか？』

「うん」

『もともと放出は慣れが必要だ。初心者にしてみれば難易度は高い。大きいものを出すのと同時に、それ相応の大きな振りが必要だ。』

あの時、二人はそれぞれの振り方で炎を出していた。

イメージするなら、遠心力を使つたようだ。

「なら、何度も高温の熱を振らなきゃいけないわけ？」

『そういうことになるが、経験を積めば、放出した炎をあの二人のようない操作することもできるかもしれない。だが、今のお前に経験を積ませる程の時間はない』

「うん」

『一一つ、二三つの難易度の高いものを、初心者にいきなつやらせる』
とが不安だが

『やつてみるや……やらぬいで無理だなんていえる時間はない』

再び左手に集中し、ラステイカの呼吸を確かめる。
手に絡み付く炎。

きつと普通の人が触ると熱いのだろうが、今の俺の左手には、熱くは感じられなかつた。

温度なんてわからない。

ただ、がむしゃらに近い感情のまま、その炎を足首と壁のかすかな隙間を狙つて投げた。

しかし、うまくはいかない。

振つた瞬間、少し離れた火がすぐに消えてなくなつた。

でも諦めることはしたくはない。

何度も何度も繰り返す。

何百メートルも、全速力で駆け抜けている気分で、すぐに息はあがってしまいます。

(くそつ……)

落ち着け。落ち着け落ちつけ落ち着け……。

そういう声が聞こえてきた気がする。

いつたん手を止め、いきを整える。

汗がダラダラと流れているのを拭き取ることもしない。

あの時、あのきょううだいはどつしてたか。自由自在に操り、楽ししそうだった。

いま、自分に足りないものはなんだろつか。

楽しくすること? しかし、今の自分には、乐しがれるような気分ではない。

汗にも似た涙が頬を流れる。

「ちっくしょつ……」

なにもできないのか。ここで落ちぶれてしまうのか。

人一人助けることができないくらい、自分はひ弱な存在だったのか……。

「沚……もういい……」

「まだだよ……左手は外したんだ」

頑張つていることに気付いたのだろう杵島が、そう慰めてくれる。でも、まだ見つかったわけではない。

あの兄弟にできしたことだから、俺もいつかできる日がくるかもしない。その日を、ぜひ今日にしてみたいといつ、好奇心もあつた。

「でも……」

「大丈夫！ まだ見つかったわけじゃないんだ」

「……そうか。すまない」

すまないと謝る杵島に、むしろ俺から詫びを入れたいと言い、そうになつたのを口閉じたときガチャリと言つ音がした。

誰かがこの空間に入ってきたのだろう。

コツツコツツと床を靴がたたく音がする。その音は確実に近づいてきている。

無駄にでもごまかそうと、ぶらりとぶら下げていた左手を右手の後ろに重ね、あたかも括られている振りをしてみせた。

足音は、目の前にとまる。姿は、相澤だった。

「具合はどう？」

「ボチボチかな」

「そう」

「相澤。出来れば杵島の姿が見たい」

「仲がよろしいことで」

「だつてオレらの仲だし」

少しだけ嫌味っぽく口を開いてみた。すると、そこに何を突っ込むこともなく、視線は俺の両手首へと向かっていた。

「……一応努力はしたんだ？ 力、開放しちゃつたんだ」

「ダチがピンチだし」

「自分が来たいつていつたのに」

「来ても杵島もお前も助けられないんじゃ意味がない」

「じゃあ帰してあげようか?」

「杵島もお前も帰るなら帰る。俺だけ帰るのはできない」

「それは無理」

「なんで」

直球的に言つて云葉は、その俺の質問にレッタつこととつた。

「時間がないんだ」

「時間?」

聞き返すと、答える」ともせずに、牢のカギを開け、すぐそこまで近づいてきた。

カギを取り出し、両足を自由にして、すぐに右手首も自由にする。

「あつ相澤?」

解放した俺を、殴られる前のよつぱんタつと体を近付けた。

そして、あの時のように、ここまでも泣いてなくなりそうな声を耳に残した。

気付けば、田を見ませいつもみる景色。血塗だった。

あれは夢だったのだろうか。

どこから、夢だったのだろうか。

夢であつても、経験したことすべて、覚えている。

はじめにバカ野郎と囁いて、最後に「ごめん」といつた相澤の言葉。

あれらがすべて嘘だとは思えない。

体を起こし、携帯電話を探す。

その時不意に気付いた。

布団にはかぶらず、あの時の服のままだ。とにかくとは、あのまま相澤がここまで運んできたといふことだらうか。

杵島をどうするつもりか。

あそこはどこにある場所だつたのか。

相澤の目的は何か。

結局何も聞けずにここに戻ってしまった。

朝日が眩しい。

母さんはどうしたのだろうか。

夜おそくまで帰つてこなかつたはずの俺を怒るだろうか。

とりあえず服を着替えて階段を下りていく。

母さんはいるだろうか。

特にテレビの音や、料理をしているような音も何も聞こえてこない。

力チャリと戸を開けても、誰かがいる様子がない。

台所のテーブルに、何か紙切れがあるのに気付いた。

とても見つけやすい位置で、いつも母さんが夜いなこときに置いている紙に似ている。

少し急いで近づいてみるとこつかれていた。

「親戚の家に行つてきます。帰りは明後日になるから

と。

一昨日は置かれていた。

昨日の朝は母さんがいたし、帰つてきてからは「」に立つていな
い。

昨日のうちに出かけたといふことは、帰つてくるのは明日。今日
いなくたつて問題はないみたいだ。

でも、杵島がいる場所がわからない。

メールも誰から来ている様子もなかつた。

「とりあえず学校……かな？」

行つてみれば、どうした?と笑つて迎えてくれる「人がいてくれ
たりして。

さつといまいり、ラスティカは、馬鹿馬鹿しいと笑つていてるのだ
う。

（助けようとしてるのは悪いことなのかな?）

いつもの待ち合わせ場所まで行くと、相澤だと思われし者が立つ
ていた。

思われし者。

昨日とは姿が違う。

「相澤……?」

もし、今の相澤の姿ではなければ、杵島をあんな状態にしている
相澤を無視して学校にいこうとした。
でも相澤は親友だ。

この、親友の顔に、湿布だらう者が右頬に。左頬の口元には絆創
膏がはられていた。

昨日はこんな姿ではなかつた。

よく見てみれば口元も切れていてる。

「……声かけてくるなんて思わなかつた」

「かけるつもりはなかつた」

「学校に行くつもりではあるのだろう。いつもどおり制服だった。

「そうか」

「相澤は一切こいつを見ない。

よく考えれば顔を合わせにへつ。悪く考えれば、合わせはせぬつもりがない。

「その怪我、どうしたんだよ」

「お前には関係ない」

「相澤はかわりすぎた。

今までの相澤は、こんな冷たい口調は使わなかつた。

こんな相澤にしたのは誰だ。

もしかしたら、今まで無理をさせていたのだろうか。

「関係ならあるね。俺はお前の親友だ」

「親友？ 昨日、あんなことした奴を親友なんて呼ぶのか？ お前

は

「あんなこと？」

「お前を殴つたし牢屋にいた」

「何があつたんでしょう？ それに、俺は帰してくれた。あの時点で、俺を帰すのは結構リスクがあつたはずだよ。俺が誰か、助けを呼んでいたら？ 騒ぎを大きくされたら、相澤だつて動きにくくなる。どうして俺を帰した？」

「学校に行こう。遅刻する

「……」

答えにいくのか。

何もいわずに足を進めた俺の一歩後ろを歩いてくる。

「で？ その傷は杵島にでもやられたの？」

「いや」

「杵島はどうしてあそこに閉じ込められているのかわかつてゐるの？」

「知らないはずだ」

「……」

知らないでつれていかれた杵島に、少しだけ同情。

「えっとお……確かに記憶があつてれば、この駅で降りりれば着くはずなんだけどお」

ある紙を見ては、駅の出口付近でまわりを見る。

「こんなにも建物に囲まれた土地なんて、本当に何年ぶりだろうか。ましてや一人だなんて。

「えっと、今の時間なら学校だよね。えっと、学校の場所はつと……」

紙を裏側にすると、地図が書かれている。

「近くまで行つてみよう」

慣れない土地に来て、慣れない道を通つて、少しだけ恐れながらまわりを見回して。

あと何分で着くのか、あと何歩歩けばいいのか。

「あの人も、こんな気分だつたのかなあ」

不安だけじょつと楽しい。

都会の匂いは、地元に流れる香りとは程遠い。

「サフイン。ここがあの人の生きている場所だよ」

白い雲のうえに青い空が覆いかぶさつている。

「空はかわらないねえ」

『麻紀。あんまりうえ向いて歩くと転ぶよ』

「大丈夫だよ」

行き先は決まっている。ただ、連絡の取りようがないから、いきなり来た感じになつてしまつ。

私の兄はもういない。

だから、一つの重みが消えたと思つてほしい。

あの海はきれいなままを保ち続けるよ。だから、安心してそこから離れたよ。

すべてあなたのおかげで、悩むことも苦しむこともしなくて済んだよ。

だから。だから、次はあなたの近くにこさせてもうえませんか？ 私にできることは何でも致します。

そう、言こに来た。

調べた学校の位置と、今いる位置は間違いない。
確か、近くに公園があるはず。

授業がおわる時間まで、あと一時間ほどある。
歩き疲れもしているし、座る場所がほしい。

「あつた」

公園をみつけ、ブランコに腰を下ろした。
子供の頃、数回だけ記憶にあるブランコ。
あまりブランコや滑り台等に興味を持たない、大人にとつては面倒な子供だつただろう。

つながっている鎖をつかみ、両足をのばして下を見る。
子供用なのか、小さこ頃に座つたブランコよりも地面に近い気がした。

不意に自分が影に入る。

「こんなところで何してるんすか」

聞き覚えのある声が、頭上から聞こえてくる。

すつと顔を上げてみれば、そこには見覚えのある顔。そして、探していた顔だつた。

少し、息を切らしていろ。走ってきたのだろうか。しかしこつた

いなせ?

「沚くん! ビーハー……」

思つてた時間より全然早いものだから、話したい言葉がまとまりない。

「ビーハーは、この台詞です! でも、久しぶりに会えてうれしい。麻紀さん」

「つづくとほほえみ、隣のブランコに腰を下ろし、一息ついていた。

「大丈夫? 走ってきたの?」

「ちょっと逃げて……でも、麻紀さんがいれば逃げなくてすむかな」

「逃げるつて、何から! ?」

「友人を拉致つた友人」

「は?」

「まあ、もうおつてはこないだろ? それよりさ、元気にしてた?」

なんだか、沚の印象がかわった気がした。

前はもつと、何かに追い込まれていて、それに精一杯で、他に手を付けられる余裕がない印象を持っていた。でも今は、その追い込まれているものが、もつと違う何かにかわったかのよう? 、すつきりした表情をしている。

「ええ、おかげさまで」

「そう。よかつた。えつと……お兄さんは?」

「お兄ちゃんはもういないよ。沚によろしくつていつて消えていつちやつた。あんなに清々しい顔をしてたお兄ちゃん、久しぶりにみたよ。何の後悔もなかつたみたい。沚がいるから、私を置いていつても安心できる一つで、言って私のところから消えちゃつた」

「……そつか」

「うん。不思議と怖くなつた。優貴を失つたときはあんなにも怖くて、苦しかつたのに、どうしてだろ? 全然怖くなつた。たぶ

んそれは、あなたがこの世界のどこかにいるって、わかつてゐるから

……」

「そんな……オレが何かしてあげたみたいな言い方するなよ。寧ろ、麻紀たちがオレを支えて、助けてくれていたんだ。何かしてあげたいほどに」

「なにか、してくれるの？」

「ああ。してあげたい」

「だったら、お願ひしてもいいかな？」

「なに？」

お願ひしたいこと。

いっぱいあつた。大きく分けて三つ。

笑顔でいてほしい。

一緒にいさせてほしい。

そして、不穏な動きをしている人を、共に止めたい。

不穏な動きを感じたのは、だいたい沚が私たちの前から姿を消したあとくらいだった。

お兄ちゃんには、何を心配することもなく、私の近くにいてほしかつたから何も言わいでいた。

感じ取ってくれたのは、私の故郷にある海たちだった。

あの海には、何にも汚されたくなかつたから、私の水が少々含まれている。だから、お友達みたいなものだつた。その、海が教えてくれた。だからここに来た。

その話を沚にすると、ピタリと動作を止め、驚いた様子で私を見ていた。

「その話、本当だと思つていいんだよな？」

「ええ」

「今、すごく麻紀が来てくれて安心している。あと、その話をしてくれたのも」

うれしそうな表情。

少しだけホッとした。なんだか、無事でいてくれたんだなって、いまさら安心している。

「なにかあつたの？」

「オレの親友が、閉じ込められてる。しかも、オレの親友に」

「え？」

「前に、二人こっちにおいて来たっていつてた二人。どうしてかはわからないんだけど」

以前、私たちのところにいたときだ。

「あいつらって言つてた人たちね？」

「ああ。一度オレも捕まつたんだが、何があつたのかオレだけ帰してくれた。もともとオレを捕まえる気は、あいつにはなかつたらしい。逃げろってさつき言われた」

「だから早かつたの？」

「うん。でも、何で逃げないといけないのか。何が起きているのか教えてはくれなかつた。逃げるといわれたつて逃げる場所は、麻紀たちのところしかないんだけど、そんなお金、既にないし」

「……ねえ、その捕まつたお友達、もしかして証を持つ者？」

「う、うん」

「あなたが捕まつたとき、そのお友達が捕まつている場所と同じだつた？」

「うん。でも姿は見えなかつた。どこかの地下みたいで、牢屋みたいに囲まれてて。見えない位置にいたけど会話はできた」

「他の人は？」

「いたのかな？ 声も何も聞こえなかつたから。潜んでいたことがないかぎりはいないと思う」

「そう……その、捕まえたお友達は力を持っているの？」

「あ……それは、うんまあ、力は持つているけど証はいないみたい」

「何の力か聞いても？」

「うん……水のはず」

「そう、私と一緒にね」

「うん。でもあいつは卑怯だ。力を使って盗聴した」

「水で！？」

「うん。雨を降らし、オレらに付着させて電話を盗聴。飲み物で水蒸気となり乾く前のかすかな水で増幅させてとかなんとか……」

（そ、そんなことまで可能なの！？）

私はあまり窮地に立たされたわけではないから、そのような実戦的に使われる力を使用したことはなかつたし、思いつきもしなかつた。

証を持つていらないものの、応用術。私にそのような力がなかつただけだらうか。

「そう……裏に誰かいる可能性もあるわね」

「誰か？」

「ええ。その友達と、裏で命令してる人の意見が一致して、メーリットのある行動を。でも、沚さんが帰ることを許されたのはわからないわ。捕まえるつもりがないにしても、きっと上の人にとっては、沚さんもいざれ捕まえろって言われているのかも」

「だから逃げろって？ その人とつながってるのに？ もしそうだとしても、逃げ続けるわけにはいかないんだ。友達……杵島が捕まつてる。助けに行きたいんだ」

気持ちは分かるけれど、きっとその捕まえたほうのお友達と、裏で命令している人との力の差は大きいだろう。

だから沚さんだけでも助けたかったのかも。三人の間に何があるのか分からぬ私がから言わせてもらえば、その人は、沚さんを助けたいのかもしね。

今、沚さんがその捕まっている友達を助けに行くのは危ない。捕

また側の友達の行為を無駄にすることかもしない。

「だから沚さんは逃げて？ 私はまだ顔は知れていないはず。 まずは私がその捕まつたお友達を助けに行くわ」

「どうやって！」

「捕まえたそのお友達と接触したいわ。 その友達の顔を教えてもらえないかな？」

「でも、 麻紀を危険な目に遭わせたくない」

「戦闘態勢にはならないように努力する」

「言つたことに悔いることはしない。」

「成功するかどうかは分からぬけれど、 危険は数ヶ所だけ。 爭いになる計画だけは立てたくはない。」

「力を使つことにはなるけれど、 お互い怪我をさせたくない。」

「でもどうやって？」

「それは、 さつきあなたが教えてくれたことを私が実行するだけよ」

「教えた……？」

「大丈夫。 捕まつた人を無事につれてくるわ」

名前は相澤。

性別は男。

身長は高め、 髪を伸ばすことはない。

写真とみれば、 すぐにわかるらしい。

登下校路を教えてもらい、 できるだけ不審がられない程度に、 周りを何度も見回す。

もしかしたら、 捕まつた、 杣島といつ友達のところにいつてしまい、 その道にはいられない可能性もある。

杣島というのは、 以前、 沢さんが目を覚まさないうちにメールが

来て、兄が勝手に見てしまった時の人だつたはずだ。

辻さんが捕まつたのは、その杵島という男の自宅前だから、また

そこにいるかもしれないということで、その位置も印してもらつた。

「ここからそんなに離れてるわけじゃなさそうね」

今のところ、下校中の相澤という男は見つからない。今から行つてみたほうが無駄足にはならない。寄り道をしているかもしないし、真つすぐ捕まえた場所に行つたのかもしない。

回れ右をするように、クルリと後ろを振り向くと、いつのまにやらその写真の男、相澤が見下すように立つていた。

「俺に何か用ですか？」

見下した状態で、微笑むその顔は、恐ろしく、口を開くことはできても、言葉が発せなかつた。

あれから学校には行っていない。

怪しまれないように、一応家を出で、いつもの帰宅時間には家に帰る。でも、私服で歩き回る。

そんな日が続いた。

学校に行くと、あの女に会うから。という理由ではない。学校自体違うから、会うことはないのだが。

歩き回っていれば、何かが分かるかもしれないなんて、甘い考え。滅多に行かない道や、確実道に迷っているだらうと自覚しても、焦ることなく思つがまま足をすすめる。

そんなある日、丁度変な空気の場面に出くわした。といつても、当事者たちには気付かれてはいないのは運がよかつた。

少しだけ立派な家の前で、男一人が言ひ合つている。

つこつこ身を隠せる場所に隠れてしまつ自分の氣の弱さ。

「どこにつれていったの？」

と睨み付けるように、背の低い、黒髪で、色々なところに友達いつぱいいますといわんばかりな、友達には困らないだらうタイプの男の子。いや、少なくとも俺よりは年上だらう。

「どうして疑うんだよ」

と、比べれば身長が高いほうで、少なくともいじめられるタイプではない、チャラチャラしていてもおかしくない姿の男性。

高校生だらう。睨み付けてきている背の低いほうの2、3歳上だらう。

「だつて、最近の相澤おかしそうだ」

「どんな風に？」

「前みたいな楽しさが消えて、すぱぱぱぱぱぱしてゐる。なにかに追い込まれてるみたい」「元気……」「元気なんか……」

「じゃあ言い方を変えるよ。最近の相澤は、あからさまに隠し事をしているつて顔してる」

「なつ……」

「ねえ相澤。杵島になんかあつたら、ただじゃおかないよ?」

きつと、話的に、背の高いほうが相澤で、つれて行つただか連れていかれただかした人は、杵島というのだろう。

「そつ……そやつていつも俺をのけ者にするのか?」

「あ?」

「いつもお前は杵島蠶原だよな」

「なにいつて……」

「いつつもそやつて杵島杵島つて……。そなつたのも、おまえがどつか遠くに行つてからだ!」

「あれは!」

「しかも、一人で電話で相談して言いたい放題言いやがつて……」

「相澤……確かに杵島とは電話をした。でもなんでそれを知つている? そういうえば、最近の杵島と一人で話すことが多かつたよなお前……お前だつて人のこと言えるのかよ

「何で知つているのか? 忘れたのか? 俺は水を操れるんだぜ?」

(操れるー? どうこういとだ)

「忘れてはいけないけど……それとこれと何が関係して……」

「あの日は雨が降つた。杵島が飲み物を飲んだ。それを言えばわかるか?」

「え……」

「……でもあれば、相澤も知らなかつたつて……じゃあその前のは故意的に……?」

「どつちも故意的にやつた。最初は、朝から降らせるつまりだつたから持つてきた。でも、

電話の日はあいつが遅ってきた。そこでいそいそ話してるのがきに

なつて、その時雨を降らせることを決めた。だから傘なんて準備はしなかつた。とりあえず、その雨におまえらをあてたかつたからな

「でも、雨にあたつてどうやって会話を?」

「雨を通じて盗聴。簡単なことだ。でも、水には流れがある。乾いてしまつたら終わり。だから、杵島の準備した飲み物に寄生した。杵島に付着した雨の水滴を落として飲み物に増幅。わかるか?」

「そんなことまで……」

(もしかして、ここつも渉みたいに……?)

水を操るとか寄生とか、なにを現実離れしたことを行つているのか。

もしかしたら、この人たちなら渉の力のこともわかるのではないか。渉が帰つてくる、その理由を。

「裏切つたの……?」

「裏切つた? ……まあ、裏切つたことになるのか」

「じゃあ、杵島とふたりつきりで話してた理由は? 僕に内緒で

「特にない。目的は、お前を一人にすることかな」

「杵島をどこかに連れていったのも……おまえが?」

「まあね……」

「杵島をどうするつもり?」

「さあ? ……どうしようかはまつちの勝手。教える義務はない」

「連れていくてよ。杵島のところに」

「……それはできない

「どうして?」

「どうしてもだ」

「……明日、学校には来るんだよね

「さあな」

「どうして? ……なんでそんなんなつちやつたの!?」

「かに頼まれたの? 首謀者はだれ」

「知る必要はない」

（あれ？ 途中から、目を見てない……）

いつからかは気付かなかつたが、すこく苦しそうな表情をして、必死に言葉をつないでいるように見えてきた。

相澤という男のほうが。

強気でいた頃は、目線をあまり外さずに話していたというのに、なにかきまづい会話になつたかのようだ。

「必要はないって……知る必要があるから聞いてるんだ！ 俺のダチ連れていかれて、はいそうですかつておとなしくしておと思つ！？」

「おとなしくしているのが懸命だ」

「俺さー、常識とか一力のこととか……、相澤や杵島達よりも知識がないのは自覚してる。でも、それに親友を助けることは関係ないと思わないか？ 今大事な人が、自分の知らない場所で、どんなことをされていてどんなことを考へているのかすごく気になる。俺たちが尋常じやないのは自覚した。だからこそ、俺もかかわりたい」

「かかわつてどうするつもりだ？ 力を使うことのできないお前は、ただの杵島のお荷物にしかならないかもしれないぞ？」

「力がないものは力がないなりに。力がないからこそできることを探すことだらう？」

（違う……）

力がないなら、引っ込んでいるのがいい。

もし、涉とこの人たちが言つてている力が同じであれば、力がないものは無理をする意味はない。

無理をすれば、力あるものが、力無き者をかばい、失つてしまつ

かもしけない。

渉のようになつた。

「頼むから……」

相澤といつ男が、弱々しい声を出したあと、小さい人のほうに足をすすめてきては、両肩をやさしく捕み、ピタッと体がくつつく。小さい人の身長差で、額がかるく相澤の右肩に触れている。

（耳元で何かをしゃべつた？）

さすがに何をしゃべつたのかまではまったく聞こえなかつたが、確かに何か話した気がする。

それを確認した瞬間、相澤の片腕が、ずしりとした衝撃をかけるように小さい人の腹に食い込むように見えた。

衝撃で気絶したのか、グラリと体は揺れた身体は、ガシッとしつかりした相澤の腕に納まつた。

その時の、相澤という男の表情は、すじく苦しそうで、なにか悔やんんでいるようにも見えた。

そつとお姫さま抱っこをするなり、どこかへ連れていこうとしている。

会話を聞いてしまつた手前、このまま家に帰ることはできず、気付けばその男を尾行していた。

男一人だけで、街中を歩けるわけではない。

できるだけ人通りがないところを歩こうとしているのか、もともと、人通りのないところに目的地があるのか。人通りが少ないというよりも、人とすれ違つことなく、相澤はある一つの店に入つて行つた。

目立つ飾りもなく、近くまで行かなければ店だとは分からぬじみなお店だった。

少しだけ中を覗いてみると、じみな割にお客さんだけは豊富らしい。この中に雜ざつてしまえば、探すのは一苦労。

喫茶店ではなく、クラブみたいな作りで、座るような椅子ではなく、丸い背丈にあうような小さめのテーブルが等間隔に並べられている。さすがに、中に入る勇気はなかつた。

ただでさえ、俺の容姿は中学生。入りにくい」といのうえない。「帰るか」

特に助けてやれそうもない。

深追いしそぎて、自分が危ない目に会うのもいやだ。それに、もしかしたら助けてほしいとは思つてもいないし、助けられないほうがいいと思っているのかもしれない。

へたに手を出して、「ゴメンナサイで済ませれる雰囲気でもなかつた。

回れ右をして、来た道を戻るつかと振り向いた瞬間。

「わつと……ごめんなさい」

真後ろに人が居たことに気付かず、ぶつかるところだつた。女人の人。

髪は長くて、軽くパーマが入つてゐるようだつた。クルクルというイメージを持つ。

顔もくつきり一重で、真ん丸な瞳に見える。

身長は高くも低くもない、160cmを超えてゐるだらう程度で、この店に来慣れている様子だつた。

「いいえ。中に入らないの？」

「あつ……はい。すみません」

こんなドア口で話し込むわけにも、不思議がられるわけにもいかなかつた。

すつと、女人を横切り、自宅だらう方向でも、迷うだらう違つ方向でもどちらでもよかつたから、とりあえずその場から離れることだけに集中した。

その女人が、その後どうしたのかは分からぬ。中に入ったのか、その場に離れたのかは。

「……怖かっただ～」

家に無事着くと、玄関で座り込んでしまい、今まで言ひ言えなかつたことを口にした。

別にそんな特別なことをしたわけではないのに、何かに緊張していく爆発しそうだったのを必死に抑えていたけれど。

「もう限界……」

（何で関わりそっただんだろ？……）

『関わらなければ楽なのに』

「え？」

不意にやさしい声が耳元。いや、頭のなかに直接響いてきた。姿の見えない何かが。

でも、俺の声に似ていた。

「涉……？」

『ワタル……？ ああ、おまえの片割れか』

「誰だよおまえ……どこのことね……？」

辺りを見回したが、どこかにいるところの気配はしなかつた。

「やべえ……俺相当きてるな」

額に手を当て、熱があるのかと不安になつてみる。

『おまえ意外とバカなのな』

「あーサイハイバカですよ。やばいよ俺、つこにおかしくなつてきたのか……自分の声が自分に話しあげてきてる」

あまりにも自分の声。いや、正確に言えば涉の声。

俺と涉の声は、特別違うところがない。だから、自分の声か涉の

声かは、録音しただけでは違ひが分からぬ。それくらいわからない。

何も考えないようにながら、上着を脱いで放り投げ、自室へ入つてベッドにダイブした。

(明日もこんな感じだったら病院行こう)

目を瞑り、そのまま夢の中へと落ちていく。

「わた……る?」

『だつたらつれしかつた?』

『……微妙』

『へえ、意外』

『さつきから意外意外つるわい』

声の持ち主は、俺の夢にまで現れた。まったく、不謹慎この上ない。

姿は、渉そのものだつた。声から姿まで渉だなんて。

ただ二コ二コとほほえむ姿の渉。

『怒りやすいっぽいのは知つていたけどな』

『だからうるわいって! 姿や声は渉でも、性格はまったく違つて

ありがたい』

『感謝しろよ』

「でも、姿や声が似てるのは許せれないな

『知つている』

「なに? 知つてゐる知つてゐるつてさつとからー 僕の何を知つてゐるつていうんだよ」

『すべてだよ』

ただ微笑んでいた渉の顔が、少しだけゆるみ、なにかを企んでいるような意味ありげなほほ笑みへとかわった。

そのほほ笑みは、背筋をゾクッと寒氣で震わせ、一步退寄せた。

「どうして？」

『ずっと一緒にだからだよ』

「……そう」

『驚かないんだ？』

驚くべきなのだろうけれど、なぜか納得させられた。

あと一つ理由を述べよといふのは。

「所詮夢だ。夢なんかに驚いてたまるか。どうせ日が覚めたら全部

忘れる」

『それは悲しいことで』

「泣いても胸は貸してやらねえぜ？」

『違うよ？』

「……は？」

につこり笑顔で首を振る。

何がどう違うのかと、ついに思考が停止した。

『悲しいのは君だよ』

「はあ？ てめえなにいって……おいー？」

渉の姿が、どんどん遠くに離れていく。

足は重たくて動かない。

必死に右腕をのばしても、伸ばし切れていなこよつた間に囚わ

れ、もつともつと奥にと、必死に伸ばす。

「いやだ……いやだわたるー！」

怒鳴った瞬間、自分の声に驚いて目が覚める。

俺は、必死に天井に向かって右手を伸ばし、頬には涙が流れていった。

伸ばした手をゆっくり自分のもとに戻し、力なき声で言つ。

「ほら……何の夢だったのか忘れちつたよ」

戻した右手で、グイッと涙を拭いとる。

「……涉……」

それから数日もしないうち、再び道に迷つた俺がいる。

特別何を考えることもなく歩くのは好きだ。だから自分の名前も嫌いじゃない。

俺と涉の名前の由来は、『すべての困難も、二人一緒に涉り歩く』だそうだ。つまり、今の俺にはどんな困難も、涉り歩くことができる。

涉がないから。

もともと、『わたりあるく』は、『渡り歩く』と書く。しかし、親は『交渉』の方を持つてきた。子供の頃に聞いた理由は、難しくて理解はできなかつた。

今は、意味はわかつても理解はできなかつた。

『世の中は、交渉して成り立つていて、不成立したものは必要ない。だから、繋ぎ歩くだけじゃなくて、ちゃんと話し合つて、二人に不利益のない方法で歩んでほしい』

という母の言葉は、小さい俺には理解できない。

今の俺は、話し合いなんかで世の中がうまく進むわけがない。
そう考える捻くれものになってしまった。

「俺に何か用ですか？」

不意に耳に飛び込んできた。

そんなに張り上げた声を出した感じではない。ただ低く、顔は笑顔だが、心の奥底では煮え繰り返りそうな怒りを見せている。そんな声だった。

もう少し軽い感じであれば、いつだかに聞き覚えのある声だ。
こここの角を曲がれば、その声の持ち主に見える。

ゆっくりと覗き込んでみると、そこには、以前言い争いをして、相手を連れ去つていった男だ。たしか、相澤といつていたはずだ。
その目の前には、いきなりの出現にびっくりしているのか、まつたく動ける様子がない女性。

髪はストレートで、もともと出しゃばる性格ではなく、おじとやかなほうだろう。

何かのゲームか何かで負けたかしたか。無理矢理そこに来させられました。といわんばかり。

「ま、ここはゲーム感覚で……」

とつぶやき、俺はその女の人の左側に立つ。

「お姉ちゃん！ 次はここで迷子になつてたの？ 探しちやつた。
初めてきた土地なんだから、あんまり一人で出歩かないでつていつたのにー」

見た目を利用して、にっこり笑つて子供っぽいしゃべり方をして、女性の手をつかむ。

もしここで話を合わせてくれば、助けがあつて正解な印。
もし茶化すようなことを言つてきいたら、人間違いでしたで十分だ
ら。

一瞬女性は困つたような顔をしたあと、それでも助かつたような安心感を持っていた。

「あつうん。助かつた。かえろつか」

「うん。お兄さん、もしかしたらおねえちゃんが何か失礼なことしたかな？」

「いや……」

「じゃらかといえば、相澤といつ男の方が驚いているようだ。」

「そう。よかつた、ではバイバイ」

言いながら俺は女性の手をひっぱり、相澤といつ男の右側。向かって左側を駆けていく。

ひっぱられたことにびっくりしたのか、女性は軽く相澤にぶつかった。その詫びを軽く言つなり、すぐに俺に着ててきた。

（迷子は俺なんだけビ……）

勝手に迷子扱いしたことに怒つていいんだろ？

それが怖くて立ち止まることができない。でも、いつかは解放しないきや。されなきや。

近くに公園を見つけ、そこベンチに座り込む。「えつと、ありがとうございました」といったのは女性が先だった。

謝りうとした矢先にいわれ、さすがに驚く。

「……余計なことしゃがつてつて怒らなこいの？」

「え？ そんなこと言いません。本当にどうしようか困つたし、本当に迷子になりかけてたし……」

「げつ本当に迷子！？ ジヤあ迷子回十でびつたりじやん」なんて笑つてしまつ。

中学生ではないだらう女性が、まさか迷子になつてこるのかと、少しだけバカにしそうになつたのを食い止める。

「はい……つて、あなたも？」

「まあ、そんな感じ」

「でも、どうして助けてくれたんですか？」

「いや、あの男の人がね……」

「……知り合い？」

少しだけ女性の眉間に、皺が寄つたのを確認した。

やはり、あの男……相澤という男に何かが関係している女性なの

だろうか。

「知り合いではない。顔の面識がなかつたからこそできた逃げ方だつたしね」

「そう、なら何か知つて？」

「ん……確実的な証拠はないんだ。遠目から見ただけだから、見間違えとか勘違いって可能性もある」

「構わないわ」

力強い返事。

この人も、誰かさらわれたという事が起きたのだろうか。

もし、相澤が悪いことをしているのではなく、良いこと。もしくは、正当防衛であれば、俺は敵にまわってしまうことになる。敵に回りたいわけではない。ただ、あの時の会話を聞いたときは、悪者に聞こえただけだ。

「あの人は、友達だろう人をを氣絶させてビックに拉致るようなやつだぜ？まあ、それが良いこととしたのかどうなのかは知らないけど……」

「……！あなた、ちょっと今時間あるかしら？」

「え？」

麻紀と別れてから大分時間が経つた。
ずっと同じ場所にいるわけにはいかないだろうと、とりあえず危

険承知で自宅へと帰つた。もちろん、麻紀にもこの場所を教えておいてある。きっとこの場所に戻つてくるだろう。

確信があるこの怖や。

きっと俺の弱点はここにある。

すぐ人に信じてしまう。

口では信じていないようなことを言つていたとしても、心のどこかでは信用し、頼つてしまつ。

「それが怖いんだよな」

ピンポーン

一つの呼び鈴が鳴り、ほらねと口元が緩む。

「はい」

リビングにいた体を動かし、玄関の戸を開けると、麻紀と状況がよくわかりませんと顔にそのまま書かれているような、小学生から中学生くらいの背丈をした男の子が一人、立つていた。

しかも、状況が読み取れていないうえに、俺の登場にも驚いてい るようだ。「えつ」と小さくつぶやくのが聞こえた。

「麻紀？ その子は？」

「事情聴取しにつれてきた、重要な参考人。みたいな感じです」

なんて苦笑する麻紀の顔は、特別脅されたり、危害を加えられた様子は見当たらない。

男の子も、どちらかといえば無理矢理着いてきたといつよりは、無理矢理つれてこられたほうに似ている。

あともう一つ感じたのは、いつだつたかの雨の日に、転けていた女子高生を見たときみたいに、この子もどこかで見たような気がした。

「とりあえず入つて」

と家のなかに招き入れる。

この子なら、どうして俺の記憶にいるのかがわかる気がした。

「麻紀、怪我とかは？」

「全然平氣ですよ。すべて穩便に済ませるのが一番ですからね」

「無理矢理つれてくるような奴が穩便つて……」

ソファーに座り、にっこりほほえむ隣で、歩と召乗つた男の子がコップを持ちながらほそりと突つ込んだ。

聞いた話によれば、この歩くんに困つてこよのじを助けてもらつたらしい。

「ねえ、歩くんさ、一回でも俺と会つたことある？」

「は？ まあ、こちおう俺は遠田から見てるけど、確かあんたはこつちには氣付いてないはずだから、ひつやつて面を合わせるのは初めてなはずだけど？」

無理矢理つれてこられたのがそんなにいやだったのか、ムスッとした表情は絶えることはなかつた。

「遠田で？」

「あんた、相澤とか言つ奴に、一回でもやられたるんじやない？」

「え！？ うん。相澤を知つてるのか？」

「よくはしらん。ただ、あんたがその相澤言つ奴に誘拐されるのを見ただけ。まさか、助かつてるとは思わなかつたし」

「あの場所にいたのか！？」

「ああ。どうすれば良いのか、助けてほしいのかもわからなかつたから、着いていくだけ着いていったけど、まあ店の前で断念したつてところだよ」

「店！？ それはどこの」

「口では言いくつ。住宅地に地味商売してますよつて言わんばかりの店だった」

もし、そこからさらに移動するところとさえしていなければ、

あの地下は店の下だったということとか。

「でもおかしいとは思わないか？」

「辻さん？ おかしいって……」

「だつて、店のなかに気絶してゐやつ抱えてなかに入つて、そして俺を閉じ込めた。客の一人くらい、その姿を見て不思議に思つたつておかしくはないはず」

「もしその人たちは、『お密さん』じゃなくて『仲間』だとしたら？』

にやりとほほえみ、歩がそうじつた。

「だつたら納得はいく。客が何人くらいいたかはわかる?」

「地味なくせに結構お密さんはいた……あ」

ハツと何かを思い出したかのように、目を見開き、口をぽかんと開けた。

「もしかしたらやばいかも。あの場所はなれるとき、知らない人と顔合わせたんだ」

「どういう人?」

「髪は長くつて軽くパーマが入つて、クルクルといつイメージで。顔もくつきり一重で、真ん丸な瞳身長は高くも低くもない、160cmを超えているだらう程度の女性」

必死に思い出そうと、田をぎゅっと瞑り、無理矢理単語をつなげるようになり、口を開いた。

それもどこかで聞き覚えがあつた。

「ちょっと待つた。少し眠つてもいいかな？ 麻紀、五分経つても起きなかつたら無理矢理起こしてもらえないかな？」

「……？ わかったわ」

「あいつと会話する」

「できるようになつたのね」

「ああ」

「は？」

会話がわかつていな歩の半分裏返つた声を聞いて俺は眠りについた。

「ラステイカ！ 教えて！ さつき歩が言つた特徴を思い出して…あと、歩と『』であつてゐるのかも」

『なんだいきなり呼び出して…歩といつ男の記憶はないけど、さつきの特徴は、前來た転校生とまったく同じだな。まあ、女といつのはほとんどクルクルしてて160前後だろ？』

「……でも、俺はあの女には触れてほしくなかつた。それに歩の言つた女。きつと同じ奴だ…ありがとラステイカ！ 愛してるつー！」

『やめてくれ…』

「歩が見たそいつ……その女、もしかしたら敵かもしれん」

自力で目が覚めると、目の前には、フライパンとお玉を構えた麻紀が、少し残念そうに立つていて。そのおかげで目覚めぱっちりだ。

「つてことは、店のなかにいる奴らつて…」

「ああ。歩が言つたとおり、お客様なんではないらしくな。にしても麻紀、頼もしくなつたな」

「まあ、あれから何もなかつたわけでもないからね。いなくなつてから数日、短かつたわ」

「そうか」

「ちよつと。勝手に呼び捨てにしないでくれる？ そして、いきなり話しそうでないでもらいたいなあ」

話がかわつたことに対し、プウッと頬を膨らまし、顔をフイッヒと背向けた。

麻紀と顔を合わせ、あまりにからかい甲斐があることに眞付いて、ニッヒと微笑み合つ。

「「めん」「めん。ところで麻紀、『あれ』はどうなった？」

「……んー。初めてやることだから、微かにしかわからない。いや、全然わからないに等しいわ。歩くんを頼つたほうがよせやつだわ」

「そうか」

頼んでいたのだって、急なことだつたし、初めてなことならばなおさら仕方がないだろ？

しかし、歩と「この田の前の男だつて、あまり覚えていないだろ」とことをいつていたから、道順を書いてもらうとこうよつは、連れていつてくれたほうが早いだろ？ しかし、もしその道程で前にあつたクルクル女と遭遇したり、歩の顔がブラックリストかなにかに書かれ、相手の仲間に知れ渡つていたら。

無事、帰すことができない可能性もある。一度ならともかく、この先も巻き込んでしまうかもしれない。

「歩くんは俺たちに手を貸してくれる気はないかな？」

「手を貸すつて、別にそこを教えればいいんだろ？？」

「なにも、難しいわけではないと、胸を張るよつて囁く。やのノリが一番怖い。」

「そりなんだけど、覚えてるかな？ 書いてほしいんだけど」

「はあ？ 歩いてみねえとわからんないし。別に連れていつてやるよ？」

「？ なに？ なんか問題でもあるわけ？」

「……もしかしたら、君を巻き込んでしまい、危ない田に遭わせるかもしれない」

力を与えられていない、しかも年下の子に“もし”といつ危険を負わせたくはない。

ジツと見つめ合ひの俺と歩。

（わかつてくれるかな…）

「危険……危険なら、余計に関わりたいかもしれない」

「はああーー？」

あまりにも意外な返事をされて、思いつきり声が裏返ってしまった。

(「うりやあ、まったく信じぢやいねえな）

ため息を吐いたとした瞬間、スッと視線が下に向き、ボソリと声が聞こえた。

「……ワタル……」

きつとこのつぶやき方は、俺や麻紀には聞こえていないと思つてゐるだろう。いや、無意識に発した言葉。だろう。

麻紀の方をちらりと見ても、少し暇なのか、物珍しいと周りを見回している。

「……わかった。じゃあ麻紀、いつ行く？」

「この子、連れてくのね」

「うん。連れてくつていつても、場所教えてもらひつまでだけど」

「そう。私はいつでも構わないわ」

「なら、歩くんは今から平氣かな？ 近くまで行かなくていい。見えてきたら指差してくれるだけでいいんだ」

視線を歩に戻すと、真剣な力強い瞳で言つてくる。

「……最後まで付き合わせてもらえないか？ はつきりとした状況は読み取れないけど、乗り掛かつただけじゃいやなんだ」

何かを、抱えている瞳。

きっと、なんと説得しても納得はしてくれない、頑固な子供だったらしい。

軽いため息を吐き、ソファーの背もたれに背中を預ける。

「わかった」

ちらりと麻紀の方を見ても、ただ微笑んでいるだけだった。

相澤とこうう男に会うため。いや、もう一人の杵島とこうう、涉の友達を救うため、俺たちは足をすすめた。

まさか、この麻紀という女を助けたが故に、こんなことに巻き込まれるとはおもわなかつた。

実際のところ、着いていくといつたのは俺だけ……。

あれは半分脅されたようなものだ。いや、餌に釣られてしまったといつべきか。

『涉のことと何か、関係があるかもよ?』

（つていわれちやあ、オトナシクなんてしていられねえだろ？が……）

涉の姿をした、涉と同じ声・表情・仕草。

これさえなければ、おとなしく場所だけ教えてさつさと帰つていたはずだ。

「ここか

「うん」

途中までの道が知りたかったため、杵島といつ男の家。前に言い争いをしていた場所までいったん連れてきてもらい、そこから通つた景色を必死に思い出して、問題の店までやつてきた。

ちらりと中を覗くと、中にはたくさんの客。雰囲気はクラブに似ている。前回来たときと、雰囲気はかわらないようだ。

軽い扉に、ゆっくりと触れ、扉が手前にひっぱり開けよつとする。

グッ

……

引いた手は、ピクリとも動かない。
引かさらなかつたのだ。

押しなのかと、押してもみるうしいが開く様子もない。

「……密差別？」

ムツとしながらもその戸から離れると、次に触れたのは麻紀だつた。

引きも押しもせず、戸を閉じ、少ししてから引いてみる。すると、その戸は簡単に開いてしまう。その姿を見て、余計に機嫌を悪くする沚。

でも、ただ少し置いてから開けたにすぎず、特別な何かをした様子もなかつた。

「なるほどね」

「どういうことだよ」

「いつたん退きましょ」

そういうて、簡単には動いてくれないだろう沚をつかんで、麻紀は来た道を少し戻つていく。遅れをとらぬよう、俺も着いていく。店が見えなくなる位置までくると、沚と向かい合い、麻紀は説明をする。

「いい？　あの中にはいる人みんな敵よ。中に入つたら周りの人に助けを求めたつて敵を増やすだけ。あの扉は、力がある人しか動かせないようになつていて」

その説明を聞いても、沚は眉間に皺を寄せて「じゃあなんで」と言わんばかりに不機嫌は深まるばかり。

あの戸を引けなかつたつてことは、沚さんには力がない。

でも、俺はその前に大きなところが気になつて仕方がない。

『力つてなんだよ』と言いたいが、今のこの状態で聞くのはあまりにも場が悪い。

歩きながらでも、聞いておくべきだつただろうか。

『力というのは……』

聞き覚えのあるその声が頭に響く。

いきなりのことと、体がビクッと跳ねた。しかし、運がよかつたのかその姿を一人にみられることはなかつた。

「で、その引く手に『力がありますよ』といつ証明。つまり、取手に対し力を使わなければならぬということ。だから、今は私が戸を押さえるから、その間に一人は中に」

「了解」

『この地球環境や、人間に備わっていた力が、自分の思い通りに利用できる力のことだらう。かつて、涉というおまえの半身が氷の力を持つてゐるということ』

麻紀の説明と、この声が被る。

どちらにも耳を傾けていると、さきに沚たちが歩きだしてしまつ。

それに置いて行かれないように、足をすすめる。

その間も、声は力について説明をしてくれる。

（涉が……力の持ち主……）

『姿を消してしまつたのは、涉がその力の持ち主として選ばれなかつたからだ』

（選ばれなかつた……それは誰が選ぶもの？）

『氷の証である……この俺だ』

扉の近くまで来た。

言つていたとおり、麻紀が開けて最後の俺が入るのを待つ。

扉が閉まると、中にいた人たちの目線がすべておれらにささる。

そのことに対して、麻紀は力強く。沚は少し不安げに。俺は……

無心に立ち向かっていた。

いつたいここからどうするつもりか。

「この先は入ったことも見たこともないため、道しるべにはならない。

ちらつと入ってきた入り口を見ると、そこには扉の近くにいた客が、逃げ場を防ぐように立っていた。

視線を先頭に移った麻紀に戻すと、その前方から一人の女性が、何やら楽しそうに近づいてきた。

その後ろには、取り巻きのようだの男一人が、守るように立っていた。

年齢は二十代前半から後半に移るうとする年代。髪は背中の真ん中辺りで、クルクルよりもクネクネしているようなバーマ。

胸の谷間は見せるためにありますと言わんばかりに開いた服のうえに、黒いカーディガンに似た。しかし、カーディガンとは違うような何ともいえない、セレブを意識しましたといわんばかりの格好。下は、太股丸出しのぴっちりした白く短いスカート。

背丈は、ヒールで2~3センチほど高くした170もないくらい。片手にはタバコ。不健康極まりない。

コツツコツツとならしながら歩くその足は、麻紀のすぐ目の前でとまり、少しだけ前のめりになつて麻紀と顔を近付けていう。

「はじめて見る顔だねえ。歓迎してあげるよ。どんなパーティがお好みで？」

からかうように、そう声を張り上げる。

（あの人は、選ばれた人？）

『さあな』

（でもここにいるってことは力があるってことだよね）

『たぶんな』

(……どうして、渉を選ばなかつたの)

『それはこすれわかる。いや、いすれ教える。今はそんなことを考
えている場合か?』

(じゃあこの場をどうにかするのに、いい案はないの? あの女、
こっちが何も答えないのに、勝手にパーティすることにして、オ
レらに飲み物用意しちやつたけど)

連れていかれたのは、その店のど真ん中のテーブル。

周りからも、冷やかすような目で一や一やしているのから、最初
は視線をこちらに送つてはいたが、特に興味も持たない奴らの二つ
に分かれていた。

テーブルといつても小さいため、ほとんどの人がコップを手に持
つている。

持たされはしたが、飲む気にならないのと、りんごジュースは嫌
いだ。

「はじめてみるけど、どうしてこいく?」

その女性の問いに答えたのは、意外にも麻紀ではなく涉だつた。
「んーこひてそんなんに目立つ装飾ないじやん? なのにどうして
こんなにお姉さんがいるのかなつて思つて。ねえ、お姉さんはこの
店に何に魅せられたの?」

少しだけ大人びて見えていた涉が、すぐ子供っぽい表情仕草で
聞き返す。

「そうね、あなたも言つたけれど、こい、目立たないから。だから
好き。それに皆仲良くて、知らない人同士でも比較的話しやすいの
よ」

『どうにかなりそつだな』

(……でも、その捕まつたつていう友達に会つにまどうすればいけ

る？ まさか、こんなところに堂々としてるわけなさそうだし）

『 いつたん退くんだな。そして通いつめれば、すこしは仲間意識持つてくれるんじゃねえの？』

（なるほどね。この一人は、どうする気かなあ）

『 さあ？ わからんが、一つだけわかったぞ』

（え？）

『 汗という奴と、麻紀という奴。一人とも証持ちだ』

（その証って何？）

『 俺みたいな奴らだよ。力の主。それを体に宿している奴は、殺されないかぎり渉のように消えたりはしない』

（どうしてわかるの？）

（汗と女性の会話は未だつづいている。）

『 あ？』

（どうして一人がその持ち主だとわかるの？）

『 もとは一つだったからさ。一人の神の片方が一人を裁き、罰を与えた。力を分解し、バラバラにして体内にバラバラに納めたのさ。裁いたほうの神は地球の神。裁かれた神は人の神さ。だから、一つの場所に神の欠片である、証の持ち主を集めてはいけない。だからわかるのさ』

(じやあ簡単に言えば、一卵性の双子……がいっぱい……みたいな
?)

『まとめればそんな感じだ。しかし、姿形は違うし性格も表情も違う。それに、あと何匹いるのかもわからない。集まりしだいわかつてしまつから、未然に防ぎたい』

(……ふうん?)

長い説明を聞いても、何かしつくつこない。現実味のないことを、一から十まで並べたのを、無心に読み続けているみたいだ。

「の声に表情がないわけではないが、難しそうでよくわからない。」

(今助けるその男は、証の持ち主なの?)

『まあ……しかし、この店のどこかに証はある』

(べい)

『はつきりした場所まではつかない。……アーベン』

(……行きたいの?)

『違つわー 行く振りして、少し中を探つてみる』

(へえ、意外と頭良いじやん)

『意外意外つるそこよ』

(それ、前に俺が言つたセリフ)

「会話の途中悪いんですけど、お手洗い失礼しますね
「ああ、場所わかる? ボウヤ」

「探しますよ」

印象が悪くならないよう、にっこり笑顔でいうなり、にっこり笑顔で女性が答える。

“ボウヤ”という言葉に怒りが顕になりそうになつたが、必死に押さえながらも、一向に減つていらないコップをテーブルに置き、場所を離れた。

一応、トイレのマークがはられていたのがわかつたから、その矢印にならつて、ゆっくりと足を進めていく。

通路は一方通行。

離れにあるのか、なかなかトイレにたどりつけそうもない。

先程までいた場所から聞こえてくる騒音は、もうほとんど聞こえなくなつてきた。

突き当たりを唯一曲がりのあるほうにまがつていただけだといふのに、不思議と騒音が再び微かに近づいてきている。
(どうか。遠回りに曲がつただけであつて……つて、ビーツしてそんなことを?)

疑問は募る一方。

『立ち止まらずにトイレに行け。大だ大。大していけ』

(下品…)

言われたとおり、トイレに行き個室に入る。

しかし、特別何かを食べたわけでもないから、でももんもでない。

『ティッシュを通常ビツビツと投げて流す。』

(はこはこ)

言われたとおりに流して、普段ビツビツである。手を洗つて何もなかつたよつにトイレをでた瞬間、声は再び命令した。

『さつき通つた場所を歩け』

(一本道だつつの)

言われたとおりにあるきだした。

突き当たりを左に曲がり、少し歩けば騒音は耳に入らず、右に曲がる突き当たり。

そこを曲がつた瞬間、一瞬何か空気がかわった。

(気のせい……か?)

『気のせいなんかではない。そこは右壁のビニカルに、違つ道がある』

「歩くん?」

「え?」

不意に声がかかり、振り向くとそこには麻紀が不思議そうに立つていた。

『この女、泣のメールとかいうやつ知らないのか?』

「ねえ麻紀さん、泣つて人にメールできる?」

「ええ」

『壁を通ろうとすれば警報がなるかもしない。そのうちにはつちに残された男が捕まれば意味がない。警報が鳴つたら逃げるよつち

(わかった)

「ちょっと送らせてもらひえる?」

「ええかまわないわ」

そういうってポケットから携帯を取り出し、メールの画面にした状態で俺の手に渡される。

少しだけ慣れない手つきでメールを送り、送ったメールを履歴から消すと、すぐに携帯を返す。

警報が鳴つたら、躊躇いなく逃げて。

扉は、あなたなら開けられるはず。

このメール、読んだらすぐに削除してください。

と。

メールをお互い削除したのは、証拠隠滅。なにか事故があつた場合に、不利になるのだけはごめんだった。

これは、声の奴に言われたわけでもない、自己判断だ。

「でもどうしたの?」

「ちょっとね」

再び壁に向き合って、そつと右手を当てる。

空気がかわつたのは、その壁のどこから風が流れたから。ほんの一瞬だつたけれど、何かがわかつた気がしたのだ。

(なあ、おまえが俺のなかにいるつてことは、俺も涉と同じ力を持つてゐつてことで良いんだよな)

『ああ』

(でもどうすれば……あ?)

『うすれば、渉のような力が使えるのかを考えたとき、渉の力を知ったときによつていた言葉を思い出す。
昔のことだから、曖昧さがでるが。

“ いり……想像するつていうの？ いりなつてほしつて形になる
んだよね ”

（想像……）

『証を持つものはそれだけでは無理だ』

（は？）

『証を持つものは、持たない人より強力な力を得ていて。それを使
いこなすには、証である俺との投合が必要だ』

（投合……）

『投合すれば、身体能力が普段よりも優れる』

（なるほど、で？ その投合の仕方は？）

『そもそも投合は意氣投合。俺とおまえの力を合わせる必要があり、
それにはお互いを知らなければならない』

（なるほど、なるほどね。おまえは渉とは性格も根性も真逆。似ているの
は容姿だけ。名前は……シャベット）

『ふん。上等だ』

名前は不意に頭によぎった。

その名前に執着があるわけでも、特別何かがあるわけでもない。

ただ、それしかないといつ断定だつた。

名前を呼ぶと同時に、シャベットはにやりとほほえみ、殺氣に満ちたような気がした。

見たわけでもない、身体で感じた。

それとともに、体内に何かが流れ込むような、膨大な何かが胸の中で蠢いている。

そつと壁から手を離して、左腕に触れてみる。

(何かが生きている……。)の中で

冷たくて、氷で力チ力チに固められたかのように、あの事件以来動かなくなつてしまつた左腕が、昔を思い出す。

動かしていた俺。

俺の腕の中から外された渉の左腕。

今になつてわかつた。

渉の左腕は、俺の左腕の神経だつたのではないか。

それを掴んでいた俺から医者が奪つたから、腕があれから使い物にならなくなつたのではないか。

左腕が使い物にならなくなるより、渉の喪失がショックで、今まで自分の左腕の疑問は持たなかつた。罪だと、そう思い込んでいた。シャベットはいつていた。

投合することにより、身体能力があがると。

きつといま、動かすこの左腕はシャベットのものだりつ。ゆづくと目を閉じ、その妙な壁に手を当てる。

“ いづ……想像するつていうの？ いづなつてほしつて形になる

んだよね”

涉の声を思い出しながら、ゆっくり田を開ける。

(想像……)

『一つの扉に、薄い氷の膜を張る感じ。張つたらそれを扉ごと壊すんだ。空気中の水分を収縮』

(水分を……大丈夫落ち着け……。俺なり……できる…)

左手に込める力などないはずなのに、胸のなかに蠢いていたものが、左腕を通じて外に流れ出る。

触っていた壁が、一瞬にして氷に覆われ冷たい。しかし、少し角度を変えて見なれば、肉眼ではわかりにくい薄い氷。

なんとなく麻紀には見られたくなくてその氷を壁ごと蹴り付けると、薄い何かが割れる音と、大きな爆音が聞こえ、壁は崩れ落ちていぐ。

田の前には先がわからないうる暗い階段。

『躊躇うな！ 中に入れ！』

その声と共に足を中に踏み出させる。

一段おいて踏み外さぬよう。』

一瞬ポカーンとしていた麻紀も、足を踏みだしたのがわかつた。本当に少ししてから耳障りな警報が鳴り響いた。

『躊躇うなー 中に入れ！』

その声と共に足を中に踏み出される。

一段おいて踏み外さぬように。

一瞬ポカーンとしていた麻紀も、足を踏みだしたのがわかつた。本当に少ししてから耳障りな警報が鳴り響く。

「ちょっと待つて！」

「黙つて着いてきて！ あの人ならきっともつと逃げてるはずだから！」

警報がうるさくて、大声を出すしかない。しかし、ここで大声をだすのも本当は避けたい。

警報が鳴らないこともないだろうとはおもつたが、まさか本番で怖気づきそうになるとは思わなかつた。

階段を下る足も、足の付け根からガクガク震える。
どうして俺はここまで体を張つているのだろう。
どうして家でおとなしくしていなかつたのだろう。

どうして……俺はここにいるのだろう。

渉のことにして、渉のために生きようとすれば、こんな事に巻き込まれないようにできたはずだ。

きつとこの人たちと、店の前で別れていれば、もう関わる事はなかつただろう。

そんなことを考えているうちに、階段は終わっていた。

薄暗い照明で、天井につながっている黒い柵。

「ここは……」

必死に走つてよつやく追いついたるつゝ、まったく息切れしていない麻紀。

思つてみれば、俺も足の疲れや、体力的に息があがる様子はない。

(これが投合の力……)

体に蠢く何かはまだ、体のなかにいる。

それを確認すると、次は柵に手を触れず膜を意識する。

思った通り張らざるそれを確認する前に、足でその柵を蹴りあげる。

再び割れる音と、金属と金属が擦り合つ音が響く。

砕け損なつた鉄の柵。棒を手にし、一本道と、左右には牢屋みたいな柵と壁で囲まれた道へと足を踏みだそうとする。

後ろからは大量の足音。それと、田の前からは見覚えのある一人の男。

「こいつ……相澤」

後ろで麻紀がそうつぶやく。

「おやおや。いつだつたかの「一人さん。たしか、キヨウダイだつたかな？ 悪いけど、ここを通すわけにはいかないんだ」

「ごめんなさい。あなたの相手は私がするわ」

すつと俺の前に表れたのは麻紀。

相澤を睨み付けるように、強気な口調で前にでる。

「手荒なことを女性にはしたくなかったのだが、仕方がない」

後ろから迫りくる靴の音は、もうすぐそこまで来ている。

それは麻紀も感じ取つていたのだろう。左手を一度胸に持つていき、それを力一杯相澤に向かつて何かを投げるよう振り出すと共に大量の水が流れだす。それから逃れるかのように、相澤も左手を出して同じくらいの水量を出し、ぶつけ合つて対抗する。

その間にその水の横を通り、奥へと進もうとするが、すぐに相澤の舌打ちが聞こえる。

しかし、今の状態で力を抜くわけにもいかないのだろうが、一瞬水量が減つたのがわかつた。

そこをつくかのように、麻紀は水量を上げ相澤を流すように、麻紀の水が相澤を覆つ。

チャンスは逃さない。

その水の固まりに手を当て、瞬間に氷の膜にする。

『膜じゃない！ 塊にするんだ』

言われたとともに、反射的に力を増幅させ、集中する。パキパキつと氷になる音が鳴る。

後ろからは、人の足音。すぐそこまで降りてきたのだ。

「階段の方に水を！」

「は、はい！」

麻紀は言われたとおり階段に向かつて大量の水を噴射させる。その水を瞬間的に氷にし、階段からこちらの通路の切れ目に、氷をまわりの壁と一体化させる。

しかし、それでホツとはしていられない。奥にどんな力を持つた人がいるのかもわからず、俺は人探しに集中した。

しかし、探すほどもしなかつた。

「止か！？」

聞いたこともない声が奥から聞こえてくる。

目的の男。杵島だろう。

足を進めると、両手両足が鎖のようなもので壁につながられ、自分では身動きがとれない状態にある。

牢屋にあるような柵を、再び凍らせ、先ほど手にした鉄のパイプでそれを破壊する。

身長は俺より高く、地面からも高めに位置しているため、何をどう頑張つても俺の身長では、両手に届かない。

「麻紀！」

「両手からね」

麻紀は器用に水の玉を一個投げ付け、鎖にぶつかり弾けたとき、

それを氷り化する。再び一つ投げ、同じよう氷の鎧も氷り化させる。

鉄パイプを麻紀に渡し、両手を碎いてもひりのと同時に、両足も解放させる。

「ありがとう……相たちは……？」

「説明は後！ どうやってここから脱出するか考えて！」

俺はそう怒鳴り着け、まわりを見回す。

何か良いものはないか。

最初、氷で閉じたところを解放し、麻紀に水で人を流すようにまた大量の水を出してもらい凍らしてやろうかとも考えたが、凍らしあそれをどうするかとも考えた。

その上を歩くにも、滑つて上れないだらつて、その水を凍らせる体力も不安だ。

身体能力があがるといつても、体力にも限界がある。

今この現状で、多少息があがっている。神経的集中を使いすぎた。しかし、じう考えている時間ももう少ししかない。

氷の壁は、奥の者たちの所為でヒビが入りかけていて、そんなにもたない。

だんだん、辻はちゃんと逃げられたのか。

捕まつてしまつていたらどうしようなど、違ひじとを考えてしまう。

「歩くん！ 辻はちゃんと逃げれた。今助けに来てくれる」

「助けにだと！？」

「ええ。辻さんだって、のんびりなんてしていられない。中からではなく外からね」

「……そういえばあいつって……」

なんの力を？ と言おつとした瞬間、氷が割れ、崩れ落ちる音が響き渡る。

「困つてているようだつたから善い待遇してやつたつていうのに、その代償がこれかい？」

「こんなところに人とらえてどうするつもりだつたんだよ?」

「あんたたちには知る権利なんてないよ? おとなしくしていれば良いものを」

先頭切つて出てきたのは、この店に入つてすぐに声をかけた女であり、ジューースを出した女。

その後ろからは、怖い怖い男たちが俺たちを囲もつと中に入つてくる。

「相澤は……役に立たなかつたかい。ボスのお氣に入りの一人だつたんだけどねえ」

クイックと顎で、相澤がいるだらう方を見る。

すると、もう氷が解けたのか、中から壊されたのか、座り込み上がつている息を整えている。

(二つ元に)

近くには杵島がいて、相澤の腕を首に回させ、グイックと無理矢理でもたたせる。

「わかつた」

耳元で相澤が杵島に何か言つと、うんといったんうなづき、杵島はじつとの方を向き直し、相澤を引きずるように近づいてくる。どうするつもりか、俺よりも前に立ち、女と対峙する。

「相澤……あんたもしかして、私たち……いいえ、ボスを裏切るつもり?」

「はつ……俺は沚を裏切つた……でもあいつは、それでも俺も助けようとした。だから俺もそろそろ作戦実行するさ」

「だったらあなたも始末するわ。どうせ証持つているわけじゃないしね」

「俺は最初から裏切るつもりだつたさ。始末するなら、二つとも抵抗するさ」

「最初からこの状態になることわかつてたつていうのかい」

「まあ、やうなるかな」

「ちつ」

女が舌打ちすると同時に、右手を相澤に向け、一瞬力んだと思えば、炎が相澤と杵島を力強く覆つ。

(あの女、炎……か)

あまりにも覆つのが一瞬のこと過ぎて、こっちが手を出すこともできない。

不意に杵島か相澤の足元に何かが動いたのが目に入った。

『麻紀という女の近くにいる。いつでも力を使う準備をしていろ』

(え? うんわかった)

そつと足を進めて麻紀の隣に立つ。

(なにをするつもりなの?)

『足元をよく見てみる』

(え……何か流れる……つて言つてもどうする……つもり? 水……水!?)

再び視線を一人に戻すと、炎で覆われたその下で、自分達を水で覆つていた。

その水が地面に落ちるなり、床一面には水が漫る。

階段の方に目を向けると、煙が充満すると共に、焦げ臭さと消防車のサイレンが響き渡る。

サイレンに耳を向けたみんなの視線を確認するかのよつこ、ちらつと見た後相澤と杵島はしゃがんだ。

一瞬杵島の手から小さな光が見られる。

(光……?)

『電気か!』

麻紀と俺の足元だけを氷に変えて、水に触れないようににする。水は電気を通す。

純粹な水は通さないはずなのだが、大丈夫なのかと不安になつたが、今は任せらしかなかつた。

手が水に触れた瞬間、水の中を光る電気の筋が走る。その数本の筋が水に触れているすべての人を痺れさせ、一瞬のうちに立つことができなくなる。

「いまだ!」

軽がると電気を食らつた相澤を担いだ杵島が、炎に覆われている階段へと足を進める。

「私が先頭切ります」

積極的に麻紀は走つて階段を上つていく。

後ろを俺が。前を麻紀が水でカバーしながら出口へ向かおうとすると、消防の人人が中に入つてきていた。

麻紀はすぐに水の膜を落とし、オレら四人は救助された。

相澤と杵島という男はその後病院に運ばれ、俺と辻に麻紀は、一旦俺の家に来た。

時間はすでに零時を過ぎており、日付が変わった。

「歩……帰つたのね」

「か、母さん」

家に入ると、気付いた母さんが玄関まで來た。

母さんが帰つてくるのはいつも夜遅く、だいたい日付が変わるか変わらないかの時間。だから起きていたのだろう。

「一の時間だから渉かと思つたじやない！ 紛らわしいことしないでちょうどだい」

「ゴメンナサイ」

心のない返事を聞かずリビングへと颯爽ともどつていった。

「中入つて。俺の部屋そこだから。何か飲み物用意してくるからゆつくりしてて」

部屋に入るなり、ベッドのサイドテーブルにある渉と俺のツーショットが入った写真立てを伏せさせる。

「え、ええ」

「お邪魔します」

母は、渉がいなくなつてから変わった。

時には俺を渉だとと思い込み、時には俺がいることに疑問を持つたり、邪魔だと罵つたり。

仕事は夜遅くまでしていくよになつたし、父さんはあまり家に帰つてこなくなつた。

仕事はしているらしいし、貯金もきちんととしている。

だいたい家に来るときは、母が居ないのを承知しているとき。俺の様子を見に来てくれる。でもそれも仕方がない。

母さんも父さんも、昔からおとなしくていつも笑顔でいる渉が好きだった。だからと云つて、今みたいに俺の存在を貶したりはしないなかつた。

父さんと母さんも仲がよかつた。それを壊したのは、すべて俺だ。

三人分のお茶を持つていき、バスタオルを手渡す。

「お風呂入つて来なよ。着替えは一人とも父さんのだけ良いかな？ 明日には洗濯物乾くと思うから、服洗濯機のなかに入れておいて。俺は最後でいいから

「ありがとう。じゃあ麻紀先に入つて来なよ」

「うん。わかった」

着替えを受け取り、麻紀は部屋をでていった。

男一人の沈黙。

それを先に壊したのは辻。

「えつと、今日は本当にありがとう」

「別に。礼を言わることまではしてないよ。ほんどの女の女がやつたからね」

「あの場所を見つけてくれたのも、杵島を救つてくれたのも歩くんだと聞いた」

「……ねえ、あんたの力つて、もしかして炎？　あの火事を起こしたのもあんたでしょ？」

「ああ。歩くんは氷……？」

「麻紀から聞いた？　そうだよつていつても、力を使つたのも店に入つて初めてだつたから、ぶつつけ本番だつたけど」

なんて微笑みながらも言つてみる。

「ああ、俺もそうだつた。杵島と同じよつて捕まつてるとき、あの鎮を根性で溶かしたんだ」

楽しかつた過去を話すよつて、口元を上げ、うつすりとほほえんでいた。

「……捕まつてたんだ？」

「うん。もともと相澤は俺を捕らえる気はなかつたみたい」

「へえ。捕らえられた理由は、知つてるのか？」

「いや、教えてもくれないし、まったく思いつきもしない」

ほほえんでいた口元は、少しだけ落ち、裏切られたようなほほ笑みを見せていく。

すごく淋しくて、でも相手を憎めないといわんばかりの笑みは、すごく強くて勇ましかつた。

まだ子供心の俺は、それが「強い」と「ことなんじゃないのか。そう思えてくる。

きっと、この先もこの人、辻のまわりには色々な人が集まつてくれ

る。そういう、人を引き付ける何かをこの人は必然的に引き寄せていたのだろう。いわば、潜在能力のようだ。

「あんたは、相澤と言う男があんたを裏切ったと思うのか？」

「わからない。でも、今まで裏切られたって思わなかつたわけでもない。何か理由はあるかもしないって思い込んでても、心のどこかでは裏切られたって思つてた」

「でも憎めなかつた？」

「うん……憎もうとしても、何かの希望を持とうとしてる。でも俺を逃がしたときわかつた。相澤は裏切つたわけじゃないって」

「こりほほえんだ

その姿は、何かの希望と単純な嬉しさが入り交じつっていた。

俺は何か役に立てたのか。

もう必要ないのか。

でも、この人の近くに居たい……。

「たぶん、その相澤、もともと自分がいた組織つていうのか仲間つていうのか、そういうのを裏切るつもりだつたと思う。たぶん、捕まえる理由を知つていたから」

「……理由を知つているのか？」

「ほとんど俺の推測だけど？」

「かまわない。話してくれ」

真剣な目付き。

その目付きが、俺の何かを揺らした気がする。

「たぶん、あそこの牢屋には辻や麻紀、杵島つて人が持つてゐる証が並ばれるはずだつた。それは、そのすべての証を手にして、何かを成し遂げてみたいと考えてゐる奴がいるはず」

「何かを？」

「世界征服とか、人類滅亡とかかな。証つていうのは、もともと二人の神様のうちの一人の神様で、悪いことをしただかなんだかで、裁かれバラバラにされた。バラバラにされたのは人の神」

「……神秘的だな」

「神秘だもん。証に何も話してもらつていないので？」

『証はバラバラにされたから、昔の記憶とか、知識とかもバラバラにされたんだ』

「うんにも……むしろ俺の記憶以外なにもないらしい」

「わりい、それもバラバラにされたんだって、今聞かされた」

「そうなんだって、君も証を……？」

うんと首を縦に振ると、そうなんだと、喜ぶことも悲しむこともしない。

「で、そのバラバラにされたものを、一つの場所に集めることによつて、何かが起きる。もしくは、一人の神様として復活するか。あくまで俺個人の意見。証もそこまではわからんってさ」

「そつか……。裁かれた人の神……裁いたのは何の神？」

「地球の神。その中に罰としてバラバラにされた人の神の欠片を納めたんだって」

「じゃあ、その欠片が証で、一つにまとめたら、バラバラにした怒りを地球の神にぶつけてしまうかもしない……か」

話している俺でも、あまり理解していないのに、泣は俺の説明で理解し、より難しいことをいつてくる。

どうなるのかはわからない。何が起きてしまうのかもわからない。

『どうなつてしまつかは、なつてみないかぎり俺にはわからない』

(よなあー)

「でも地球の神って、人型？ それとも、地球そのもの？ 地球そのものだったら、欠片を集めたらその集まつた欠片はどうするつもり？」

「ん……いつそのことそつじょうとしてるボスと『』対面っていうのは？」

「するとしても、私はまだ接触することだけはしないほうがいいと思うわ」

ガチャリと中に入ってきたのは、風呂上がりの麻紀だった。

「聞いてたのか」

「ええ。だいたいね」

「沚、入つて来なよ」

「いいのか？」

「ああ」

「じゃあ失礼していつてくるよ」

物を持って部屋から出る。

風呂場までいつたのを確認すると、俺は立ち上がりテーブルをずらす。

「麻紀、この部屋で平氣？」

「ええ、構わないわ」

物をどけ、押し入れから客用の布団などを取出し、軽くひいていく。

「あなた……左手使わないのね」

「え？ ああ、俺の左腕。動かないんだ」

自分の左腕を、動く右腕で持ち上げそつとほほえむ。

「でも、力を使うとき動いてたわよね」

「それがわからないんだ。どうしてあの時は動いたのか。でもこの動かない左腕は、罪の証だから」

「罪？」

「そつ。まあ、あんたが知る必要もないさ。知らないほうがいい」
涉をこの世から失わせた罰だ。

あの力も、俺の力ではなく涉の力。

なにもかも、すべてを涉から奪つてしまつた罰だ。だから、左腕を持つていかれた。でもこの考え方は、ただの逃げだ。すべてを受け入れる覚悟ができていない。

「ねえ、どうして証を持たない力を持った人がいると思う？ 証を持たないのなら、力も得られなければいいのに」

「……」

「この世は醜い。美しいものなんて、何一つない。神様だって、残酷な運命しか与えない」

「本当にそう思う? 美しいものは、一つはかならずある。基準は人それぞれ違うけれど、癒してくれる何かがあるはず」

「癒してくれるもの? それを神様が奪つていったのに?」

唯一俺をわかつてくれようとして、存在を否定しない相方。渉。渉が幸せになれるのならば、俺自身を犠牲にしてもいいって思えた。生きていけると思っていた。

癒しを与えてくれる。

そう感じていた。

それを、俺が奪つた。神様がそういう運命にさせた。

俺が生きていなければ、神様は渉をつれていかなかつたし、母が怒り狂い、俺の存在を消そうとしなかつた。

どうして俺を生み、この世に放り込んだのか。

過程で手違いが起きてしまい、同じものを作つてしまつた。きっと

とさうだ。そうであるはずだ。

「……何を奪われたの?」

「俺の、すべて」

第25話 振り向ければスタート地点

結局、一人が眠りについたのは三時を過ぎていた。
明日は休みだから遅くまで寝られても問題はないが、この先二人はどうするのだろう。

涉って方は、家に帰れるだらうけれど、麻紀の方はどうなのだろう。聞けば、遠くの方から来ているらしい、こちらに通うには大変だろう。

なかなか寝付けずに、俺はサイドテーブルにある涉と俺の写真をとつた。

急いで伏せさせたため、無造作におかれていた。

俺は涉の肩に腕を回して、できるだけ自分に密着するように押し付け、空いた手でカメラに向かってピースを向ける。

涉は控えめにほほえみ、俺の居ないほうの手でピースを見せ、軽く首を俺の方に傾ける。

きっと気付いていたのは俺だけだと思いつが、涉は控えめにもピースをしていない、俺側の腕をそつと腰に回していた。

涉といふときだけ大胆になる俺は、あまり他の人がいるところでは渉にむやみに触れなかつた。

手をつないだり、少しくつたりしてはいたが、肩に腕を回すことなどそうなかつたが、意外にも涉は俺とくつついているのを好んでいた。

(お互い意外と甘えん坊……だつたんだよな)

『仲がいいな』

(つりやまじい?)

『何が

(仲がいいの)

『別に? いいことなんぢゃないのか』

(わう……だね。うん)

「じゃあ、お見舞いいつてくれる」

「ああ」

お見舞い。

相澤と杵島という男のお見舞いだ。

二人はまだ相澤がついていたボスどこの対面はしないものの、準備ができしだい会つつもりで いるのだろう。

その頃俺はどうしているか、沚たちとはどんな関係にいるか。

敵か……味方か……。

二人のいない家で一人、ボーッとそんなことを考えていた。

病院に着くと、杵島と相澤は、一冊たつた今日で元気を取り戻していた。

医者に話を聞いてみても、回復は思った以上に速く、早めに退院できるらしく。

「沚」

「よつ、二人とも元気そつじやん」

「まあな、俺だし」

杵島は何かと楽しそうだが、俺を見た相澤は、少し苦しそうな瞳をしていた。

「どうした相澤。傷、痛むのか？」

「いや、平気だけど……沚、俺……おまえにも、ひどことしたし。なんつづか」

「気にはんなよ。確かに心のどこかじや裏切られたとも思つたけど、信じてたから」

「ああ」

「でも、相澤いまじやもつ回りつ側を裏切つたことになるんだろう？」

？ 麻紀から聞いた

「ああ。元からあつちを裏切るつもりでいたからな。俺の命もそつないことくらいしつてるし、死ぬくらいだったら、あつちに及ぶしてたところで時間の無駄だしな。だから、この命がこの世に残つてゐうちに、何でも聞けよ。わかること、全部話す」

「わかった」

端に積み重ねてあつたみどりの丸椅子を一つとつ、並べて置く。枕に近いほうに俺が座り、隣に麻紀が座つた。

（この世から命が……か）

「どうして、あの牢屋に杵島を入れた」

「あそこに並ばれるのは、おまえらのつてつて証を持つ者だ。沚を逃がしたのは、やり方が気に入らなかつたから。ボスは、証を集めて

自分の物にしたいんだ。この世界を滅ぼし、裁いた地球が、体内に証をばらまいたのを後悔させてやるつて

「証が集まると、膨大な力を得る……？」でも、俺たちが抵抗したらどうするんだ？ 力を集めつていつたつて、どうやって

「ボスの力は、証のなかの心臓なんだ。そうだな……神の肉体というべきか。ボスを中心に、証はバラバラになつた

「心臓……」

「ボスの名前は悠汰といわれている」

「悠汰……」

「でも、何かがおかしいときがある」

「おかしい？」

「俺、水で盗聴することもできるし。ボスは俺の力を奪つてお互い水で会話するんだけど、たまに何かと戦つてるんだ。苦しんでいるつていうか」

「そんなことまでできるのか……」

「そのボスって人の近くには、誰かいないのか？」

「聞いていた杵島が横から聞いてくる。

「たまにいるけど、話してきたりはしない」

「そうか」

「顔は？ 見たことあるの？」

「いや、キングサイズのベッドが入るくらいの余裕がある大きさで、白い布が囲まれてるんだ。それがある場所自体薄暗いし、気味が悪い。声だつて、変声機を使つてるようだしな」

「そうか」

「場所を教えたのは山々だけど、行ったことがあるのは一回くらいで、何度も移動してるらしいから、今の居場所まではわからないんだ」

「そつか。わからないんだつたら仕方がないさ。無理ことは言わないし」

「すまない」

「じゃあ、今日はこの辺で帰るな」

ガタツと椅子をずらし、立ち上がると、杵島が待つてと制止をせ
る。

「どうした?」

「今日来てない、もう一人の男の子」

「歩くん?」

「今度はその子もくるか?」

「どうだろう。相澤に会いにくって言つてこなかつたから
「会こにくって?」

「相澤を攻撃したのは俺だからって」

「だったら、俺は気にしてないから来ててくれつて言つておいてくれ
相澤は、まつたく氣にしていないといつよつこ、つりすらほほえ
んでいた。

「直接礼が言いたい。もしこれないつていうなら、退院後に行くけ
どな。もともと、どこか負傷してたわけでもない。ま、相澤はもろ
攻撃食らつてたけどな」

「つるへー」

楽しげに笑い合うその姿は、俺が望んでいた平和だつた。
バカなことを言い合つて笑い飛ばす。
そんな一日が續けばいい。

続くのならば。

家に帰ると、母も帰つていた。

ちょうどいいと、麻紀を家にしづらへ置いてほしいと言い、了承
をもらつて空き部屋を掃除した。

客用布団を取り出し、隅の方にまとめ、中心で向き合つて話を
す。

「学校びりじてるんだ？」

「退学。お兄ちゃんがいなくなつたことで、お母さんたちも現状呑み込めなくつて、そのままに逃げるよつて出でかけやつた」

「きちやつたつて……そんな簡単だ……」

「うん。でもね？ お兄ちゃん、自分がもつすべ消える」と薄々気が付いてたんだと思つ

「……気付いてた？」

「お母さんたちは、いなくなつたつていうの、家出とか行方不明とかだと思つてるから」

「行方不明！？」

「ほら、死体が残らないから。死んだつていうのもよくわかんないことになるから、行方不明になつたつて。しかも、運悪くお兄ちゃんが食われてから一週間もしないで母さん帰つてきたからさ」

「そつか……」

「手紙がさ、見つかつたんだよね」

「手紙？」

「これ

「ゴソソ」と、持つてきた手提げバックから、白いお手紙風封筒が出てきた。

手渡されるなり、もつ封を開いたところから手紙を取り出す。

『「じとじとせ。いや、じんばんは。かな？ おはよつかもしれないな。』

「じとじと手紙、一回で良いから書いてみたいつて思つたのは間違いかな？」

きつと、この手紙を読んでいたことは、俺はきつと姿を消してたつてことだらう？ 麻紀。

本当は、おまえを残してはこきたくなかった。こんなしょもない兄貴でごめんな。

でも、俺はおまえを残すこと、あんま未練はないんだ。全然な

「いつてわけじやないんだけどな。

だつて、俺が信用する奴がいる。

この手紙を見たら、できるだけはやく、あいつのもとに行け。

麻紀なら、あいつが誰だかはわかるな？

よく、あいつの話で盛り上がったし、変なことも言ひ合つた。あいつは本当に話のネタにしやすかつたけど、その分、良い奴だ。良い奴過ぎて損してなきゃ良いんだけど。

最後になつたというべきか、もしこの手紙を読んだら、麻紀はできるだけはやくあいつのところにいくんだ。

わからんねえけど。助けたのは俺たちの方のはずなんだけど、あいつには助けられた氣がしたんだ。

だから、悪いけど、俺に代わつて、あいつを助けてやつてほしい。また、次の世で会おうな。

兄貴よつ

他には何も入つておらず、その手紙を封筒のなかに戻した。

「あいつって、俺？」

「ええ」

「……結局、二人には助けられてばかりなんだけどなあ」

なんて苦笑してしまつ。

「そうでもない。お兄ちゃんがあんなに人のこと楽しそうに話す姿なんて、そう見れるものでもなかつたから」

「そりなんだ」

「はああ、結局早めに裏切ったわねえ」

椅子に座り、脚を組んで、ちょっとばかし頬を手で優しく撫でる
ようななかたちで、大きなため息をこぼす。

「そんなの、あいつがこっちについてからすぐにわかつてたことだ
ろ？」「う

向かいの三人座れるくらいの、フワフワソファーのど真ん中に、
偉そうにふんぞり返りながらも座る、小学校高学年くらいの生意気
そうな男の子が、馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに口を開いた。

その言葉にも、大きなため息をこぼす。

「ため息ばかり吐いていますと、幸せが逃げていきますよ」

紅茶が入ったグラスを、そつと私の目の前に置く男性。
いつも昼夜関係なくタキシードを着ている、25歳くらいのこの
男は、身の回りをする人のように、いつもお茶や紅茶。茶菓子や洋
菓子をタイミングよく持ってくる。

「毒なんて入つてないだろうな、藤堂」

「バカね和。この男が毒なんて私たちに盛るわけないでしょ」

「そうですよ。盛つたところで得はしませんから」

「一二二二二ほほえんだままのこのタキシード男。藤堂は、一二二二二
ほほえんでいる姿しか見たことはない。

元は、バーの店長だったのだが、先日どこかのバカが暴れて、相
手に火を点けられ全焼。

一部の人間は助かつたものの、地下にいたものは丸焼け。助かる
見込みもなかつた。

もちろん店長は、そうなることを予想し、焼ける1分前に、速や
かに立ち去つた。

残念なことに、私はそこに立ち合つことはできなかつたが、一応
仲間の一人が裏切つた情報を楽しんでいた。

「フフフフ」

ついつい考えただけで笑みがこぼれてしまつ。

「ヤス……思い出し笑い、氣色悪いからやめてもうれない?」

「和さん、そんな直球に言わないであげてください。恭恵さんだつて、人ですからもう少し遠回りを……」

「藤堂。それはフォローのつもりか?」

「いいえ恭恵さん。本心です」

「尚更悪いわよ!」

「ヒーリン。今頃歩、何してるかなあ」

惱むときはお菓子を作つて氣を紛らわす。それが私流だ。

今日はあまりにもいやな予感がするから、氣を紛らわすためにクッキーを焼いていた。

『心配か?』

「いやな、予感がするんだ」

『ああ。心配なら会いに行つてみれば良い』

『だよね。そうだよね、毎度毎度ありがとヒーリン』

『でも、行くのは良いけど、火は消していってね。ちょっと焦げ臭

い』

「へ……あー!」

使つていたオーブンのなかを見てみると、焼きすぎて真っ黒になつてゐる、クッキーたち。

「最悪! 力作だつたのにい!」

「杵島

「あ?

「沚のこと、頼んだからな

「は?

退院の支度をしている最中、いきなり相澤がそんなことを言つてきた。

俺は検査入院みたいな感じだったから長くはからなかつたけれど、相澤は、歩という男に氷付けにされ、色々な器官が負傷しているらしく、退院までには幾度かの手術が必要らしい。

しかし、それも治らないわけではなく、『さよなら』を言つのは早い。

「俺には迎えが来たらしい。おまえがいるから沚の心配をしなくて済むのかもしれないって思つたからかな

「でも、沚にはおまえが必要だろ?」

「杵島はもうわかっているんだろう? 俺だつて、ずっとこの世に残つているはずではないんだ。おれら証を持たない奴は、証を支えるためでいるんだ」

「でも……

「良いからおまえはそれを持つて病院から出る。この病室、おれら以外のベッドは空なんだ。運が良いだろ?」

「……わかった

しぶしぶうなずいてみせた。

「沚によろしく。そして、沚をよろしく

「わかった

カバンを持つと、俺は振り向かずに病室を出ていく。

泣きたいけれど、これを泣に伝えるまで、崩れてはいけない。

泣のところまで距離はある。

そこまでの我慢だ。

「……？ どうかしたの？」

「いや、今、誰かに呼ばれたような気が」

大切な誰かに、大切な何かを言われた気がした。

声が届いたわけではない。なにか、引っ掛かる何かが何かを通じて伝わってきた。

「何かの予兆つてことも、ありえるわよ？」

「……うん」

「いつ！」

何が聞こえた気がして、持っていた茶碗を落としてしまった。その欠けらを一つ一つ、丁寧にとつていると、その切れ目で、指をスッと切ってしまった。

反射的にその指をくわえると、再び声が聞こえてきた。

《もうすぐだよ……》

「え……？」

とおくからかすかに聞こえるよつこ、耳のなかに入り込んでくる。まわりを見回しても、人の実態は見当たらない。でも、田の前に誰かがいる気がする。

「わた……る？」

《始まる……気を付けて！》

「へ？」

首を傾げた瞬間、田の前にいたものは、すつと消えた。姿形がはっきりしなかった。

ぼんやりしていて、じつと集中していないと見えないなにかが、俺に警告してきた。

声も特定しない。涉とも言えない。

今の声を思い出すとしても、はっきりとは思い出せない。透き通つていて、脳に覚えさせない声。

「歩くん！」

リビングの戸が開くなり、聞こ覚えのある声がキッキンまで聞こえてきた。

「お、お前……」

「始まつちやい……」

「……」

「えりこ……」

「何泣いてるんだよ。お前は喜ぶべきだらうへ」

「いやだよー！ ほんの、ほんの……。」

「最高じゃないか！」

卷之三

「お前に、

「いや、言わないで……！」

「お前たゞてれがてしてるんだけ」

ପାତ୍ରାଳୀ

「……あさ」

一
神
の
怒
り
が
…
さ
あ
、
バ
ー
テ
イ
の
始
ま
り
だ
よ！
喜
ぶ
ん
だ
！

「いやた……」

一人の口元が、にやりとあがる。

「お前は、逃げられない！」

「悠樹……」飯を

「祐介、俺は悠汰だし、パンがいい」

パン以外食べる様子のない悠汰に、祐介といつ男は大きくため息を吐く。

『悠汰！ わがまま言つな！ そんなにご飯が食べたくないんなら、俺に変えれ！』

「つむさいよ悠樹。今は俺なの。あとでちゃんとお前の時間もあげるから、ちょっとくらい良いだろ？』

祐介には見えない俺に文句たれる。

肉体は俺。でも、精神は悠汰。

違うのは性格だけで、姿形は同じ。

二重人格という種類ではないとは思う。ただ、肉体を使っていないものは、肉体から離れることも可能。

靈体みたいだけれど、俺は肉体から離れはしない。悠汰が何をするかもわからない。

(前はこんななんじやなかつたんだけどな)

前はもつと、お互い今を楽しんだり、助け合つたりしていた。それに、悠汰が俺の体を扱うことなんて、出来やしなかつた。靈体になつても、ある程度物などに触れていることができる。前といつても、一時悠汰は俺のもとから姿を消した。

しかし、世界が何か動いたとき、再び悠汰は現れた。

それからだ。

前とは違う、何かが起こりはじめていると実感したのは、悠汰はそれを逃げられないことだといった。

悠汰を抑え、強制的に俺に戻すことは簡単だ。でもそれをしないのは、ただでさえ不自由な悠汰を、縛り付ける勇気がなかつた。

「じゃあ行つてきます。祐介も着いてこなくていいよ。前みたいに襲われる事はないし、襲う奴も居ないだろうしね」「しかし……」

「平気。祐介も、少しは自由にしてろよ。俺だつて、たまには一人になりたい」

「……わかりました。お気を付けて」

祐介と悠汰を残して俺は外に出た。

新鮮な空気と、新鮮な風。

いつも屋内に籠もつてしまふから、なかなかこのよつた環境に触れない。

それに、隣には守るかのように、祐介や護衛がいる。

そんな堅苦しいところ、外にいようが中にいようが、押しつぶされそうな感じがした。

俺は、信頼していた人たちの寿命や病氣で亡くなる様さまを見てきた。

祐介は、信頼していた人たちの一人、祐司という人の息子の息子

だつた。

今はもう二三十歳で、俺と祐司が出会ったきっかけも、その時起きた事件も知っている。

あれからもう、50年は過ぎた。いや、それ以上経っている。なのに俺だけは、祐司という男と出会った時、いや、人生が変わる瞬間の、悠汰と初めて出会った時から、年齢も老け具合も変わらない。変わらなくなってしまった。

「……来る……また、新しい魂が……」

体の全身が、目に見えない何者かの魂が近寄つてくるのがわかる。ただの魂ではない、力持つものの魂が。

「ああ、君か……君が……」

俺の頬は、涙を流すためだけにあるのだろうか……。

「そう……」

「なあ、俺たちは何をすれば良いんだと思ひつ~」

「何も

「え?」

「何もしなければいい。きっと今のおれらは、ボスっていう男に違う気がしない。だったら、こっちからアクション起こしても、ただ死に行くだけさ」

「まあ、そうだな」

「だから何もしない。向こうから来るのを、鍛えながら待つていれば良いんだよ」

託された伝言を、杵島はすべて話してくれた。

もう、相澤は居ないこと。

こいつかはこうなることがわかつっていた。

だから、泣かない。

今泣いたつて何も始まらない。

（泣くのは、すべてがおわってからだ……）

泣いてしまいそうに、目頭が熱く熱を持つ。

俺は麻紀に呼ばれて、辻の家に向かっている。

辻の家はここから少し距離があり、そこまで行くには、渉がいるお墓通りを横切り、この前の火事現場の近くを通る。

右に行けば、杵島といつ男の家があり、もう少し行って、左に曲がれば辻の家。

杵島の家からもっと奥に行き、国道を渡り、渉とよく行った山の方に行けば、相澤の家がある。

こんな遠いところに、麻紀は歩いてきたのだろうか。

「歩くん、声、聞こえた？」

「こえ？」

「ええ。忠告するような声」

「聞こえた……かも。麻紀が来る本当に少し前」

「そう……なら、時間差があるのね」

「え？」

「辻の家にいるときに、辻が何がが聞こえたって。忠告するような声が。いやな予感がするから、考え込むついでに、歩くことにそして、そしたら辻からメールが来て、歩くんをつれてきてって。だから、歩いてきたんだけど、その時に声が聞こえて」

「じゃあみんなが？」

「多分」

「声の主って誰なんだろう。……」

「聞き覚えがない声だった？」

「いや、大事な人の声……」

「そう……私も、大切だった人の声だったの。少し話していいから？」

「どうぞ」

辻の家に向かいながら、麻紀は昔を振り替えるように、リズミカルに過去を話した。

兄がいたこと。

兄に親友がいたこと。

いなくなつたこと。

辻と会つたこと。

辻と有つたこと。

帰つたこと。

力のことや、最愛の兄がいなくなつたこと。

麻紀が聞いた声は、その最愛の兄の親友であり、好きだった優貴の声だった。

辻には、麻紀の最愛の兄の声だつたらしい。

「だから、私のもう一人の兄的存在は、辻……だつたのよ」

「ふうん」

「あなたにそういう存在は？」

「え？」

「頼れる人や助けてくれる人。力の発現力になつた人」

「……誰だろうな。もう、そういう人はいない。かな」

「もう？」

「俺の家に来たとき、何か違和感がなかつたか？」

「違和感……？」

麻紀は、来たときのことを思い出すかのように、少しだけ顔を上げて視線を高くした。

考えるとき、上を向く人なんだ。そう観察しながらも、思い出す

のを待つように、周りを見回しながらも歩く。

「お母さん……かな？ 違和感つていうのかわからないけど、誰かを待つてているような気がした」

「俺の大事な人をね。いや、家宝を待つてているんだよ」

「聞こえた大事な人？」

「うん。失つたものは、戻つてくるわけないのにね。代わりなんて、あつていいわけがない」

涉は家の宝だった。

家族の愛すべき宝だった。

子供心でも、嫉妬心もでなかつた。

家族や親戚内で、涉だけが愛でられるのも納得ができていたから。自分だけが愛されない。そんな気持ちになんてならなかつた。

今思えば、憎めればよかつたのかもしれない。でも、俺も涉を頼つた。

愛でられる理由がわかるから、俺も愛した。誰よりも、涉を信用した。涉しか、信用できなかつた。

どちらが兄で、どちらが弟かは区別されなかつた。でも、内輪では、涉を神といつた。

それを失つた今、家族内も親戚内でも、変化が少しずつ起きている。

もともと仲が悪かつた親戚同士争い、憎しみ、分裂した。

もう、それを止める渉的存在が居なくなつたから。

「どういう人だつたの？」

「俺にとつて、唯一信頼できる相方だつた」

「その人は今……？」

「殺しちやつたんだ……俺が」

沢の話は、相澤を失つたということだ。

証を持たないものは、長くは生きられない。渉のよう、誰かの犠牲に。何かの犠牲によつて消えてしまう。

伝えたのは、退院した杵島の口から。

一人とも、いつかこうなることはわかつていただろう。そんな表情をしている。ついにこの時がきたかと。ドヨンとした空気に耐えきれなくなり、散歩してくると外にでた。外は中とはちがく、明るく晴天だった。

(あつつい……)

麻紀と話ながら歩いていのときはこんなに暑いとは感じなかつたが、沢が熱を放出したかのように、蒸し暑さを感じる。

そつと冷えた左腕に手を当て、暑さを自分の体でしのぐ。親友だらう人を失い、沢も杵島もこれからどうするのだろう。

あの忠告は、どういう意味なのだろう。

いやな予感はするのに、その基を探すことができない。どうしてこの力を得たのか、何をすべきなのか。

「わつ

「えつ」

いきなり驚いた声とともに、身体がぶつかり合つ。

つい転んでしまつた自分の身体を起こしながら、ぶつかつてしまつた相手を探すと、同じように後ろに転んでしまつていた。

「ごめんなさい。つい考え方をしてて」

手を差し伸べ、つかませるとグイッと身体を起こしてやる。

謝ると、少しほえみいよといつ。

「俺もちよつと考え方してたしあ互い様。怪我とかなかつた?」

「ああ。そつちは?」

「平気平気！ 僕強いから」

なんて楽しむように笑うその姿は、僕より身長はあり、裏もなさ
そうに微笑む表情は、見た目よりも大人という印象を持たせる。
見た目は高校生くらい。身長は、杵島という人や相澤ほどはない
が、沚よりはある。いや、沚くらい。

「ねえ、君ここらへんの子？」

「……？」一応

道にでも迷ったのだろうか。

キヤロキヨロ周りを見回しているその姿は、新しい土地に来て方
向感覚がつかめていない、何か的好奇心に満ちつゝる様子だ。

「半分家出みたいに出てきて、適当に歩いてきちゃったから迷っち
やつた」

「家出つて……」

「たまにあるだろう？ 親から逃げたくなることとか、反射的に逃
げてみたっていう気持ち」

好奇心か。

楽しそうな表情でそんなことを言われても、深刻性は感じられな
いし、冗談にしか聞こえない。でも、きっと家出をしてきた理由は
きちんとあるのだろう。

親から逃げたい。

反射的に逃げたい。

この人は同じ事しか言わなかつた。

必死にと言うわけでもないが、何かから逃れようとしている。

「あるな。俺も、逃げたい……」

親から、すべてから。逃げてしまいたい。

渉がいるべきあの家にいるのはもういやだ。そう思つていても、
家出をするという選択肢は今まで持たなかつた。

「……じゃあ一緒に逃げようか」

一瞬俺の表情を読み取ったあと、こやつと口元を上げ、
楽しそうな顔をする。

「どこに？」

「なあにいつてんだよ。家出に行き先を決めるな。行き当たりばつたりだからこそ家出になるんだ」

「迷ったとかいった人が」

ついつい楽しくて、クスッと微笑むと、うれしそうに笑顔になつた。

「名前は？俺は悠樹。朝倉悠樹」

「乃木坂歩」

「歩かあいい名前だね」

「そうか？悠樹もいい名前だ」

「ありがと。じゃあ行こうよ」

「ちょっとまつて」

一応、麻紀たちに家に帰るといつておけば、帰つてこないことを疑問には思わないだろう。

急ぎの用が出来たから、帰るね。そうメールを送ると、悠樹に向き直る。

「さつきまで、知り合いのところにいたんだ。家に帰るつてメールしておいた。あの人たちに心配はかけられないから」「家出は、心配かけせるものなのに」

くすくす笑うと、駅の方へと足をすすめていく。

遅れを取らないように、急いでついていく。

知らない人に着いていつてはいけないといわれてはいたが、この年になつて、いい人か悪い人かを見分けられないわけではない。だから着いていく。

それで何かを得られる気がしたから。

学校は、サボることになるが、行かなければいけないという使命感が強いわけではないから、気にせずサボる。

「俺が家出しそうと思ったのはさ、家にいつつもついて回るような人がいるんだよ。家をでるにしても着いてきて、心配性。そいつを少しは自由にしてやりたくて、逃げてきた。つていつても、俺が自

由になりたかつたんだけど」

「……その人に心配してほしいんだ？」

「ああ。歩は？ 逃げたいの？」

「あの人が、“俺”を心配するかどうか

「あの人？」

「親。さつきまで一緒にいた知り合いには心配されたくないかな

「複雑そうだな。まあ、見つからないうちに行こうよ」

「あ？ ああ

複雑なんかじゃない。

ただ、母が精神的病気になつて『いる』ようなものだ。
きっと、あの人は心配しない。むしろ、いなくなつたことで、自分には子供自体いなかつたんだ。今までのは夢だつたんだと、勝手に納得しようとすると。もしくは、歩という俺の存在のみを消すかもしない。

涉といつ子供は、小さい頃に亡くなつた。と。

「歩……？ ああ。私が帰ってきたときにはいなかつたわ。部屋にいるかもれないし、勝手に漁つて良こわよあんな子の部屋」「は、はい……」

歩くんの家に来て、ちょうど留守にしていた。ところおば様が出向いてくれたが、本人はいないようだ。

しかし、歩くんのお母さんも相変わらずだ。歩を無視し、歩を崇拜する。

昔よりもひどくなつてきている。

昔から多少歩くん贔屓ではいたが、ちゃんと“歩”という存在も認識しており、きちんと自分の子として愛していたはずだ。その中でも歩くんを持ち上げるだけ。ただそれだけだつた。親戚だつて。

歩くんを失つて一番精神異常がかからなかつたのは、おじ様。歩くんの父だつた。

ショックを受けてはいたが、母を慰める事で精一杯だつただろう。歩くんは一時期感情を無くしたかのように、あまりしゃべらなくなつてしまつた。母の方はショックで立ち直らない様子だつた。歩に冷たくあたり、ショックをすべて歩の責任にした。

時には歩くんに似ている歩くんを歩として接した。それについていけなくなり、父の方はでていつた。正式に離婚はしていないらしいが、別居。

本当は歩くんを連れていたかつたと言つていたが、母がそれを

許さなかつた。

渉として接していたから。

「部屋にもいない……か」

勝手に中に入ると、相変わらず整理整頓してある、きれいな部屋だつた。

ポスター や カレンダー など 装飾品 が 壁 に 掛か つて い る こと も なく、シンプルな部屋。

見回して いる と、玄関 の 戸 が 外 か ら 開か れる の が わか つた。

呼び鈴 で ある チャイム の 音 が 聞こえ なかつた こと か ら、歩くん が 帰つて き た の だろ う か。

しかし、おば様 の 様子 は 違つた。

「なつ、こまわり向し こ に 来た の よ」

(だれ……?)

入つて き た 人 だろ う 声 も、歩くん で は なく、違つう 懐かしさ が あ る 声 だつた。

「歩は いる か?」

そ う い つて 私 の い る 歩くん の 部屋 の 扉 が 勢い 良く 開か れた。

「あ……おじ様」

「梓ちゃん。その呼び方 は 止して くれ と い つて いる ジ ゃ ない か。背 中 が 痒く な る。と こ り で 歩は?」

いきなり 入つて き た の は、歩くん の 父 だつた。昔 か ら 何 か の 影響 で、おじ様 と 呼んで いる。

恥ずかしい とい つも 苦笑 を 浮かべ られる。

「私 も 会い に 来た ん で す け ど い なく つて」

「そ う か」

「そ う か じ ゃ ない わ よ。今 すぐ で て い つて。何 で も か ん で も 私 に 押 しつけ お い て こ ま わ ら 何 の 御用 が あつて?」

おじ様 の 後ろ か ら、早く 帰つて く れ と 急かす おば様。

昔とはかわっていた。

おじ様とは仲が良くて羨ましいくらいだったのに、こんなにモードトゲトゲしい関係になつているなんて。

涉くんが亡くなつたとき、一番おじ様がおば様を心配していたといつことも、すでに忘れてしまつたのだろうか。少しだけ、寂しい。「押しつけた？ 歩のことは、おまえが断固として渡さないつて言つたんじゃないか。学費も少しほとつてこる。でももういいだろう？ 歩はこつちで預かる。おまえのとこに置き続けたら、歩までおかしくなつてしまつ

「何よ！ 私がおかしいみたいな言い方しないで…」

「おかしいんだよ！ だから、歩に決めてもらおうと思つたんだ。俺たちでこんなことを言い続けても埒あちがあかない。歩にいたい場所を決めてもらおう」

そこまでいふと、おば様は何も言つ返さず、じつとおじ様の方を見つめていた。

おじ様は目線を外し、私の方に向き直る。

「歩がどこにいるかわかるかい？」

「私も探してるの」

「どこか行きそうな場所はわかるかい？」

「……私も最近まで全然会わなくつて、この前久しぶりにお会いしたきりで、全然情報がないんです」

「そうか……」

「ほ、ほら、本人の歩はいないんだから今日のところは帰つてちょうだい！」

黙つていたおば様が、いきなり怒鳴りだし、私たちを追い出してしまつた。

隣で小さくため息がこぼれるのがわかつた。

「おじ様……」

「あの人も困つたものだ」

薄らと見せるその苦笑は、辛そうで淋しそうだった。

「……歩くん、どう行っちゃったんだでしょうね」

「ああ、いつかは帰つてくるでしょう」

とは言つたものの、根拠がない。

その証拠に、あれから歩くんの家におじ様と行つても、留守のままだつた。

学校にも休むという連絡もなく、無断欠席がつづいているらしい。おば様に聞いても知らないの一点張り、日に日に弱っているのもわかる。しかし、その弱り方は歩くんが帰つてこないと現状ではなく、歩くんを再び失つてしまつたかのようだつた。

おば様は、歩くんを失つてから、歩くんを「歩」という一個人として見ることはなかつた。

「そういうえば、歩くん前に言つてたんです」

「何をだい？」

私たちはおじ様の家に一旦引き返し、歩くんについてお茶をのみながら話していた。

その時、不意に歩くんのことを、歩くんが言つてこたことを思い出した。

「歩は俺が殺したつて……おじ様、何かしりません?」

「歩が……? 確かにあの場にいたのは歩だ。一応その考えも思つて、調べてはいたらしいけど、歩の体がどこにあるかわからぬいかぎり、それは難しいだらうつて。歩も、何を思つたんだ……何を見たのか、教えてほしいんだけどな」

「神様に好まれたとか、俺は嫌われ者だとか」

「あのこと知つてるのは歩だけ。一人で何もかもを抱え込んでいるのか。嫌われ者だなんて」

「全部話してくれれば良いのに……よし、もう一回行つてきますね!」

「ああ俺も行こう」

「私たちは立ち上がり、再び歩くんの家まで足を向ける。タイミングというのは大切だ。

一つの事をするのに、何かのタイミングをずらしてしまえば、一
つずつずれてしまい、予定とは崩れてしまう。
一度目の再来は、ずれることなく、新たな情報を手に入れること
ができた。

それは、家の前の出来事だった。

私たちがついた頃には、私たちのように追い返された人がいた。
男の人一人に女人の人一人。私や歩くんよりは、年上みたいだ。
高校生くらい。歩くんの学校の友達には見えない。

「あの……」

「……？ 君は」

「あ、私は歩くんの幼なじみで」

中でも一番背の低い、そばかすのある男性が首を傾げながらも聞
いてきた。

つい緊張して早口になってしまった。

「歩の父です」

「お父さん、ですか」

「あ、この間は服をお借りしました」

「服？」

あつと思に出したかのよう、「そばかすのその男性は、軽く礼を
した。

なんのことかわからず、「おじ様は首を傾げた。

「この前借りたんです」

「そうか。でも、まだ破棄してなかつたんだな
「え？」

「いや、なんでもない。役に立つたならいい」

「あなたたちはどうしてここに？」

話をすらして私は聞くと、女性が積極的に聞いてくる。

「歩くんに会いに。ビルにいるかしらないかしら？ 少し用があるので」

「どういう知り合いなんですか？」

「それは言えないけれど、簡単に言えば仲間。ね」

「なんの？」

「それは答えられないわ」

「答えられないことなんてあるんですか」「あるわよ」

強気で言うその女性は、何かを急いでいるように見え、いつかに感じたいやな予感を再び感じさせられた。

「悪いけど、知らないかな？」

フォローするように、背の低い男性が前に出でくる。

「知りません」

「そつかあ。なら仕方がないね。日を改めるよ」

「ちょっと止！？」

女性が再び声を上げたとき、一瞬その止と呼ばれた背の低い男性が、驚いた。ところよりも、こきなり思い出したという顔をしたと思えば、私に指を差してきて叫ぶように口を開く。

「君、梓ちゃん？」

その言葉に、私はもちろん、サイドにいた二人まで驚いている。「止、知り合い？」

背の高いほうの男性が、首を傾げてそう聞く。

「あれ、君、雨降ってるときに転んでエメラルドグリーンのアクセサリー落とさなかつた？」

「……なんでそれを！」

確かに、雨の日にそれを落とし、拾つたそのネックレスを歩くんに拾われた。

そこから私の人生、再び変化が起こりだした。そんな気がする。

「いや、一度印象深かつたから。だって君、どこかであつた気がしててさ。どこかであつた？」

「沚、その口説き文句は古い……」「

呆れたように背の高い男性が言つ。

見たことなんてない。

あるわけない。

はつきりと言えないはずなのに、会つたことがないといつのは確実だった。

「歩くんと君、どこかであつてる……そり……麻紀の家でだ!」思い出したように、いきなり女性の方に指差し、声を上げた。

「わ、私の家?」

「麻紀といつのは、急いでいるような表情を見せていた女性らしい。」「うん。でも、あいつも記憶に無いって言つたんだよな……」

「夢とか?」

「あー……! それだ! そう! 草原で、風になびかれて、杵島と麻紀と、歩ともう一人の女の子がいた。その女の子が君! あー! やつと解決」

モヤモヤしていた何かが弾けだし、清々しい笑みを見せている。「そのメンバー……もしかして」

「麻紀と呼ばれていた女性が、何か引っ掛けたかのように、眉間に皺を寄せた。

「え?」

「何もわからないかのように、沚といつ人は首を傾げる。チラツとおじ様の方を見ても、わかっている様子もなく、私も首を傾げる。」

「あなた、自分以外の自分の存在つて知つてる?」

「自分以外の自分……に、二重人格!?」

少しだけ、引っ掛けた事はあつた。

ネックレスをなくして、どうすればいいのか迷つてゐるとき、冷静に判断したのも、何かいやな予感がして、歩くんに会いに行く案を出したのも私ではない。不意に頭をよぎつたヒーリンといつ名の声にしたがつただけ。

その声に責任を押しつける気はないが、不意に来るその声が、自分に関係していることは確かだ。でもそれを、この人たちに言う義務なんかないはずだ。

「いえ、わからないのならいいの。ごめんなさい。私たちはもういくわ」

麻紀という女性は、そういうながら強制的に沚たちをこの場から去らせようと、腕を引っ張つて私たちの視界から消えた。

おじ様は何を言うことなく、茫然としていた。

「いないうですし、私たちもいきますか？」

「あ、ああ、そうだな。今日は帰るつ

「えー？」

不意に意見を述べた麻紀に、部屋によつやく戻ってきた俺は驚いた。しかし杵島は「でも、そうだと決め付けるのは早いんじゃないのか？」と、驚く様子を見せずに、冷静な口振りで言つた。

「可能性の話です。あの女性に力が無いとも言いきれない。なにせ、なにかを隠してゐるような間があった」

「麻紀の根拠も結構あてにならなくも無い」

「止……おまえは結局どっちの味方なんだ……？」

呆れるように杵島は肩の力を抜いてため息混じりに言つた。
疲れた足を休ませるよつにベッドに腰を下ろし、悩む。麻紀が言ったのはこうだ。

夢に出てきた人すべてが、力を持ち、なおかつ今のところ“証”を持つものだと思われてゐる。だとすれば、先程の女性に力が有つてもおかしくはない。そういうのだ。

しかし、それは次々にタイミングよく、力を持つものばかりと遭遇しているからそう思つてしまつのかもしれない。そもそも思うが、可能性がまったく無いとも言えないと考えてしまうのも事実だ。

とりあえず杵島は、明日の学校に備えて帰り、俺も早めに布団に入つた。麻紀の部屋からも、電気が漏れていないとこからして、眠つてゐるのだろう。

眠りたくても眠れない。歩のこと、梓といつ女性のこと。どちらにしても謎ばかり。

当分眠れそうもない。

次の日、眠い体を必死に動かし、よつやくとこう疲れ具合で学校につく。

前に、歩が会つたといつて、髪が長くてクルクルしていく。身長一六〇もないくらい。そういう女性はたくさんいるようだが、あの店に通つているのと、いやな予感がしたという証拠があれば平氣だらう。

いつだつたかに転入してきた恭恵という女性。その人も、そのような髪型をしていて、尚且ついやな予感がした。勘というのはそれだけで十分だ。

しかし、あれから見かけなくなつたのと、関わつてはいけなさそうだから、探すこともしない。でも、それはこちらからの話だ。

「あ、辻君？」

向こううだつて、俺の存在を知つていてもおかしくはない。机が一つ、教室の中から消えたのを確認したとき、聞きなれないが、一度会話をしたこのある声。

「恭恵……だつけ？」

「ええ」

行方不明で、退学といつ形をとられたその教室は、少しだけシーソンとしていた。

学校側は、退学までしなくともと言つたのだが、親が、いきなり姿をなくした息子に怒りを見せ、迷惑はかけられないと退学届けを出した。

不可解な行方不明。

各地で起きていたからなのか、ついに不可解だとテレビや新聞で報道された。

誘拐や拉致といつ方向でも搜索が開始されてしまう。
しかし、その真相を知っていたとしても、口を開くには抵抗がある。

杵島は、会ったことがあるのか、恭恵の顔を見た瞬間、目を見開いたと思えば、俺の腕をつかみ、勢い良く引き寄せられる。

「お前、この学校の者だったのか」

「あ、確か杵島君って言つたわね？」

喧嘩を売るかのように言つた杵島の言葉に、俺と会話をすむときとは違う、何かの威圧感を持つた恭恵の口調。

「杵島……？」

「こいつ、敵だ」

「……捕まつたとき……？」

「ああ。近くにいた」

杵島と話してみると、不意に恭恵は口を塞ぐと同時に、口を挟んでくる。

「残念。言つちゃうんだ」

「言われなくても、その口調の違いでわかつていたと感づつよ」

「ひみつねるよつて、じつと恭恵の方を睨み付ける。

前はもつとおことやか……とは違うが、もつ少し学生らしさがあった。

「ぞんねん」

「……」も残念そうでもなく、何かを楽しみ、弄んでいるような表情は、敵にも味方にもしたくなんかない、信用ならない素振りだった。でも、もし敵だとしても、どうしてこの女、恭恵は俺たちを捕らえようとしないのか。慎重に相澤みたぐ、仲を近くしてからとしても、杆島と恭恵は、敵だということを確認済み。しかも、あのバーを使い物にならなくしたのだって、俺たちだ。特別アクションを起こしてこないのも不思議だ。

特別アクションを出せないとこ「」ことは、そのことに積極的ではないのか。それとも、捕まえる気はないですよと思に込ませるつもりなのか。

結局どうひらなのかわからず、「」、恭恵は「」かへとこつてしまつた。

「……あの女、敵だと思つか？」

思つてこいる」とは同じじりじへ、口を開けたとしたとき、杆島が同じ事を口にした。

下校時の道路は、すこく淋しく、すこく寒そつだつた。
秋になつてくる「」はあるが、それ以上に寒そつ。なにかが足りないとこ「」を、伝えてくるよつた。

「わからない。何を考えてこいるのかも、何をしようとしたいのかも」

「」の先に足を突つ込んでよいものか、今、関わりかけてい「」の状態から手を引くべきか。しかし、手を引くところのはびつこつ」とか。

ただ今は、居るべき場所にいて、行くべき場所に行つてこいるだけ。
「」く普通の生活を送つてこいるだけだといふのに、今までとは違う道

が現われ、必然的にそちらに向かわされているだけ。ただそれだけだというのに、何を間違ったことを行つていてるだろ？

いきなり制度が変わり、民が政府に振り回されているだけのように、俺たちもいきなり作られた道を歩いているだけ。逆らうことのできない、非現実的な世界へと。

「きつと、あいつが……いや、あいつらが考えていることがわかつたなら、こんなにも先を恐れることなんてなかつたんだろ？」

「杵島、恐い？」

「ああ。何に振り回されてるのか、何に足を伸ばそうとしているのか」

杵島が恐いと言つのは、凄くめずらしいといつ印象を受ける。けれど、それが当たり前な気がして、寧ろホッとする自分もいた。ゆつくりと足を止め、空を見上げてみた。まだ見えない星たちを無理矢理見るかのように目を細めてみた。

なにか、懐かしいものを見ているかのような、安心感があらわれる。しかし、どこか不自然な。

「止？」

立ち止まり、空を見上げている俺に話しかけてくる。
顔を戻すことなく、空を見上げたまま口を開いた。

「空に、赤い玉がある」

いつだつたかに見た、真つ赤な月を思い出す。しかし、あれは月なのか。

皆が知っている月は、銀に輝き、夜をも薄暗く照らし続ける。しかし、その隣にある、あの月は赤く、到底夜を照らす力なんかもつ

ていない。だから、玉。

「赤い……？」

「うん」

「今見えているのか？」

「……うん」

「赤い玉は見えないかな」

結局杵島には見つけることができない、そんな玉だつた。

ただの幻覚か。

本当に見たのだ。といつても、次に目を離し、再び見てみるとそこにはもう、隠れてしまつたかのよう見つけることはできなかつた。

こうして、部屋を真つ暗にして、窓から覗き込んで、見つかる様子はなかつた。

前には、眠れずに……いや、不意に目が覚めたのか、喉が渴いて飲み物を喉に通した後、気晴らしに外に出て空を見上げると、そこには月と真つ赤な月が肩を並ばせていた。しかしあれは、月ではない。言い切る理由はないが、そんな気がした。

（何かの予兆じゃなければ良いんだけど……）

麻紀に相談をしようかとも思つたが、ただの勘違いかもしれないと思い、今日は止めておこうと踏みどどまる。

もし次、見たときでもと先のばしする。

杵島にも見えていなかつたとすれば、麻紀にも見えていないとい

「う」ともあつてゐる。

「外つて、気持ちがいいね」

いつたい電車賃はいくらかかったのだろうか。

巻き込んだからと、悠樹が電車賃を出してくれた。

行き先もわからずついてきた場所は、都会というイメージではなく、住宅街。というイメージ。遠くには海が見え、バスが通っているらしく、今悠樹はそこに「行く」バスの時刻表を眺めていた。そんなとき、ぼそりと言つたのだ。今まで滅多に外に出ない人のよう。

「ああ。落ち着く」

「歩も?」

「うん」

「今は、色々進歩して、バスも電車も乗り心地がよくなつてゐる。空気は重く感じるけど、世の中は便利になりました。電車があれば、どこにもいける……」

「……なんか悠樹、おじさんくさい……」

まだ若いだらう、「う」ともあつてそんな古そつた口調をするのだらう。大人びてているところによつては、その場にいたかのよつた口調。

「やうだつた、うびうする?」

「……は?」

いきなり振り向き、そんなことを楽しみながら聞いてくる。

「もし、俺が八十年とか九十年とか生きる奴だつたら、どうする?」

「……そうだつていうんだつたら、そななんだろ? どうするも何も
あるのか? あ、あえていうなら、その若造りのコツを教えてくれ
! つて言つね」

「……歩つて変な奴……」

「だつて、八十年とか生きてるへせに、その若そな面だろ? だ
れもが羨ましがるだろ?」

「どつか……ずれてる」

そういうながらも、嬉しそうな顔を見たすぐにバスは来て乗車し
た。

三十分もしないうちに到着し、そこでもやはり悠樹が支払いを二

人分おわらせ、下車した。

ついたそこは、美しく透き通つた海だった。

嬉しいのか、悠樹は子供のように砂場を駆けだした。

「あー、待てよ転ぶぞ」

と言いながらも、綺麗な海に見入られるかのよう、俺も走つて
追いかける。

裸足になることなく、靴のまま海に入る悠樹を見て、つい田を見

開いてしまつ。ズボンの裾なんか、水分で重みが増しているのが見て分かつた。

真似せぬよ、俺は裸足になり、裾をめくつて中に入つていく。その頃にはもう、腰まで浸かるほど悠樹は奥へと入つていた。

「歩ーー はやくーー」

楽しそうに二つ巴を向き、大きく手を振つてくる。

「……到底、八十歳や七十歳つて年齢の奴とは思えないな

ぼそりと聞こえなによつに咳き、ズボンを捲つたところまで行く。

「歩ーー」

「これ以上行つたら濡れる。悠樹も服どつあるんだよ
あー……」

考えていなかつたのか。

少しだけ呆れるが、子供みたいで可愛い……といつてしまえば悪いのだろうか。

「早くあがつてここよー 風邪引くぞ」

「うん……わッ」

足をこひらに向けてきたとき、すべつたのか悠樹の姿が消えた。

反射的になのか、涉のことがあつたからか、足は濡れることなんか気にせず、悠樹のもとへ向かつた。

「悠樹ーー？」

状態が分かつていなか、バシャバシャと手を海面に出し助けを求めていた。その手をつかもうとして気付いた。

少し浜と平行に横にずれるだけで、ほんの少しの段差があり、深さが変わる。水深が変わったその場所に丁度悠樹は入ってしまったのだ。

「悠樹ー！」

腕をつかみ、グイッとかみあがると、必死に呼吸をしようと、必死に上を向いていた。

「あゆ…… ゲホッゲホッ」

少し海水を飲んでしまったのか、苦しそうにむせ続ける。右手で背中をさすつてやりながらも、浜の方まで誘導してやる。

「悠樹……！ 大丈夫か！？」

浜に寝かせると、俯せになり海水を吐き出した。

「悠樹……」

「ごめん…… びっくりして……」

まだ落ち着いたわけでもないのに、悠樹は謝つてくれる。

それでも怖かった。

近くにいる人が苦しむ姿が。

また、姿を消してしまつんじやないのかと。

「歩……？」

茫然としていると、息が整った悠樹が顔を覗き込んでいた。

「あ……？」

「歩は平氣か？」

「ああ、丈夫だから

そうかといつた悠樹の顔は、溺れかけたといひのと、子供のよう
に楽しそうな表情だった。

あのままでいたら風邪を引くんじゃないかと、予想はしていたが、本当に風邪をこじらすという面倒な状態になつた。

しかも、一番ひどいはずの悠樹はピンピンしている。

風邪を引いたのは、俺。

しかも、着替えとして、パークーと短パンを持ってきていた悠樹は、それに着替え、いつたん俺を置いてバスで駅の方まで行き、二人分の服を調達してきて、それに着替えた。

どこのまで所持金があるんだか。

「「」めん歩……」

「ばあか。おまえのせいじやねえよ」

もつそろそろ一皿がおわらしつな夕日。

砂浜で体を温める。

潮風が冷たく、すぐに冷える俺の体を思い、悠樹は口を開く。

「向こう戻つてホテル探そつか」

「でも金」

「あるから」

「でも……いや、悠樹行つてなよ。もつ少し海見てるわ

「でもこの熱で」

そつ。くしゃみや咳がされることもなく、ただ高熱だらう状態。体温計できちんと測つたわけではないが、悠樹が手を額に当てるかぎり、高熱があるらしい。

「すぐ治る
「だったらなおさらからまことよつへ。ね？」

やうやくやつとする悠樹。その奥から、女性の姿が見えた。
足は「ひひにむかい、不審者をみるよつて、元気わざい田で見られ
ている。

「悠樹……人がいる

「え！？ だめえ！ 歩をつれていかないでえ」

「はい？ どんな状態だよ。後ろ！」

誰かが迎えに来たとでも思ったのだろうか、しがみつく悠樹を離
しそういふと、首を傾げながら後ろを振り向く。

女性も気付いたことに気付いたのか、少しだけ困ったようだった。
足を進め、近づいてきたと思えば、口を開いてくる。

「……で何を？」

年齢はすでに、四十をすぎているようだった。化粧のおかげか、
遠くから見ればもう少しだけ若めに見えた。

「あ、歩が……熱を出しちゃつて……」

「熱を……君たちはどこの……」「……のやじやないわね」

「ちょっと遠くから来てて……」

「泊まるところね？」

「……まだ」

「……の、悠樹と女性の会話を聞きながらも、内心せりせりとキドキ

状態だ。

家出のことをこつんじやないかと。

「親は？ 保護者の方は知っているの？」

「あ……」

意外と素直な奴らしい。

嘘でも、知つていると答えておけば、怪しまれないでうまく事を運べたかもしれないのに。

「知らないのね。私の息子と娘もね……行方不明なんだよ。だから、その部屋でよければ貸してやれる。おいで」

「あ……ありがとうございます」

「私も仕事で飛び回つてたから、子供が行方不明になつたのも、家出だと思うの」

隣の部屋から聞こえる声。

女性と悠樹が話をしているのだ。

熱を測つてみれば、三十八度少し。すぐにベッドにつれていかれ、暖かくしていなさいと。

この部屋に入ったとき、一番に目に入つたのは、一度力強く丸めたような名残がある、古い雑誌。だれかがこれで叩かれたのだろうかという想像をする。

「息子さんたち、何才くらいなんですか?」

「17才かなあ」

(……泣と回じへりこ……?)

聞こえてきた声に反応し、少しだけ考えてしまつ。学校はどうしているのかや、どうして家出をしたのか。どうして一人ともいなくなつたのか。もしかすると、渉のように……? 何かがわかるかもしれない、ベッドから出て部屋の中を歩き回る。

机の上には、小さな女の子と、そのサイドに立つ男の子一人。その女の子には、どことなく見覚えのある人の面影があった。裏を捲るように見てみると、下の方に立つてゐる順番か、男の子らしい名前から女の子、男の子。といつ順番に並んでいた。左から、畠之、麻紀、優貴。

(……麻紀)

聞き覚えどじろか、見覚え……いや、会つた。

ここにくるまでは一緒に行動していたようなものだ。

しかし、麻紀という名前は他にもいるかもしれない。そう思つたが、その隣の『優貴』という名前、兄の親友であり、好きであつた人の名前。

といつことは、片方は最愛の兄なのだらつ。

少し考え、その写真が入るよつに携帯で写真を撮つた。

優貴はいなくなつたといつた。兄もいなくなつたといつた。といつことは、この写真のなかの生存者は一人。

『あの母親も可愛そうなもんだ』

(え?)

聞こえてきたのは、渉の声にそつくりなシャベットの声。今まで静かだったのが、今になつて不思議に感じる。

『一人は血の繫がりがないにしろ、三人とも姿を消した。優貴の方は知らないが、昌之つてやつはこの世にはいないことを知らされてはいない。ただの行方不明なだけだ。なのに、麻紀までも近くにいなければなら、何のために仕事をしていけばいいのかも、支えもない。生死も知らずに、捜査届けもだしていらないだろ？』

（出してないなんてわかるのか？）

『なんとなく』

（根拠なしか……でも、麻紀は何でこっちに来たんだ？）

『泣がいるからだろ？』

（……そつか）

もし捜査届けを出していないにしたとして、どうしてか。心配をしていないのか、何か、帰つててくれるという確信があつたのか。今の状態で考えられるのはそこまで。熱のせいか、頭が働いてくれない。

再びベッドに潜り込み、耳を澄ます。

もう会話は止まつてしまつたのか、シーンと静まつてしまつた。

足音も、物音もせず、逆に不安感をよぎらせる。そのせいが、自分に高熱があることを、直に知らせるかのように体全体が重み掛かつた気がした。

熱が出たのは何年ぶりだろうか。

少なくとも渉がいなくなつてからは、熱があるという実感はしない。

感じていられるほど身体的にも精神的にも、余裕がなかつた。今になつて熱をだしてしまつということは、どこかに余裕を見つけて

いるといふことなのか。

不意に携帯の存在を思い出す。

濡れるつもりではなかつたから、着替えたときごべりやべりやになつていて、使えそうもない、タオルで拭き、放置している。眠れないことをいいことに、再び布団からでて携帯を開く。

元々、電源を切つていたから、確実に使えないとは言い難い。

ゆつくりとパワー・ボタンを長押しする。

ボタン側がオレンジに光り、ゆつくりとウエイクアップ画面が開くのが通常だが、やはり壊れたのか、画面は真っ暗なままだった。でも、すんなり受け入れることができたのか、急激な睡魔に襲われ、ベッドにそのまま伏せてしまつた。

「ど……て……あ……」

遠くから微かに声が聞こえる。

耳障りがよくつて、つこつこ一度目の違つ夢を見てしまつて、それがして、でもそれも悪くないかななんて。

よく耳を澄ましてみると、その声は悠樹の声だとわかる。

「……わかつたよ

何が分かつたのだろう。

バタンと、遠くの方から玄関の扉が閉まる音がした。

そしてまた、睡魔に襲われ、眠つてしまつ。

今起きなかつたのが、幸運のか不幸だつたのか。

次に田が覚めると、昨日の女性が迎えてくれた。

「あ、おはよう」やむこます。
「はいおはよう」
「すみません、少しゆつくりしそぎちゃいましたか？」
「気にするな。おまえは病人、私は拾い人。最後まで世話をするのが当たり前……なんだけどね」

力強く言つた割に、語尾は弱々しく、何かがポカンと開いてしまつたかのような、素朴感。
首を傾げながらも尋ねてみる。

「何があつたんですか？」
「ん……あんたの相方がね、早朝に迎えが来てさ」
「え……」

(悠樹に迎えが? どうして……)

「まあ、それまではよかつたんだけど、少し揉めちゃつてね、どうしてここにいるのがわかつたんだつて。まだ、歩がいるから待つてくれつて言つてたんだけど、向こうは聞いてくれなくつて、なんだか歩くんのことも知らないみたいだつたし」

「あ……知らないと思います」

「え? 友達でしょ?」

「でも、親とはあつたことないですし、実はあつたのも家出するときで……っていうか、家出中の悠樹と会つたというか……」

「つまり、面識があまりないって事?」

「言つてしまえば……」

「やう。こしては仲良しかうだつたけど……つて、やうじやなくつて、熱は?」

いいながら手を額に当ててきた。少しひんやりするその手は、俺の左腕にも似ていた。

「大丈夫そうね。それで、あなたにつて、お金を渡されたのだけれど」

手渡された茶封筒は、妙に厚く、硬かつた。封は閉じられておらず、何が出てくるのかが不安になる。

お金というのだから、他のなにものでもないのだろうが、なんだらつかこの厚みは。千円札がいくら入っているのか、想像しただけで気がとおくなる。

そつと中を確認するため、束のまま少し顔を出せると、想像よりもゼロの数が一つ多かつた。

「万札かよ!」

余計に何かの重みがかかった気がした。

こんな大金、手にしたことがない。少なくとも、二十枚は確実にあるといえるが、それだけでもすごい。考えてみれば、場所を突き止め、迎えにきてもらえるというのだから、相当な坊っちゃんのかもしけない。

しかし、心配を掛けたかつたといつてはいたが、こんなにも早く迎えてくれたということは、相当心配されたのだろう。誰に心配されたかったのかは知らないが。

でも、元々心配性らしいし、こんなことをしなくて、分かつて

いたのではないか。

逃げたいとも解放されたいとも言つていたが、矛盾していることに今頃気がつく。

「変な奴」

「お金くれることが?」

「あ、いや。なんていうか、矛盾している奴だつたなと」

「友達なんでしょう? いろいろなう、地元帰つたときでも返してやつたら?」

「言つたじやないですか。家出中の悠樹に会つたんで、学校とか、

近所の人とかじやないんすよ」

「ふうん。あなたのほうがよつほど変な奴……だよ」

「え?」

「あまり悠樹の話も信じてなかつたけど、あなたの話を聞くところ本當らしいわね。あなた、悠樹の家出に付き合つてあげてるんでしょ?」

「え?」

「道に迷つて、助けられてそのままつれできちやつたって

「ちがつそれ、なんかちがつ」

悠樹が言つたことは間違えないのだろうが、そのままでは、悠樹がすべて悪いかのような言い方でないのだろうか。

どちらが悪いとこいつでもないといつ事を証明するため、出合いからあつたことまで、だいたいの話をした。

すると、少し首を傾げたときもあつたが、ある程度納得するよう

に首を縦に振つた。

「なるほどね。要は一人とも、誰かに心配してほしくてたまらないのね」

「つて事になるんですかね」

「あの子達もそうだったのかな」「え？」

「私の娘たち」「ああ

「“ああ”？」「え？」

「いや、知ってるの？」「え？」

「ごめんなさい。昨日寝てたら聞こえちゃって」「あ、隣で話してたものね。聞こえて当たり前よね」

なんて薄ら微笑むけれど、相当心配したのだらう。心配しながらも、帰つてくると信じて待つてゐるのか、もう、帰つてこないと思つてゐるのだろうか。ベッドからようやくおひつ、机の上にある写真を手にする。

「この人ですよね」

「ええ。一人は近くの子で畠之……息子の親友なんだけど、その子も行方不明。それは何年前だつたかしらね……優貴つてこの。あなたの相方と同じ名前ね」「相方……」

「少しの間でも人生をともにしていれば、相方。でしょ？」「ですね」

「娘は麻紀。こつともお兄ちゃんについて回つて、仲のいい兄弟だつたわ」

「羨ましいです。きっと麻紀さんは、田的があつてこいを離れたんだだと思います」「だといいわ。でも何で娘のみ？」「……」

「誘拐とか?」

「ま、まさかあ」

なかなか歩が帰つてこないことを、三人で理由を想像し、楽しいことから、辛いことまで考え尽くしていた。

探したいのは山々なのだが、あてもないし思いつきもしない。家の周りを歩いても見たし、街中で梓という女性を見つければ、尾行したりもした。

歩の父だという男と喫茶店であつては、何かを話していたりもしたが、話している内容までは聞き取ることができなかつた。そのため、特別よい情報を得ることもできず。

メールを送つても、返つてくることもない。ただ、じつと待つていることしかできないのか。

杵島の時にあつたように、誰かにさらわれたということも考え、可能性のある恭恵に勇気を出して聞いても見たが、何の話か解らない様子。真意を知る方法はないものの、日が経つにつれて心配になるばかりだ。

仲間だから余計に。

仲間だと、言つていいのかも解らずに。

「変なことに巻き込まれてなければ良いけれど……」

「そうだね。でも、あの子だったら大丈夫よ」

「え?」

「色々心配はしたけど、結構自分で良いことか悪いことが判断でき

る子だもの
「だといいけど」

麻紀の言ったことに納得がいかない。と言つわけではない。むしろ、首を縦に振れる言葉だとこいつの、元ののりで、何かが引っ掛けつてしまつたかもしれない。

何かを注意させるよつた、お兄せんの声。冒々の声。何かが始まつてゐるといふ事は、警戒しなければならぬこと。もしかしたら、その警戒しなければならぬことに、引っ掛けつてしまつたかもしれない。

前回は助けてくれた。なりが、つまはおれらの力で何か、役に立てればと思つてゐる。

「そういえば、辻さん氣付いてると思つナビ
「ん？」

麻紀がふと思つ出したかのよつて口を開いた。

「歩くんの左腕動かないじゃない」

「ああ、記憶にはないな」

「動かせないつて本人も言つていたけれど、力を使うときは動かしてゐると言つうか、左腕が力の源である。その腕が日常動かないのは、罪の証だつて言つていたの。何か知らない？」

「罪の？」

「うん。で、思つたんだけど、あそこであつた、梓……でしたつけ？あの子なら、すべてを知つてゐる氣がするの。だから、尾行じやなくて接触しようと思つてゐるんだけど……」

「……うん。そうだね。尾行しても特に変わりはなかつたし、寧ろ、どうしてあの子が歩くんの父と一緒にいるのかも気になつた」

次の日、学校があわつたとともに、麻紀が尾行している先、梓という女性の学校に杵島と共に向かった。

「麻紀、様子は？」

梓という女性の学校につくと、校門が見える公園に麻紀がいた。近寄つて様子を聞くと、まだ出てきてはいないらしい。

一緒になつて眺めていると、生徒は、バラバラに出てきては、誰も出てこないと、疎^{まば}らに生徒の帰宅がみられた。

じつと校門の周りを眺めていると、予想から外れた人の姿が現れた。

「沚、あれつて」

「あ、ああ。歩くんのお父さん……だな」

「援交……？」

「杵島さんつて結構変なこと言つ人だつたんですね」

ため息混じりに言つた麻紀に、ついつい俺は笑つてしまつ。

「あ、出できた」

連絡を取つたのか、タイミングよく梓という女も校門のところまで出てきて、何かを話したかと思えば、いつもの喫茶店があるほう

に足を進めていた。

見失わないように、一定の距離を保ちながらタイミングを見る。何気なく世間話をするように、笑い声がたまに聞こえてくる。人通りがなくなってきたとき、おれらは足を早め、一人の前に立ち止まる。

「『めんなさいね？ ちょっといまいいかしら？』

「あなたたちは……」

いつも一人が行く喫茶店に俺たちも同行させてもらい、三人ずつ向かい合って六人座りの席に、梓と歩の父。俺と杵島に麻樹の五人で利用し、そこで話を聞くことにした。

「あなたたちは歩くんとはどんな……？」

「前にも言ったけれど、『仲間』よ」

「友達とは……違つんですね？」

「ええ」

梓の質問にすべて麻紀が答える。

麻紀いわく、先に質問されたほうが、あとあと聞きやすいらしい。仲間だといった言葉に、梓と歩の父は不審そうな瞳を見せる。

「どうして、歩くんを探しているのか聞いても？」

「それも、仲間だから。よ」

「じゃあ、いま歩くんには何が起きているの？」

「私たちにも解らない。歩くんの居場所が解らないかぎり」

「あなた方といるのは、歩くんは合意で？」

「ええ。巻き込んで悪かったとは思つてゐるけれど、歩くんの意志のもとよ。そのことについてあなたは口出しきれないはずだわ」

そういうてしまつと梓は黙り込み、怒られた子供のようごムッシとしてしまつた。

幼なじみだからこそ、自分が知らないことを他の人が知つているのが気に入らないのだろう。いわゆる、嫉妬というものだ。

「こちから聞いても良いかしら？」

「なにかな？」

梓が口を開かないのを悟つたのか、歩の父が答えた。

「歩くんの左腕が動かない理由を教えてほしい」

質問したのは俺。

ちらりとみると、私はもうじゅべらなこと言つたかのよう黙つた麻紀がいたからだ。

梓をいじめて満足したのか、疲れたのかは解らない。前者な氣もするが口にはしない。

「……それは……」

最初に答えにくいものをしてしまつたのか、歩の父は目を逸らすように首を傾げてしまつた。

解らないや、知らないという様子ではない。なんだか、言つてくいという様子だった。そこで口を開いたのは、梓の方だった。

「事故よ。不可思議なね」

「不可思議な？」

杵島が聞き返すと、いらつきだしていいる梓がうなずく。

「歩くんは双子だったのよ。すく仲が良かつた。なのに、ある日突然涉くん……片割れが姿を消した。左腕を残してね」

「……え？」

その梓の言葉に、ピタリと固まる。

「不可思議でしょ？　すぐ近くには歩くんしかいなかつたわ。意識を失つて倒れてたわ、その残した涉くんのものだらう左腕をつかんでね。しかも、血が出ることもなく、肉が崩れることもない。歩くんから引き剥がすまでは、脈も打つていた。生きてるよに……」

そこで一皿言葉を止めると、その場は静まり返つたかのように、耳に入つてくるのは喫茶店が流す、耳に良いオルゴールだけだった。梓の言葉を頭の中で繰り返す。

“ワタル”という言葉は、以前に一度聞いたことがある。あれは、歩くんに初めて会い、杵島を助けに行く話し合いをしていた時、ボソリと聞こえるか聞こえないかの声でつぶやいた。

何か意味があるだらうとは思つていたが、まさかいなくなつた双子のことだとは思いもよらなかつた。

「その時のこと歩くんは……？」

「……誰も聞けなかつたの……。何を聞いても、口を開くこともなかつた歩くんは、何を考えて何処を見ているのかもわからなかつた。すべてを知るための“何か”も見当たらなかつた。だから、歩くんは何も言えなかつたのかも知れない」

「それが罪の証として今も気に病んでいるつて事……」

「そ、それ、誰がいつてたの！？ 歩くん？」

何か思い当たるのか、麻紀が考えながら言つた言葉に、梓は身を乗り出すかのように、声を荒げた。

少しの間があつて、麻紀が口を開く。

「あなたも事故の真実は知らないのよね？ 何か聞いていないのかしら？」

「自分のせいだつていうようなことを……」

「でも、そのいなくなり方つてもしかして……」

「何か解るの！？」

「選んでくれなかつたんだよ……シャベットが」

不意に聞こえた、聞き覚えがあり、探していた本人の声が、通路から聞こえてきては、五人とも顔を上げる。

「ここに来るのは思わなかつた。こここの場所が解るとは思わなかつた。いつのまに来たのか。いろいろな疑問を持ちながらも一番に口を開いたのは、梓だつた。

「歩……くん……ー？」

「今まで、どこに……」

続いたのは麻紀だつた。

俺も杵島も、言葉にならないかのように口をパクパクさせ、茫然と椅子に座つていた。

軽くため息を吐きながらも、梓側の空いている場所、歩の父の隣に腰をおろす歩。

「久しぶり……父さん」

「さ、探したんだぞ！？ 何処に行つていたんだ！？」

怒鳴り付けるように、歩の右腕をつかみながら「父。なぜだか、返事を聞いたわけでもないのに安心した。」Jの人は、本当にお父さんなんだ。と。

嘘を吐かれていると思っていたわけではないが、歩の母があのような態度であつたから少し心配していた。それを、ホッとした今気付いた。

「ちょっとね、家出をしてみたんだ。さつき帰つたら、無駄だつたことを知つたけど……」

なんて苦笑する歩の表情は、淋しいや悲しい。苦しいなどという負の表情ではなかつた。どちらかといえば、すつきりしたような様子だつた。

でもそれに気付いていない様子の父は、不安そうな表情。何の連絡もなく姿を消したんだ。気持ちもわからなくもない。

「無駄だつたつて……」

「無駄だつたよ。いたつていなくつたつて、あの人に特別な問題もないんだ」

（いても……いなくとも……）

そんなこと、親に言われたときには、自分はどうするか。考えただけで不安になる。

いてほしくないのなら、いないでほしいとはつきり言つてほしいというのが本音。それでショックを受けないとは思えないが、あいまいな言い方をされるよりも全然良いような気がする。

でもなぜそんなことを、すつきりしたような表情で言つているのかがわからない。歩は、いないうちに何を得たというのか。

「歩、一緒に暮らそう」

もちろん父だ。前々から考えていた様子。いや、驚く様子もない梓を見るかぎり、相談をしていたのかもしれない。

「いやだというわけじゃないんだその言葉。でも今、あの人から離れたら、何だか負けた気がしてしまったんだ。だから、まだ俺はの人から離れることはできない」

「歩……」

言われたこと、驚きや動搖を見せることがなく、はっきりとお断わりを入れる。やはり、今までの歩とは何かが変わって見えた。

「何処に行つていたんだ?」

「少し遠いところに逃げたくなつてね」

本当に高校生には満たない男の子なのだろうか……。

到底そろには見えなくて、自分より大人に見えてしまつ。

「……ひとりで?」

麻紀が何か不満そうに聞くと、首を振つて答える。

「もともと、俺が言い始めたんじゃないんだ。たまたま家出少年見つけてついていつたにすぎない。逃げたくて、ついていつた」

「それは最後にメールをくれたときか」

「うん」

「ずっと一緒にいたの?」

「まあ、一度別れただけど……」

その後も、俺と麻紀の質問に、答えられるといひまでは答えてくれた。しかし、何処に行つたのかや、一緒に行つたのは誰だったのかまでは教えてもらえなかつた。

あまり歩とは話したことがないからか、杵島は傍でじつと話を聞いていた。

しばらく話していると、話は脱線し、どうでも良いくような会話にまで発展し、日は暮れていつた。

杵島と歩は帰る支度をする。その姿を見て、歩の父さんが言つて
いた事を思い出した。

「お父さんのもとじゃなくていいのか」

「……ああ。これ以上あの人から逃げても、勝てはしないんだ」

何をこまかうかのよひ、驚いた顔を一瞬見せては、ほほ
えむ表情になり、スラッシュと言つてしまつた。

「じゃあまたな」

杵島が戸をあけながらこちらを見て、軽く言ひ。
なんだか、その戸が閉まつてしまつて、それですべてがおわつて
しまつんぢやないかといつ不安が起きる。
何に巻き込まれてているのか。

仲間何人作れるものか。

どこまでいき、どう通常の生活に戻ればいいのか。
不安ばかりが残る中、今の現実で、歩はこれからどうあるつもり
なのか。

「歩くんは、何処まで一緒にいてくれるんだ？」

「麻紀も、やつぱり気になる？」

「ええ。梓つて子が、この先どう手を回していくかが気になつて
「たぶん、歩はその子に惑わされることはないとは思うけど
「信用できるの？」

渋い顔をして疑つ麻紀に、つづりほえみ言ひ。

「麻紀」いや、梓が何かするかもなんて、あの子と争つ意味を知りた
いよ

「だつてなんか……」

「嫉妬?」

「何であるの?」—? むしろ私がされた感じに感じないんですか?

?」

「……競つ意味が分かんない……」

(女つてよく分かんない)

「君が何をしようとも勝手かもしれないけど」

辻の家を出て、俺は杵島と家へと向かつてい。

しばらく無言だったけれど、いきなり口を開くなり言つてきた。

それは、辻と接しているときよりか、すぐく冷たい口調と皿線を向

けられる。

「あいつは何でも心配するし、なんでも信用しちゃう危なっかしい奴なんだよ」

「……みたいだな

「あ、あ、あ、あ、あ、おまえなら何を言いたいのか分かんどう?」

「下手に近づくな? 杵島さん、あなたの気持ちはすぐわかるけど、辻さんだつて子供じゃないよ。しっかりしてるし、頼りになる人さ。信用するつて言つたつて、ちゃんと信用できる人だつて確信があるんだろう?」「いいからおまえは近づくな

「醜いな

「いいからおまえは近づくな

「なつ！」

「」の人は、性格を使い分けている。きっと、これが本性。いや、もつとひどいのかもしれないが、何かの出来事で使い分けることにしたのだろう。

沚の前では、ずっとといい入るだらう。気持ちはわからなくなるまいが、いつ本性がバレルのか。その時の沚の表情と感情がとても気になるところだ。

「醜いよ。男の嫉妬」

「勝手なことばっかり言つてんじやねえよ」

「本当のことでしょ？ わざわざ本性出してまで敵意出さなくつたつて、そばであなたが守り続ければ良いじやない。違う？」

「だから俺はこうやつて……！」

「本性を出してまで敵視している？」

「……！」

何も反論できなくなつたのか、ギュッと唇を結び、黙り込んでしまつた。

「もうちょっと冷静に考えてくださいよ。俺は、つぶそうと思えば、いつでもあなた方を潰す力を得た。あなたたちも、俺を潰す力を持つていて。わかっているのに、あなたは俺に突っ掛かってくる？自殺行為だよ。そんなことを言つならば、麻紀さんは？同じ家にいて、いつでも寝込みを襲うことができる。なのに、簡単に家を出るし、こうやって俺を敵視する。先に口を付けなきゃいけないのは麻紀さんの方じやない？」

「……あの人には、沚が信頼してる」

「だから？ いつどこで裏切るかわからないのに？ そう考えたら、あなただって、裏切るかもしれない。そのために、おれらを先に排

除しようとしているかも……

「そんなわけ……？」

「……俺を疑ひのせびりでもここにさり、ロリヰタは叶わぬだよ」

杵島が、あんなにも愛想が良さそうな雰囲気をだすのは、すこしだけ疑問を抱いてはいたが、本性があそこまでかわるとまでは思つていなかつた。

だからといって何がかわるわけでもないが、どうしてあそこまで辻にこだわるのか。古い仲だとしても、ずっとあの性格で接するのも精神的にも疲れていつかボロを出してしまつんじやないか。それを考えると、何年もいるわけではないのか。だとすれば、どうしてあそこまで守りつとどまるのか。

考えれば考えるだけ、わからなくなつてくる。

守りたい気持ちは分かる。

放つておけなくて、田が離せない。理由までは出てこないけれど、感覚がそういうつている。そんな感じ。

「俺にとつて渉みたいな感じ……なのかな……？」

渉を失つて数年たつた。そして今、渉がいたらどうなつていていたのか。こんなことに巻き込まれやしていなかつたかも知れない。

でも、シャベットがどちらかにいるかぎり、巻き込まれるけどこかわりはないかもしねえ。

もしかしたら、違うとこで手を貸していた可能性だつてある。

でも……

(そんなこと考えてても……仕方がないかもしね)

家に着いたときに感じた素朴感。

お帰りという声も、同じ声も聞こえない。

ここまで、よく自殺を考えなかつたものだと、自分を誉めたくなる。

部屋に入ると、隅の方に一人の影が見える。

「ただいま。出てきていいよ」

「……歩?」

ヒロ「シ」とその影がびくついた顔をのぞかせ、俺を確認すると、安心するかのように口元がゆるみ、ホッと肩を落とす。
相当緊張していたのだろう。へナへナと崩れるように床に手をつり、じつとどこか一点を見つめてくる。

「だから一緒にくれば良かつたのに。悠樹」

「今になつてはそつ思つむ……」

今は悠樹がいる。

一度別れた悠樹が、ここにいる。

あの後オレらは、再会した。だからこそ、ここにいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2185d/>

熱の手

2010年10月11日01時56分発行